

# 岳 山

年 六 十 第  
號 一 第





# 山 岳

第十六年第一號

大正十年七月發行

## 目 次

山と日本人と

別所梅之助……………一頁

春の飛驒山脈越え

廣瀬壽雄……………一七

下廊下の記

冠松次郎……………四三

## 圖 版

○地蔵岳三角點より白峰三山を望む……………對頁

○切合附近より望める大日岳○地蔵(會津)山頂より飯豊本山・草履塚・種蒔山等を望む……………四〇

○種蒔より飯豊本山及草履塚(左端)を望む○御秘所の下段○飯豊山頂より御西方面を望む……………六四

雜 錄

○飯豐山御秘所の下端(辻本)○立山と劔岳に就て(鶴殿)○高山蘚類雜記(笹岡久彦)○山岳林の趣味的方面(山本徳三郎)○恩若峰と源次郎岳(自然)○鼯鼠談山(木暮)○岩管山の登路(藤島敏男)○日本アルプス雜詠(古家實三)○アルプス歌卷(横山光太郎)

山岳圖書批評

○あの山この山(由水生)

雜 報

○林道六萬間○日本アルプス公園地○淺間山爆發○夏季日本アルプスの氣温○登高行○廣島山岳同好會○奈川日本年の人夫賃及物價○モン・ブランの頂上崩る○エヴェレスト山探檢隊○會員通信

會 報

○第十三回小集會記事○第十四回大會記事○第十四回小集會記事○會務報告○新入會員○會員住所移轉○退會及死亡者○無効會員章番號○交換及寄贈圖書○本會規則拔萃○投稿規定

# 山と日本人と

別所梅之助

私どもの祖先は、どんな思で山を仰ぎましたか。ことばや、歌や、傳へや、山にわけ入つた人たちの上から、少しそれを尋ねて見ませう。

## 一、こ と は

古事記に「たに谿八谷、せやせ峽八尾」といふ事があつて、その尾は少くとも谿に對する高さ處でありませう。萬葉集などに「を向つを峯」とあるのも、高い處でせう。尤も

山櫻わが見にくければ春霞、峯にも尾にも立ちかくしつつなどいふのになると、「を」もやゝ低い處をさしてをるのです。

尾根といふのは、つなね大峯に對して小き峯であらうといはれます。日本書紀の「あさぢはらをそねをすぎ」の曾根を、石地と説いてゐますが、背峯かと思はれます。即ちをねと同じ地形についてをるやうです。横根は横はれる峯です、横山と同じやうな使ひ方でせう。松尾、梅尾などは、松、梅のはえたる峯でせうか。「つるね」「つるを」いづれも高さ地點をさします。これも「ね」といふ語が、山のことなへであるからでせう。「をか」とは「を」の處です。

足引の峯のたをりに、射部立てて鹿まつがごと、わがまつ君を犬な吠えそね 萬葉、十は、古人の生活のしのばれる歌です。その「たをり」また「たわ」とは、山の撓めるあたりで、そこを鹿が通ふのです。通ふから、射手の群が控へてをるのです。

「なぎ」も「がれ」も、若い谷をいふのです。「がれ」は「から」かもしれません。「かれ」は水の涸るゝにも通じます。澤といふと水をおもふせいとか、水のないのを涸澤かふさくといひます。これが輕井澤の語源かも知れませんが、やつ「やと」いづれも谷をさします。熊が谷は隅すみの谷でせうか。穴を「ほら」といふより、谷の奥をも、洞ほらといふやうです。

山の根をゆくには、土をへつりとるものであります。今、山の直立せる如きわきをつたひゆくを、へつるといふのも、それから出たのでせう。

つま木こる道たえぬらん、み吉野の山のとほらに降れる白雪

平 時範

といふもあり、

われのみぞかなしとは思ふ波のよる山のひたひに雪のふれば

實 朝

といふもあり、山の裾、山の腰、山の鼻、山の眉など、いづれも人になぞらへての言ひ方です。「高山の末、短山ひくやまの末」と中臣の祓などていふのは、麓に對するいたゞきであります。

朝にけに霜はおくらし高まどの山のつかさの色づくみれば

萬葉、十

の山のつかさは、峯であります。尤も山守をも山のつかさといひます。

いにしへに思ひ入りけんたよりなき山のふくろのあはれなるかな

赤染衛門

の山のふくろは、山ぶところと同じほどの地形をさしたものでせう。

山のかひそことも知らず、おとゝひも昨日も今日も雪のふれゝば

よみ人しらす

のかひは、もとより山間やまのまです。山窓といふ語も、かなり古くからあつたやうです。「あさか山かげさへ見ゆる山の井」のといふのは、堀つた井ではなく、自からなる水溜りです。東北地方の山地に「もり」といふ地名多きが、木のある森ならで、盛りあがるもり、山をさす語でせう。朝鮮語では、山をモイといふさうです。

萬葉集では草山の事を青菅山といつてますが、よい名です。春の山笑ふが如く、冬の山眠るが如しといふ支那のおもひは、日本にはひつて

よきものを笑ひ出したたり山ざくら

乙 由

など、俳諧の季になつてゐます。春山の霞男かすまろ、秋山の下氷男したひをとこのつたへは、古事記に出てゐます。あれでは秋が兄、春が弟で、花のやうな美人をうるのは春であり、病になやむのは秋であります。これは春の山の花をひらき、秋の山の木の子葉のおつるのを説明したものかと思はれます。奈良の人には都の東の佐保山が春、西の龍田山が秋、佐保姫、龍田姫といづれも女性でした。

## 二、山 の 歌

萬葉集には、山をたへた歌が、いくつもあります。誰でもしつてをる

天地のわかれし時ゆ、神さびて高く尊き駿河なる不二の高根を……

萬葉、三

と起してある赤人のにしても

なまよみの甲斐の國、うちよする駿河の國と、こちくの國のみ中ゆ……

萬葉、三

ではじまる蟲麻呂のにしても、純粹な山のたへうたです。大伴の家持の

あまさかるひなに名かゝす……

や、

朝日さしそがひに見ゆる……

の二首も、赤人らの作にならうて、立山をたへたものであります。さういふ歌は、とにかく全山をよまんとしたものであります。

短いと言へば

しほひれば玉藻かりつゝ神代よりしかぞ尊き玉津島山  
などもさうです。

萬葉、六

みもろは人のもる山、下へには馬醉木<sup>あせび</sup>花さき、末へには椿花さく、うらぐはしき山ぞ、  
泣く兒もる山

萬葉、十二

は、人妻をよんだのかも知れませんが、表より見れば立派な山のためへ歌です。  
然るに後になるにつれて、

萬葉、十四

わがせこを大和へやりてまふしたつ足柄山の杉の木の間に  
の脈をひいた、天然に人事にからませた歌でなければ、胸にひびかぬやうになりました。いや人事を  
うたふに山嶽をつかふといふやうになりました。さうでなければ、

葛城や外山はかすむ山の端にまだ雪しろし春のあけぼの

慈 鎮

といふやうな倭繪めいた歌が多くなりました。そして

爲 兼

及びかたく高き姿をあらはして山といふ名はありはじめけん  
といふやうな抽象的な歌を見ると、違つた所へ來たやうになりました。つまり思を山によせた歌と山を  
ながめた歌とが多くなつたので、たゞへ歌はまればくになりました。それで修行者以外には、しみく  
とした山の歌をよむ者が少くなつたやうです、従つて深山の風物をよんだものは、さう多くはありま  
せん。たゞ

しら山の松の木かげにかくろへてやすらにすめる雷の鳥かな

後鳥羽院

哀なり越のしらねにすむ鳥も松をたのみて夜をあかすらん

家 隆

の二首が、加賀の白山のハヒマツと雷鳥とを、人づてにきいて詠んだのであります。  
然しながら、何といつてもそのかみは、山野の風物が人にせまつてゐました。

松の尾のみね静なるあけぼのにあふぎてきけば、佛法僧なく  
の静けさや、

さらぬだに寢覺の床のさびしきに木づたふ猿のこゑさこゆなり

光 俊  
俊 頼

のさびしさがありました。みやまがらすの鳴く音、妻よぶさを鹿、いづれも歌人の情を動したのです。

### 三、山の傳説

我をもて彼を計るは、人の世のつねでありますが、古への人は、己と類をことにする物をも、己に似たるものとして計りました。人の世に妻あらそひがあります。それで山も妻をあらそふといふ傳へが生じました。

萬葉集(一)の

香具山は畝火ををしと耳梨と相争ひき、神代よりかくなるらし、いにしへも然なれこそ、うつせ身も妻をあらそふらしき。

かぐ山と耳梨山とあひし時、たちて見に來しいなみ國原

といふ歌も、人事を山によせたのでせうけれど、つたへは、作者たる天智天皇ごろよりはずつと古く、奈良平原の人々の間に存してゐたのでせう。高さ僅に二百メートル前後の丘陵ですけれど、飛鳥川のほとりに住みて、朝夕この三山を仰いでおつた人々には、山もあらそふと思へたのでせう。

この三山の中、香具山と耳梨山とが男山で、畝火といふ女山を得んとしたと説くのが、普通の説で、畝火を雄山とする人は「畝火を愛し」てなく、「畝火雄々し」とよむのです。それだと、かぐ、耳梨の女山同志が、男々しき畝火をえんと争ふのであります。畝火は他の二山よりも大きく見えますけれど、雄山が雌山より小さいのは、筑波の双峯にしても、秩父の男獄、女獄にしても、さうですから、これは、かさ

だけでは極められませぬ。男山と女山とを、そこをしめてゐた男神、女神ととく説もありませぬけれど、私はさうでないと思ひます。「畝火のみほど」といふ語にしても、また前にあげたいくつかの語にしても、山を人のやうにおもつた名残があらうと存じます。

陸奥のつたへでは、岩手山と早池峯とは男山、姫神山は女山であります。岩手の妻なる姫神山を早池峯が欺いて、わが物にしたので、岩手は憤つた。それで早池峯と姫神山とが晴れれば、岩手は曇るといはれてゐます。これは盛岡あたりの人の間に發達しさうな想であります。姫神山と岩手山とは、北上川を挟んで東西に相對し、早池峯はやゝ離れて姫神の東南にあります。高さは岩手最も高く、早池峯之につき、姫神また之に次ぎます。東の山々晴れても、西の岩手曇れば、お天氣が變りませう。これ一には氣象の變を示すつたへてありませう。

さうかと思ふと、その岩手山が妻なる姫神山を厭うて、わが目にかゝらぬ處につれゆけと、送り瀬といふ山に命じたといふ話もあります。送り瀬が進まぬ足の姫神山を送りかねたので、岩手は怒つて水を噴きました。それで草も木も、皆焼けました。その上、送り瀬は岩手に首をはねられてしまつたといふのです。これは山の姿を、たゞずまひと説明したのでせう。

#### 萬葉集(七)の

人ならば親のまなごぞ、あさもよし紀の川づらの妹と背の山

も、優しい想です。越中には「めうと山」といふのがあります。大和の雌雄嶽めをがたかは峯が二つに分れてゐます。

二子山といふのは、よほどあります。上野、下野に跨るのもあれば、箱根の二子山もあります。大和、河内の境なる二上山ふたかみは、雄嶽、雌嶽に分れて、二子山とも呼れます。豊後にも兩子山ふたごといふのがあります。總じて峯に神を祭るのみならず、かゝる二つの峯があると、その兩者の相接する處をか

しこんで、そこにも神を祭りました。一つには、そこが人の通る峠であつたからでもありません。

石見津和野のほとりに妹山あれば、筑前、肥前の境に背振山といふのがあります。日向に親父山あれば、薩摩に母嶽があります。信濃から越中にわたる祖父嶽あれば、豊後、日向の境に祖母嶽があり、祖父嶽は越中にもあります。この山々の地名は、よく調べたのでありませんけれど、人が山の人間味をみとめたのが多いでせう。小笠原列島などは、近代の人が名づけたのですけれど、父島、母島、鵝島をはじめとして、兄島、弟島、姉島、妹島、さては媳島、姪島など、よくまあ考へ出したと思はれるほどです。そんな時には、昔の人のおもひが、今の人の心にいきかへつてくるのでせうか。

さてその人間味ある山々が睦ましくしてゐるかといふと、妻あらそひ以外に優者たらんと争ひをもします。

近江の伊吹山は、あんなに堂々たる山ですが、あれは昔淺井岳と高さを争うたといふ話があります。淺井岳とは多分虎御前山の事だせう。何にせよ、一夜の中に淺井岳が大きくなつたので、伊吹山が怒つて劍を抜いて、淺井比賣の頭をきつたさうです。その頭が琵琶湖におちて、竹生島かになつたのです。淺井姫は夷服神の姪だとかいふのに、かう争ひます。伊吹山と虎御前山とは、大小の懸隔があまり甚しいけれど、或は懸隔が甚だしいから、淺井あたりの人がかういふ想を抱くやうになつたのかも知れません。このつたへは可なり古いのです。

陸奥の八甲田山も、東嶽の首をさりとしたさうです。

私は以前三河の豊橋にゐました。豊川の岸べに立つて仰ぐ對岸の本宮山は、群山の上に聳えてゐます。その右手、川上の方に石巻山といふ小さいけれど、ちよつと槍が嶽のやうな恰好をした山があります。そのこの嶺の槍は、石灰岩であります。この二つの山の間にも、いづれが高いかといふ争ひがありました。それで此れらの山へのぼる人が里から石をもつて登れば、今でも疲れないといはれてゐます。

私は石のかはりに玉子をもつてゆきました。この石をもつて山にのぼるといふならばは、ひろくゆきわたつてゐます。轉じて落ちた石や、砂が、一夜に山にかへるといふのもあります。泰山は土壤を譲らず、故によく其の大をなすなどいふ事をしりさうもない日本の山も、かう物惜みをします。

越前大野の荒島山と飯降山とは、ほど近くにあつて、飯降の方が小い。それで五月のお節句に飯降へおまゐりする人は、土石を運んで山にのせるさうです。子どもや、年よりなら砂でもよいのです。さうすれば願がかなふさうです。

丹波の御千嶽は近くの松尾山より低いので、山の神様が、それを心うく思はれる。それでお参りをするものは、自分の年だけの石をもつてゆくさうです。これでは年よりを拒絶するやうで、飯降より下手です。

肥後の熊本のをばの金峯山きんねさんと飯田山とは、いづれも自分が高いといふ争ひから、兩山の巔きに懸樋をわたして水を流してみました。水が飯田山の方へ流れて、その水が今の山の上の池となりました。金峯山が勝つたのです。篁をかけるとは大分文明が進んでゐるやうですが、兩山の間には篁をかけて高さを決するといふ傳へは、随分あるやうです。

後年小山田與清が「富士は雄山なり、物を産せず、伊豆の天城山は雌山なり、物を産する事多し」などいひましたのは、木の雌雄をおもひ、また富士と筑波とを對照させた古いつたへを考へたのかも知れません。私などは木の花咲や姫の縁で、不二を女性とおもつてゐたのです。

不二、筑波を對照させたつたへは、風土記にあるので、誰も知つてゐます。即ち祖神が不二にとまらうとなすつても、新嘗のをりですからとて、不二ではお断り申しました。筑波へゆかれたらば、その神がおとめ申しました。それで情しらぬ不二は、寒く、人のぼらざれ、筑波は榮えよ、人のぼれといはれたので、その通りになつたといふのです。もとより不二に登る人のなかつた大昔の思ひです。

聲高くみかさの山ぞよばふなる天の下こそ樂しかるらし

拾遺集

といふ賀の歌があります。山が萬歳をとなへるのは、支那から來たおもひで、天下泰平をあらはすものであります。もとの山彦らしうございます。

山が夜の間に大きくなるといふのは、前の淺井嶽ばかりではありません。信濃の聖嶽ですか、どこですか忘れましたが、夜する／＼と大きくなつてゆくのを、お婆さんが見て、おや、山が大きくなると言つたら、びたりと山の生長がとまつたさうです。なんでもかういふものは、人が心づいたり、聲をあげたりすると、生長や、産出をやめます。それが傳説の國の掟です。これなどは洪水傳説の中の南アメリカのアマゾン流域のさる土人のつたへ、水がまし、山がかくれて、人々は皆死んだのに、さる兄弟の逃げた山だけは、水のますにつれて、高く／＼なつたので助かつたといふのと、山の生長する點だけは似てゐます。

古書に山が移るとあるのは、地すべりの事らしうございます。地が震うて新に山の生じたのを、則天武后の時代にめてたいといつたら、女が陽位にをるから山が變じたのだと言つた人があつたさうです。

山の飛ぶといふのは、磐梯山の破裂のやうな事變をさしたのでせう。もつとも昔の人は、吉野山は天竺の鷲の御山が半かけて、五つの雲にのつて、この國に來たのだと唱へました。鷲の御山の方が吉野よりずつと小うございませうし、天竺から日本まで飛ぶのでは、形而下の學問の範圍を超えてゐます。しかしそれであるから、山が直ちに樂土なのであります。

支那には盤古といふ巨人が死んで、その骨が山となつたといふ話があります。これはスカンデナヴィアのヤミルが殺されて、その骨が山になつたといふのと同じ流の天地開闢説です。そしてインドにもかゝる想があるときゝます。

## 四、山 ぶ み

山へははいらねばならず、はいると危い事もあるので、古人は山口の祭といふ事をしました。山へはどこからでも登れるといふものでありませんから、山にはいり得る地點で、九月のお節句かに、山の神を祭つたのです。祈年祭しごひまつりにも「山口にます皇神」とあつて、古いならはしてせう。山から出るものは、むづかしく言へば、

たゝなはる青垣山の山づみのまつるみつぎ

と思はれてゐました。それで木を伐り出すにも、獵をするのにも、この神を祭りました。「山の王やまのわみ」といふのも、山の神ださうです。

柚人は斧にみてぐらとりそへて木祭りすらし谷ふかく入る

公 朝

といふのは、この祭のさまです。柚は木を皆伐るのでありません、それ／＼の作法があります。柚は山たづ即ち手斧を用ゐました。それから轉じて柚の事をも山たづと申します。

むさゝびは木ぬれもとむと足引の山のさつをにあひにけるかな

萬葉、三

のさつをば、無論獵師の事です。こんな山の幸さちをもとむる人は、山杖だの、山あふごだのを用ゐました。山杖とは後の金剛杖で、アルペンストックといふのと同じいひ方でせう。下つて一代男の世之助は、信濃の山賤に、山あふごでぶたれてゐます。山守部といふは、山を守る部の民でした。

山にすみつく人も可なり古くからありました。それが平原の人と交渉するをりに、大分強い力をあらはしてゐます。太平記などにあらはれる十津川あたりの人たちの行動も、その一例であります。さらに後になつて、平野にもつと統一的な大勢力が起りました。山の人たちはなか／＼屈しませんでした。寒い處では山住も出來ますまいが、九州などでは、今よりもかへつてある時代に山地に人がゐ

たくらゐでないてせうか。さういふ人々は、地侍だの、郷士だのと、後にいはれたのでせう。肥後で佐々成政がいぢめられたり、加藤清正がもてあました一揆といふのは、それでありませう。山の精神をうけた不撓の兒は、スウイスのみにゐたのでありませぬ。

山に入る樵夫や、獵師から、私どもは、山男、山姥、山こ、山女など不思議な話をつたへられたのであります。その中にはえぞの人たちもありましたらう。

かゝる生業すまはひの爲の山ぶみの外に、山伏の群がありました。

役の小角の事跡は、容易に知りがたうございますが、傳ふる所によれば、大和の國葛上の郡茆原の人、三十二歳にして家を出て、葛城山に入り、藤の皮を衣とし、松の葉を食し、岩窟にこもる事、三十餘年、心の垢を去りて、通力を得、鬼神をつかひて、葛城より金峯にかよふ道を拓いたといふのです。小角の生れた年月には、五六種の説があるやうですが、とにかく西暦でいへば、七世紀の末の人です。千二百年もまへに生業の爲ならで、深い山にはひつたといふのですから、日本人の山ぶみは、世界の登山史で大分古いのです。小角は大峯から熊野、熊野から大峯と三十三度修行したといはれてゐます。

小角の道を傳へてといつて悪しくば、小角を祖とする者が二派あります。一は三寶院聖寶を中興の祖とする當山派で眞言宗に屬します。吉野の金峯山は、小角の後、入るものなくして路塞がれるを、聖寶が寛平元年、即ち西暦で八百八十九年ごろ、大峯に入りてより、後人入るを得たりといはれます。

一は義覺、義言など、五代山伏その他を経て、天台宗聖護院の増譽に至つて榮えたもの、之を本山派といひます。増譽は聖寶よりは二百年も後に生れた人で、初めて熊野三山の別當にあげられました。西暦でいへば十一世の末の人です。西洋で早い記録の中になつてゐるカンタベリーの僧ジョンが、グレート、セント、ベルナードを横ぎつたのでも、十二世紀の末であります。増譽のあとは大方三

井寺の長史がつき、三寶院の方は重に東寺の長者へ傳つたらしうございます。そして修驗道の獨立の禁ぜられたのは、明治五年のことでありませう。

山伏の峯人は四月と七月と兩度にします。本山派では熊野からはひつて大峯にいて、當山派では大峯から熊野に出ます。吉野熊野間二十餘里、とまりといふとよいやうですが、岩屋その他の露營地が非常に澤山あつて、そこを長くわたりゆく事は、容易ならぬ難行でした。そして難行なるが故に尊まれました。

山伏のほらふく峯のゆふぎりにそことも知らぬすゝの上風は、そのかみのさまを想はせませう。

寂蓮

山ぶしの岩屋のほらに年ふりて、昔にかさなる墨染の袖も、あながち空想でありませんでした。みたけの笙のいはやといふので詠んだ歌が、いくつも選集に出ています。

後京極攝政

寂莫の昔の岩戸のしづけきに涙の雨のふらぬ日ぞなき  
草の庵なにつゆけしと思ひけんもらぬ岩屋も袖はぬれけり  
など、それです。

日藏  
行尊

今は我くるしき老の坂こえてまた分けわぶるすゝの下道  
とは、老いて身の自由ならぬをわぶる老僧の歌です。

道昭

山の修行者の中では、行尊は歌人でした。

もろともにあはれとおもへ山ざくら花より外にしる人もなし  
とは、大峯で修行してゐたころの歌です。

見し人は一人わが身にそはねどもおくれぬものは涙なりけり

は、同行たちの皆かへりて後、たゞ一人となつての歌であります。參議源基平の子と生れ、十二歳にして圓城寺にて得度した彼は、多感な人物でした。彼は四方を遍歴して心の安居を求めんとしました。身をくるしめて、佛に近かんとしました。

吉野を愛した歌人西行も、天台の僧に随つて、大峯にいつたと申します。行者がへり、三重の瀧、いろ／＼な處でよんだ歌が、山家集に残つてゐます。

役の小角が優婆塞でしたし、それに修驗道はその存在の理由を佛説に求めんとしたのでありませうから、行者は清僧のみではありませんでした。百八の珠數、柴打の劍、背には笈、腰には筒といふやうな姿とて、はじめから皆々整うてゐたわけでもありません。尤も柴打は是非入りましたらう。筒は青竹をきつて、中に飲料を入れたものです。

謠曲の「安宅」では

それ山伏といつば、役の優婆塞の行義をうけ、その身は不動明王の尊容をかたどり、兜巾といつば五智の寶冠なり、十二因縁のひだをすゑて戴き、九會曼荼羅の柿の篠懸、胎藏黒色のはゞきをばき、さて又八つめの草鞋は八葉の蓮華をふまへたり、出て入る息にあうんの二字をとなへ、即心即佛の山伏……

と、辨慶だけに威勢がようございませうけれど、おなじ物でも「谷行」を見ると、松若といふ少年が峯入の途中で病氣になつたとて、谷行といつて、谷におとされます。それが大法であるとの事です。それでも行力でよみがへるといふのですけれど、昔の峯入は容易ではありませんでした。笠捨山に笠をすて、杖捨に杖をなげうつ。さうして、母胎を脱離し、親の縁をはなれ、新に生きて、やがて静けき定に入らんといふのです。方々の山に胎内くゞりといふのがありますが、あれは昔の人には、ばか／＼しい所の沙汰でありませんでした。松若にいはすれば、「此の道に出てて命を捨てんことを尤も望む

所なれ」で、よほどスバルタ風の鍛練でありました。

餘談にわたりますが、私の友人が明治二十四年の九月八日、伊那(坂下)から木曾駒に登つて、夜、暴風雨にあひ、五日の朝、農が池のほとりのハヒマツの中で、最後をとげました。(これはたしかウェストン氏の Japanese Alps にも出てゐます)そのをり山から下りてきた二組の參詣の人々があつて、先達らしいのが、私の友人に餅を與へましたが、食する氣力のないのを見て、どうも、よく／＼罪の深い人だなと申したさうです。その先達が友人に頼まれての報道で、里から救助隊が出て、一行三人の中間人は助かり、友人は十日まで見つからずにこの世を去つたのですが、どうも斃れる者は斃れるのだといふ宿命説やうのおもひが、山伏、行者の哲學にあるのではないでせうか。(尤も宿命説は東洋人共通の想でありませう)それに助からぬものを助けようとして、全隊をほろぼすまいといふ考もあらうかと存じます。そのくせ、死人でもあれば、山がけがれるといふ事をも、私どもはさういふ人から——これまた日本古來の想ですが——さくのであります。私の知つてをる範圍では、行者は境遇に教へられて、飯粒をのこさぬなど、穀類を粗略にしませぬけれど、眼のするどい、随分コンマンデングのものであります。苦行に堪へねばならぬ身とて、苦行何者ぞといふおもひもありませう、我らのみ堪へえたりとする誇りもあるかもしれませぬ。まあ、もとへかへりませう。

平安以降の物語には、驗者だの、驗くらべだの、御嶽精進だの、千日の行だの、さてはいかゞはしきえせ山伏などの事まで、數々出てゐます。然し悪い方面は言はないでもよいでせう。

さて何の爲に山に入るのでせうか。

山路にてわが斧の柄はくたしてん、うき世の中はこりはてぬれば  
と山にひかれたのでもありませんし、また

長き夜の曉をまつ月かげは幾重の雲の上にすむらん

行 尊

隆 辨

と高きに向つたのでもあります。

高峰深山最勝の地を求めて、道を修すといふのが、ありふれた言ひ方なら、さういふ人のある者は、身を山嶽に投げつけたのであります。病などとは、心にたゆみある故ぞ。身體つかれば、心かへつて樂し、諸天は行者を助く。斃るゝ者は冥罰を被るなりとまで思つたやうです。

人は形體の故郷へも、心靈の故郷へも、歸らうとするものであります。わが身をくるしめて、はじめて佛の慈悲を知る。かくまで我をうごかす所、これ即ち佛地とおもはれたのでせう。信念は日本の吉野をも、釋尊の教を説かれたる地となします。西行も轉法輪の嶽で、

こゝこそは法とかれたる所よときく悟りをもえつるけふかな

と歌つたといはれます。それで吉野は天笠の山が、おもひの雲にのつて飛び來れるものとなります。靈鷲山は隨所にあります。峰入は佛蹟の淨土に入つて、物を佛となさんとするのであります。

「あもりつく天のかく山」と、日本人は香山を天から降れるが如くいつてゐました。みもろを神の山としてゐました。かゝる人々中に、金峰山が閻浮提金の山なりとは、さう解しにくい事てなかつたてせう。

なにせよ、かゝる心の人たちが、山に道をつけました。諸國に靈地を開きました。日本の吉野が鷲の御山なら、おのがすむ里近きあたりにも、その吉野はあつてよいてせう。聖武帝は野に國分寺をたてました。修験者たちはおのが山に御嶽を見ました。それで吉野の御嶽になぞらへて、一國一處の國峰くにみねを起して、修行の道場としました。武藏、甲斐、信濃のは、いふまでもなく、國々に御嶽みづか、御嶽みづか、金峯山きんぼんざん、金峯山などいふ山の多いのは、この修行者たちが行をしたからであります。こがねの山といふのにも、さういふのがあるかもしれません。國見嶽といふ名の山は、西部日本に多くありますが、國見をするのによいからのもありませうし、國の御嶽みづかのこともありませう。肥後の白山嶽など、さうらしく考へ

られます。武藏の御嶽にしても、役の小角が開いたといふのですけれど、それは修行者からは不自然でないので、小角の徒が開いたのでせう。熊野権現もかくして、方々に勧請せられました。もつと遅いかもしれませんが、彦山は聖武天皇の御代の人なる壽元が開き、石槌山は孝謙天皇の頃の芳元が開いたとつたへられてゐます。

かゝるおもひが羽黒にまうづる人々をひきました。彦山をも尊ませました。須彌山の譯なる妙高山を、日本の山につけさせました。不二山を靈山としました。國の軸だの、地の中心だのといふインド傳來のおもひを養ひました、尤もある山を「おたけ」とするのはよほど古くからの想です、佛説もその説明に用ゐられたのです。

ほかの話ですが、イスラエル人には、山は神の力をあらはすとの想がありました。それで「神の山」もしくは「神のさよき山」といふことを稱へました。「イスラエルの高さ山」といふと、神の王國を示すものでした。尤も國が山地で、都まで小山の上にあります。エホバはシナイの山の神なりといふ人もあります。それも古への日本人のに近いおもひでせう。

神皇正統記に、昔は人が山に住んだから、この國を山止やまどといふとあります。當否は置いて、そのやまと民族は、庭に必ず築山をきづき、池を掘る人たちです。その人々は、山を人らしく見たり、山を神の地とおもつたりしました。相當に山になじんでもゐました。そして今また山に親しまんとするのてせう。



影攝氏郎四飲本橋

む望を山三峯白リと點角三嶽嶺地



# 春の飛驒山脈越へ

廣 瀬 壽 雄

大正九年三月三十一日、金澤を出發して富山より船津に入り、澤田武太郎、石川元雄、若林唯四郎の三君と共に更に平湯に至り、乘鞍岳に登り、安房峠、燒岳を経て、上高地に下り、徳本峠を踰へ、島々より松本に出て、大町、長野を過ぎて、四月九日金澤に歸著す。案内者兼人夫としては村山鶴吉、同清二郎、岡田長次郎の三人を雇ひたり。

## 高 原 川

飛信越の雪の山岳に憧れて出たこの旅の初めの程は、霧の王國のさまよひであつた。北國の梅花の間に漂うてゐた霧は、山又山の谷間にも深くとぢ込めて、白金のやうな雪の山に、靜かに靜かにとさゝやくかのやうに、霧のやうな春雨が音もなく降りつゞいた。

富山から飛驒へと神通川に沿うて上つた吾々は、黒部川を聯想せしめるその川の水量が、餘りに多く且つ濁つてゐるのを不思議に思つた。如何に山深い山國のゆきしる(雪融の水)とは云へ、餘りに水量が多過ぎると思つた。處がそれは、平野の國に春の陽光が流れて、悠揚とした野邊に種が芽生え、卷葉が開き、のどかな雲が浮んでゐる時、山國の谷また谷の間に深く立ち罩めた霧が、春雨となつて音もなく靜かに幾日も吾々の知らぬ間も絶えず降りつゞいてゐたからであつたのだ。

瀧津瀬となつてたぎり落ちる神通川を溯ると、宮川と高原川とに分れる。宮川に沿うて上れば、飛驒文化の中心地である高山盆地に達するが、高原川に沿うて行けば、山の中心地帯に近い平湯温泉に導かれる。この川の上流で人間の住み得る最も山奥の平湯温泉が、今度のアルプス越の策源地なので

ある。

この高原川と宮川と合して神通川となり、飛驒の水が越中の水となる處こそ、あの有名な「飛驒の籠渡し」として北齋や廣重などの浮世繪にまで、飛驒の代表的名所として、威嚇的な空想的なロマンチックの光景が盛んに畫かれた所である。今は國界橋といふ立派な橋が架つてゐて富山へ八里、船津へ六里、高山へ十四里。

この國界橋から船津まで六里の間は、高原川峡谷で、川の壯年期の相貌を遺憾なく現はしてゐる。即ち峰は高く、谷は深く、川の猛烈な浸蝕作用は、益々河底を狭く深くしてゐる。横山の千貫橋、土（どうと）ふのは溪流の合流點を呼ぶ普通名詞であるが、此處ではそれが固有名詞となつて地名である）の跡津川橋のあたりの光景は、正しくその典型的風光を示してゐる。そして、それらの橋は、谷の建築美を虹のやうに虚空に誇りかに現はしてゐる。また、支谷の浸蝕作用は本流のそれに劣るからして、勢ひ瀧となつて落ちる。東漆山の對岸の不動瀧などはそれである。また二ツ屋の對岸のモリモ谷、切雲谷などの水が、丁度數千の白鼠がはしご段を一勢に飛び下るやうな姿で本流に合してゐるなども、この川の壯年期の造る特徴である。

鹿間の神岡鑛山に近づくにつれて、此の高原川の自然が何となく荒寥とした淋しさを現はして來た。自分は不思議に思つた。如何に冬の目ざめの遅い山國とは云へ、餘りに淋しく、死の影さへ漂はしてゐるではないか。芽生えせぬ闊葉樹は只眠つてゐるばかりでなく、全く枯死したのさへ交つてゐた。道ゆく人に聞くと、それは鑛山の煙のために木が年々枯れてゆくのだといふことであつた。

鑛業の發達も人間の生活には望ましい事で、ことに日本に於いては切望しなければならぬ事でもあらうけれども、このやうにして自然の生き生きとした美しさが破壊されて行くのは、誠に嘆げかしい事ではなければならぬ。ラスキンも、英國は石灰殻で兒童の遊び場をこはして行く、と嘆いたが、鑛

業には常にかうした弊を伴ふ。

神岡鑛山の大きなからくりを見てから、吾々が第一旅行班と一緒に殆ど三十名ばかりで、どやくと船津の柿下屋かきしたやに入つたのは四月一日の午後五時頃であつた。

其晩からまた降り出した春雨は、朝になつても依然として降つてゐた。去りがての炬燵から出て、朱塗の膳に向ひ朝飯をすましてからも、直ぐ出發の用意にとりかゝる元氣もなかつた。

純樸その物といふやうな山國の人が、吾々の朝の出發が早いと云ふので殆ど徹宵して用意をしてくれたにも係らず、雨に出ばなを挫かれた吾々は六時半になつても、七時になつても出發しやうとはしなかつた。が、愈々観念して出發したのは七時四十分だつた。

二十三名の第一班の連中が盛んに成功を禱つてくれて分れ、愈々たつた四人だけになつて船津の町をはなれ、高原郷の段丘を行く時、雨はしよぼく降るし、それはしみじみとした淋しさになつた。それに邊りの自然の有様まで晩秋の風物を思はせる。が、しばらくすると、吾々だけの世界がしつかり決まつたやうななつかしみも感ぜられた。都會の梅はもう盛りが過ぎて、兼六公園の櫻の花が開きかけてゐるのを後にして來たのに、こゝでは秋の紅葉が散りさらぬ内に雪が來て覆うてしまひ、その景色がそのまゝ又現はれてゐるのだ。降りしきる雨の中に、去年の葉が枯枝に赤くついでゐるのが、しめつぽく見える。

船津から、蒲田川かほだがはが高原川に合する栃尾とちおまで七里の間は、高原川の段丘が非常によく發達してゐる。殊に在家、宮原、見座、吉野の邊は、段丘が模型のやうに著しく發達して二段、三段と、舊河床の紀念を残し、奥飛驒の高原中の高原の情味がよく現はれてゐる。路は此の段丘に、川の兩岸ともに通じてゐるが、左岸の路はまだ残雪が多く、通行に困難であらう、といふ船津町の人の忠告に従つて右岸を行つた。高原川はこの幾段にも壘を重ねたやうな段丘の中を深く切り込んで流れてゐた。

春雨が絶え間なく降りしきる上に、重いリュックサックは肩の筋肉にめり込むやうに痛覺を鋭敏にした。坂牧、麻生野、數河などの部落を過ぎて、凄い傳説に充ちた雙六谷の入口の中山に着いたのは十時十分であつたが、少しでも荷を軽くしたいといふねがひと、雙六谷の傳説を土地の人に、飛驒のアクセントで物語らせたいといふから、中山橋のたもとにある寸方のつまつたむさくるしい茶屋に休んだ。晝にはまだ早かつたけれども、飯を食ひながら、茶屋のばあさんに色々物を尋ねて見たけれども「知りませんでなあ」の返事で期待は裏切られる。

高原川が上流から濁つて來るに係らず、雙六川は、磁器に見るやうな魅力ある薄綠色に波立つてゐた。子供が夜泣きをすると、母親が「泣くと、それ、黒淵の主が來るぞなあ」と抱きすくめてすかし、物心ついたばかりの子供に恐怖といふことを覚えさせる、といふその黒淵の恐ろしい水が流れて、中山の橋の下で、ぐるぐるとうづ巻いてゐた。「知りませんでなあ」といふ言葉で口をつぐむこの茶屋のばあさんも、流石に、黒淵の事や、盤の石のことや、材木岩のことは知つてゐた。そして金木戸や原、山吹の方へも子供の時分行つた事があるが、おそろしい所だと云つてゐたが、この谷に充ちた凄い傳説には餘り興味を持つてゐるらしくもなかつた。けれども、大昔から神秘と驚怖と畏敬の情を人類に起させながら、雙六川の水は、時の流れのやうに、永久絶える事なく流れ流れては、更に新しい傳説を生んで行く。

このみすばらしい茶屋を出てから、雪融け後、まだ修繕もしない、ごちや／＼の泥道を行つた。谷いつばいに立ち罩めた霧は、少しも晴れる見込さへ見せずに、雨は依然として霧の中から細々と降つてゐた。マントの羅紗が雨を吸ひ込んで非常に重くなり、それがリュックサックに加はつて益々肩を痛める。長倉で焼岳が見えると土地の人は云つてゐたけれども、雨の爲に凡てが目かくしされてゐた。水の浸蝕で出來た杖石が、黒部の鐘釣山を小さくしたやうな形で川の中に立つてゐた。下澤谷、笠谷

などの水が、あわたゞしく高原川の本流に走り出てゐる。

### 平湯への途

蒲田川が高原川に合する折尾は、平湯温泉と蒲田温泉との中心であるだけ、山奥の割に開けてゐる。この邊までは荷車も不十分ながら通ふので、道もとにかく歩けたが、蒲田川に架けてある橋を渡つて一重ヶ根いちむねに行くくと、道は全くの雪路となつてしまつた、平湯まで二里しかないと云へば、今は四時半であるから、急いだら、六時には着けやうと思つた。

雪に降る春雨の静けさ！ 萬象は明るい眞夜中のやうに、ひっそり閑と静まり返つてゐる。細枝に並ぶ車は、靜かに這つてポチリポチリと雪に落ちる。雪國に生れた自分は小供の時分よくかういふ春雨の日、庭の梅の枝に並ぶ滴を見つめて空想的な氣分にひたつた事があつたがと、そんな事が思ひ出される。路は數日前に初めて人が通つたかと思はれるやうな、カンジキの跡が残つてゐるさうで、その少し小高くなつてゐる跡を踏まないとズボリと膝までぬかる。

雪の高原に立つ白樺の林、落葉松の人造林、杉の植林地、それらに注ぐ春雨の静けさよ！ 自分はその蠱惑的にも又奥ゆかしい趣致に、しばらくは疲れも忘れて眺め入つた。一面の雪、何處を見ても雪だ。路は大きく波打つやうな高低でだんだんの登りである。

雪路の夕暗が靜かに音もなく邊りに舞ひ下つて来る。雨は降るし、腹はへるし、荷物は益々重く、路は盛んにぬかる。

苦しくも降り来る雨かみわがさささぬの渡りに家もあらなくに

この萬葉の古歌を讀む者は、鮮明な印象を受けて、誰でもある享樂を得るであらうが、その實際の難儀の最中は、只もう泣き出したい位である。四人とも顔を見合はして黙つてゐる。孤獨の感じ！ た

つた四人だけの世界だ。が、とにかく平湯までは、どんなにしてもたどり着かなければといふ考で、とある丘へ登りついた。五時二十分。もうどの位あるか分らない。雪の上へどつかり腰を下ろしてドロップやキャラメルをむさぼるやうに攝つた。バロメーターの指針四千呎。溫度攝氏五度。

それから吾々は登つて一つの丘に出る毎に、呼子笛を一齊に鳴らしたり、満身の力をこめて四人が叫んで見たりしても、その音響は木々を通じて雪の面を谷から谷へと木魂になつて消えて行くだけで、只谷底深く、高原川の水が自然の命のやうに操音を起してゐるばかりである。微かに認めるカンジキの跡の外、人間の存在を知らせるものは一つもない寂寥の世界である。山深い雪の中に暮果てる恐怖は遠慮なしに押しよせて来る。日頃原始を慕ふ吾々も、やつぱり人間が戀しいのだ。人は相互扶助でなければならぬのだ。

高原橋を渡つて、初めて人家を見た時、もう平湯へ着いたと思つて躍り上つたが、それは温泉から十町ばかり手前の製板所であつた。まだか、まだかと思つて行く内に、何時の間に空が曇つたのか、日もとぼく／＼と暮れて、毛筋のやうな雨だけが依然として降つてゐた。やつと平湯の燈が暗の中に見え出した時、よろめくやうにして來た吾々の足もしつかりし、びっしより濡れに濡れてしまつた五體も急に元氣づいて村山旅館に急いだ。そしてからだを、ほうり込むやうにして入口に腰かけたのは六時五十分。

ランプを持つて出たおかみや主人の村山は、「この雨では、お出になるまい、と思つてゐました」と云つてゐた。懐中電燈で戶外にある浴場へ行つて來て、炬燵には入つてくつろいだ、そして夕飯もそのまゝですました。今年の夏、自分を白骨から乗鞍へ案内し、こゝまで來た鶴吉が、今年も吾々の一行を案内するのでやつて來た。山の様子を聞くと、「どうも弱りました。この五六日間といふものは、ちつとも霽れ間なしに毎日雨ばかり降つてゐます。それで山がすつかりヤッコクなつてしまひまして、

こんなに降りつゞく事は、私は初めてです」といふ。それから乗鞍の植物學者である鶴吉は、郷土博物學者といふやうな口振りで、越後兔の話や、雷鳥の話、かもしか、熊狩の話、などをして歸つた。

### 平 湯 温 泉

日本北アルプス連峯の麓にあつて四千六百餘尺の高度を有するこの温泉は、まだ全く雪にとぢ込まれてゐて、華氏百八十三度の炭酸泉が豊かに湧き出てゐても、浴客は殆どなく、その湯は徒に高原川に流れ込んで、雪融けの水に冷えて行つた。富山から二十里の間、雨に苦しめられながら歩いて來た吾々は、四月三日の朝起きて見たら、矢張り絶え間なく雨が降りしきる爲に、空しく一日滞在する事にした。「悲觀、悲觀」と云つてまた床へもぐり込んだ。四人がやつと起き上つたのは九時過ぎだつた。

絶望か、失敗か。天候を相手の疑惑の苦しみは、戀人の心に對する疑惑のそれに等しい。ことに、かういふ生命の所有權の半分は大自然に捧げ、残りの半分で、こつちの思ふ事をして見ようといふやうな命懸けに近い仕事に就いては、天候の判斷に迷ふのが一番苦しい。晝飯を兼ねたやうな朝飯に、みんなは食つた、食つた、まるで饑鬼のやうに食つた。

暮れてから雲が薄くなつたのか、月が出たのか空が少しほの白く見えた。ふと室の障子に月影らしきものがさしたので急いで戸をあけた。今、山の頂線の處からぼつと浮び出た月が、山の麓の夜霧の中へその青い色の柔かい波を打たせて、サツと光が、幾條にもさしてゐた。四人とも炬燵から飛び出して月を見た。青白い満月が、附近の白い雪の山々に、まるで違つた遠近を示しながら、大理石の王國のやうに鮮かに照り渡つてゐる。それで早速臺所へ飛んで行つて、あすは行かれるかどうかをきいて見た。

すると、どうも雪が非常にヤッコイので、土地の者でもこはがつて山へ行かない位であるから……、何しろ焼の方から上高地、徳本と越えた者は、今まで一人も無いのであるから、餘程堅く、シミないと安心が出来ない。あすは一つカンジキのはき慣しに、どこかその邊の山、まあ乗鞍へでも行つたらどうです、よくは分らないけれども、行けない事もないでせうとのことであつた。鶴吉は十何年といふ間、乗鞍を専門に行つてゐるさうだから、餘程自信があるらしくもあつた。

それから吾々はお湯に行つた。浴場の窓を開けると、満月の白光がさつと差し込んだ。あすは乗鞍へ行つて見るんだ、と思ふと非常に勇み立つ。みんなが出て行つてからも自分は一人残つていゝ氣持になつてゐる。浴槽のわくに頸をもたせて満月を眺めてゐると、湯がぼちや／＼と落ちる音の外、何の音もなく、湯氣は靜かに窓から白く外にのがれた。

### 雪の乗鞍へ

お早うございますと、威勢のいゝ聲が外でした。それは鶴吉だつた。もう甲斐々々しく仕度をし出かけて來たのである。自分達は寢卷のまゝ、縁側に出て見たが、空には處々に白雲はあるが、青空の方が多し。

それから大急ぎで飯を食つたり、仕度をしたりして、鶴吉に續いたのは八時半を過ぎてゐた。めいめい輪カンジキを手をぶら下げてゐたが、直ぐはいて見たいと思つたけれども、彼はまだはかない方がいゝ、と云つたのでやつぱり手に下げたまゝ後へくつ付いて行つた。まだ人の登らない眞白の乗鞍へ登るなどいふ大袈裟な感じはちつともしないで、只一寸山遊びに出掛けるといふやうな到つて氣輕な氣分で、荷物などは何も持たず、只ウイスキーの一本をポケットに押し込み、バロメーターの一個をぶら下げたきり、まあぶらりと出かけたと云つた方がいゝ。

大きな材木を轉ろがし出してある雪の上で、カンジキをはいた。案外輕々したものだ。鬼齒のやうに出てゐる二本の爪が、隨圓形のカンジキの跡に穴をあけて行く。雪は數日來の雨でネメツテゐる(やはらかくなつてゐるといふこと、飛驒言葉)ので、ぬかるけれども、それも五六寸の程度で止まるから思つたよりも歩きよい。が、ひよつとして下が虚ろな上へでも乗ると、ぽかんと深く陷る事もある。

五十間ばかりの大瀧は、雪融けの水を加へて極めて水量は豊富であつたが、下三分の一までは雪にうづもれてゐた。その瀧の裏側には、二三丈の雪が硫酸銅のやうな色に氷つて、水が豊かにたぎり落ちて、その青い水は融けやうともしないで、凄い色になつてゐた。氷河の色もあんな色ではないだらうか、と思つた。自分達がこの大瀧を見てから直ぐその大きなハゲを通らねばならなかつた。

ハゲといふ地形は樹木がなく夏は岩骨が露出してゐる急斜面をいふのであるが、さういふ地貌の所は、このやうな雪融けの時は、アツ(雪の上を雪が走るなだれのこと)の程度で止まらないで、ノマ(積雪の下に水が廻り、上から雪と一緒に石、土が押し出すなだれのこと)となるから危険である。自分はこの大瀧のハゲに押し出したノマを横切る時、その傾斜面を計つたら四十二度あつたが(附、以後記す傾斜の角度は一々クリノメーターで實際に計つたのであるから、決して單なる想像や推測ではない)、鶴吉が早く早く、と云つてゐる斜面は四十五度もあつた。が傾斜が急でもカンジキの鬼齒と、トピ口とを雪につき立て、身をさへへて進むのであるから、白布についてゐる蟻のやうにへばり付いてゐるのであつても、他で想像するよりも安全である。

積雪七八尺の急斜面や、なだらかなたるみの雪に、一列になつて前のカンジキの跡を踏んでは行く。初めの内は夏路と殆ど同じにたどつたが、なるべく傾斜の少い所を、所をと鶴吉は先に立つた。

「あゝ云ふガ、ベスにカモシカが居るんですッ」

と飛驒訛りに「ですッ」と軽いアクセントをつけて彼が指さす右手の向ふの山を見ると、すばらしい断崖絶壁で雪さへ積る事が出来ないのが、シラビ、タケカンバ、シラカンバなどの梢の向に見える。その断崖をガベスといふ。我々が漢字の束縛を脱してローマ字を採用するか、その他の方法を考へ出すかする時、とにかく難しい漢字の熟語を一つでも多く日本語の内から排斥しなければならぬ。懸崖とか絶壁とか断崖とか文字を見なければ意味の通じないものは廢さなければならぬ。それに代る言葉がガケだけでは感じが現はれぬ。それにはこのガベスといふやうな言葉は、獨逸語のやうな勢のいゝ響きを持つてゐて断崖絶壁を現はすに適當したものはあるまいか。

振り返つて後を見たら、アカンダナ山の後に焼岳の頂に煙が見えて、凡そ九千尺の高さに雲が、天の蓋のやうにおひかぶさつてゐる。錫杖、笠、双六などの頂は、その雲でかくされてゐるが、自分達のゐる處は六千五百呎の高さで浩然たる大景である。平湯からついて來た獵犬は、吾々の先になつて獲物をあさる本能的の敏捷さで、兎を見付け出しては追ひ廻してゐたが、吾々がこの景色を眺めてゐる時、雪をソッゾッと音させて走り上つて來たが、吾々を見付けるとしばらく待つてゐるやうにして立つてゐたが、又クルッと向をむいて頭を上下に振りながら走つて行つた。

十一時、シラビ、タケカンバの叢林に休んだ。鶴吉は腰に下げた山刀で、シラビの深緑の枝を切つて、八九尺の積雪の上に鮮かな緑を敷くと、休み心地のよい座布團が出來た。吾々が晝飯にしたのは、それから登つて鑛山跡の少し上の七千二百呎の所であつた。山をさんざん暴れ廻つて一匹の兎も捕へなかつた犬は、飯の時側へ來て、肋骨の見えるやうな瘦せた胴をせはしく動かしながら、ぼつちりと兩つの眼を青貝のやうに列べて吾々の手許を瞻上げてゐた。さも空腹に堪へないといふやうな様子可愛さうになつて、握り飯の少しを投げてやると、うまく口で受けたかと思ふ次の瞬間には、もう呑み込んでしまつて、またぼつちりと眼を光らせて見つめてゐる。

この晝飯の場所では、北から西五十度―七十二、三度の方向が實によく見えた。高原郷の高原、白川、庄川の凹地、其の間に起伏する山々は波濤のやうに見渡された。この様子では能登第二旅行班も天候の點は無難だらうと思つた。休んでゐる時、底力の籠つた鈍い空氣がすうと吹き落して來た、雲のちぎれは、大きな霧のかたまりとなつて雨が降り出し、一時吾々をして驚怖を感じしめたが、また直ぐ晴れてくれた。

食後登り出した處は可なりの傾斜であつたが、それでも三十度位しかなかつた。夏ならば密林で身動きもならぬ筈の處を右に左にカンジキの跡を印しながら、がむしやらに登つて行つた。犬の追ひ出す兎を遠過ぎると云つて空しく見てゐる鶴吉が齒痒いので、獵銃を彼からとつて自分が持つてゐた。猿飛の方へ行く途中の急斜面で、また犬が兎を追ひ出した。「あッ」と思つて銃を捕へる中に、死にもの狂にかけ上る兎は、もうずつと上に行つて、犬は餘程おくれて跡を追かけながら吾々の前を走り上つた。ねらひを定めて見たが、若し犬にでも當ると可愛さうだと思つて引金は引かなかつた。乗鞍のバワル(場悪る、て急傾斜、岩石その他で通行困難の處)である猿飛の邊は、傾斜こそ急であれ、夏のやうに岩石が崛起してゐないで、一面白雪皚々たる處であるから、夏よりは登るに樂である。が流石に、雪の急傾斜であるから、針木のスノー、カスケードを思ひ起さしめる。

九千呎の姫ヶ原は、二時半に通つたが、四ツ嶽の大きな稜線が、廣い雪の面と山の背後の灰色の雲との間に、はつきりと見えたと時、何時もながら乗鞍は大きな山だと思つた。この廣大な眞白の斜面に、二三の嶺巖が、準平原時代のモナドノツクの標本のやうに、黒く巍然として突つ立つてゐた。そこを犬の奴は雪にぬかつて腹を雪に擦りながら獲物をあさるやうに歩いてゐた。

姫ヶ原の左の尾根へ登つた先のが「やあ、萬歳ッ」と云つて立つてゐた。何かと思つて急いでよち上つた自分も、思はず「萬歳」と叫んだ。それは浩々たる無雙の展望であつた。この大丹生岳の肩

は、吾々の眼界が突然開ける處であつたのだ。淺間山も見えれば松本盆地も見え、鉢盛山なども青黒く見えた。真下には梓川の清流が眞白な雪の間を縫ふ。霞澤、六百の頭。穂高の大雪溪。これが冬の粉飾の雪に覆はれて、上には垂天の雲が、莊子の鵬の翼を擴げたやう。何たる沈鬱な力に充ちた大景であらう！ それだけでも、雪の乗鞍へ登つた價値は充分にある。吾々の期待は裏切られなかつた。

北の方は日本海さへ見えた

峰筋は風が強いせいかわ雪が積らないで、處々に這松が露はれてゐた。高山植物に興味を持つてゐる鶴吉が、雪のない處に落し物でもしたやうに氣をつけて歩いてゐたが、や、苔桃があるといひながら躊躇で食ひ出した。みんなは這松のかげにゐた彼の處へ行つた。梅干のやうな赤い色で、少ししなびた、大豆位のコケモモを一つづゝ採つては口に入れ、その甘酸い味を楽しんだ。芝生のやうに一面に生へてゐる小さい植物の上に、のさばりながら夢の國にでもゐるやうな氣がした。岩高蘭の黒い實もあつた、これは雷鳥の食ひ物であるといふ。苔桃や岩香蘭の漿果を四ン這になつて味つてゐる吾々はまるで雷鳥のやうである。

早春の激烈な高山の風は這松の枝をふるはし、枯れ果てた高山植物の葉を地面の中へ追ひ込むやうに吹きつけた。ムシトリスミレを探がして見たが、冬眠の装をして地面にピツタリとくつ付いてゐるので一つも見つからなかつた。たゞトウヤクリンダウなどが、ぶる／＼と身震するやうに寒風に吹きさらされて枯れてゐた。

吾々がこの雪のない所にカンジキをはいたまゝ立つてゐた時、急に非常な烈風が打ちつけて來た。しばらく岩につかまつてヒョロ／＼と吹き飛ばされやうとするのを忍んでゐたが、骨までしみ通るやうな寒さの爲め、危険感に襲はれ急いで風下へ身をさけた。吹き淨められたやうな山の膚にへばり付いてゐる高山植物の枯葉を、その烈風がむしりとつては空中へ投げかける。葉はキリ／＼と空中を廻

轉しながら飛んで行く。

風は依然として吹きすさび、手に持つてゐる杖はブンブンと鳴る。その時、風の吹いて来る峰の方に微妙な音楽が起つた。管絃樂のシンフォニーのやう。微妙ではあるがたしかに耳の底に響いて来る。聽覺の迷かとも思つて見た。帽子の鏝からでも起る風の音かとも思つて見た。みな違ふ。響は確かに山の峰から来る。山の精が人間に魔法をかける誘惑の樂ではないかといふやうなロマンチックの考を起して見たりしたが、要するに風が山の峰に當る音響であらうと解釋した。それにしては餘りに美しい樂の音である。後で分つた事であるが、それは自分の持つてゐる鐵砲の筒先が風の爲に鳴る音だつたのだ。

とにかく烈風の圏内を脱しなければならぬので、吾々は尾根傳に國境——信濃と飛驒との國境を下つた。峰の雪のない處は石で歩き難いし、その石から雪に移る所は這松で下が皆なうつろになつてゐるのでぬかり易い。一度ぬかると這松の枝にカンジキが引つかかつて歩くことが出来ない。やうやく歩きよいかと思ふと、急に深く落ち込んでカンジキを取られたりする。四十度の斜面を轉ぶやうにして下りて四時廿分十石岳に着いた。

十石岳は安房岳の一峰で、シャウネン神がまつつてあつた。鶴吉の話によるとそれは養蠶の神で土地の者にとつては極めてあらたかの神であるといふ。小さいほこらであるが鏡（昔の金屬製のもの）や劔、鐘などが押し込んであつて貝の化石などもころがつてゐた。御神體は眞綿で幾重にも包んであるので分らないが、木の彫刻だとの事であつた。もう全く風の速力の早い圏内はのがれて、鐵砲の筒先から鳴り出す音楽は聞くことが出来なかつた。ここで悪戯者の犬は白い雷鳥を追ひ出したが、雷鳥は全體まつ白な羽を擴げて遠くのがれてしまつた。犬はわん／＼吠えながら初めは追つかけたが、とてもかなはぬと思つてか雷鳥の飛んで行く方をにらんでゐた。

四時半十石を發して尾根傳ひに下つたが、初めの内は木も何もなく實に樂に面白く、十分間に四千呎も降つた。銀山へ行つた時見えた山の莊嚴なことよ！峻直削つたやうな兜の頭をぬつと振り立てゝゐるのが霞澤岳に六百山である、眞白な雪と薄青い山の皺！夕暮れかゝつた上高地の山々はその雄々しい姿に沈鬱の氣を漂はしながらも、冬の光線は山々を非常に間近く思はせる。手を伸べてその山の頸へ、その肩へ、その肌へ觸つて見たいやうな氣がして来る。また穂高の雪溪の雄大なことよ！前穂高、奥穂高のサコ（水のない窪み谷、飛驒言葉）から、なだれ落ちた雪が、俵の口をあげた白米のやうに谷一ぱいになつてゐる。惜しいことには、茫々無際涯の雲が、凡そ九千尺の高さの満天に張りつめてゐるので穂高も笠もその頂きは見えない。が、なほ尾根傳に下つて中根まで行つた時、富士形の常念岳が遠い微かな思をさせながら夜雲の底に沈んで見えた。

平湯は直ぐ目の下に見えながら、吾々の居る處はまだ仲々高かつた。物の比較の觀念を失つた吾々は、只時々バロメータアの針を見て悲觀した。六時には黒澤の頂上に行つたが、平湯高原に下る最後の傾斜は四十度に初まつて五十二度といふ殆ど直角に感ずる非常な急斜面を、疲れてブル／＼震へる足許に不安を感じながら漸く降り盡した時は、二度と來る氣にはなれさうもなかつた。このコバ道（材木を上から落す處）には全く閉口してしまつたけれども、無事に安全地帯に戻り得たことを誰といふことなく感謝したかつた。

平湯の村山旅館に轉がり着いたのは七時過ぎ、もう足許は全く見えなくなつてゐて雨さへ降り出してゐた。

### 安房の舞込み

乗鞍の歸りに降り出した霧雨は、その翌日も終日降り暮した。朝起きて見たら非常な濃霧で、仰いで

も望んでも霧と雨。人間の住み得る最も山奥の平湯高原に降りそそぐ雨の音、黙々として白樺の林に浮動してゐる霧の姿、春のアルプス越をしゃうとしてわざわざ此處まで來てゐる人間などは度外（わが外）に置いて霧と雨とが勝手に世界を支配してゐる。覺悟をさめて炬燵（たきだ）にねころんでゐる吾々でも時々そつと障子を開けて見ると、密集して迫つて來る霧で今にも室中が眞つ白になつて呼吸（いき）もつけなくなるかと思ふほどであつた。

午前中は湯から出て來てねて過ごしたが、午後は退屈のあまり、小學校の校長さんの處へ遊びに行つた。全校の生徒廿二名。校長兼先生兼小使只一人。昔の寺小屋式である。本を十冊ばかり借りて來て四人して讀み耽つた。

が、休みはもう二日しかない。若し上高地へ行くのに危険がなく只困難だけならば、吾々乗鞍の經驗もあることだからとて、鶴吉に聞いて見た。道は急路でないから危険でない、困難と云つても乗鞍へ行つた位と思へば大差はないといふ返事であつた。

それでさつそく準備にかゝつた。リュックサックに物をつめるやら、通信を書くやらして寝る前に湯に行つた。空はまだやつぱり晴れずに暗く、霧雨は靜かに降つてゐた。

朝起きて仕度にとりかゝつた時、鶴吉が手紙を寄して、一昨日乗鞍で引いた風邪の爲め、責任ある御案内をすることが出來ないから、兄の清二郎が代つて案内する、といふ事であつた。吾々は鶴吉といふ稀に得る善い案内を失うたことに少し落膽を感じたが、彼の兄の清二郎も山にくはしく且つ大膽でもあるから、之ならばと思つた。

吾々が雪靴付きの草鞋をはいてゐる時、もう一人の案内人の岡田長二郎が槍笠をぶら下げて「おはやうございます」と云つて、べつこりお辭儀をした。村山はカモシカの毛の房々（ふらふら）といつた靴をはいて、山犬の下顎を根付けにした煙草入れを腰にぶら下げてゐた。二人とも四十男の分別盛りである。

村山一家に總出て見送られて、吾々が平湯を出發したのは九時(六日)であつた。家を出るともう廣々として小高い雪の高原で、林は一帶にぼうつと白い霧の薄衣に包まれ、白樺の白い幹や唐松の黒い幹やに著しい色の濃淡が出来、遠くの方は影のやうに淡く見えて、遂には地面の雪と霧とのけじめが分らなくなる。「霧が深いけれども、寒いぢやによつて晴れるかも知んぞなあ」と村山は岡田に云つてゐた。吾々は只だまつてついて行つた。九時四十分、水無平ミヅナヒラに着いてカンジキをはいた。今まではコバ路クハミチ(材木を運搬する雪路)でカンジキなしでよかつたが、此處からは全く人の足跡のないサラドコを行くのである。温度攝氏五度。

下は雪で、あたりは霧で、全く白い世界を彷徨うて來た吾々の前面に、じつと押しつけるやうな薄暗い世界が迫つた。それは白檜、唐檜などが、原始林の姿で鬱然としてゐるのであつた。原始を慕ひ、人氣の稀薄な處に憧れる吾々には、求める世界が近づいたのである。吾々は安房平に出て、その池の上に積つた七八尺の雪の上を地面の上の雪だとばかり思つて通つてしまつた。

十時半、村山が三十二度の傾斜を靜かに登り出した時、岡田が後に立ちどまつて、井戸のやうな穴をのぞき込んでゐた。これが安房の舞込といふので、池の水が皆こゝへは入つて山の中へ吸ひ込まれて了ふのだと話した。すると上の斜面に、つかまるやうにして立つてゐた村山が、「それあ、大雨の時などはひどいですよ。ぐわあつと云つて、うづ巻いてこの池の水がみんな岳たけの心に吸ひ込まれるんです」と、まるで童話のやうな事をいふ。

### ゆきばな

安房の舞込から三十度以上の傾斜を、二十分ばかり登つた時、今まで立ち單めてゐた霧が氷つて、夢の國の雪のやうに辛じて見得る雪が降つて來た。雪の六花を形作る最も初めの結晶であることは、

マントの端にかゝる非常に細いみぢかい水晶の針によつて知られる。村山は原始林の間に落ちる木の皮の細片か、ほこりか分らないやうな雪の面を見つめて、「岡田ア、この邊にバンドリ（むささびのこと）が澤山ゐるぞなあ」と云ふと、岡田も「さうだなあ。大部居るぞいなあ」と飛驒の「なあ」といふ軽いアクセントを響かせる。

馬のたてがみのやうに房々と青く木の枝に垂れ下つてゐるサルヲガセに、この水晶の針が行儀よく列んで着いてゐる。だん／＼行く中に、白檜、唐檜の深緑の葉に、まつ白に雪花がついた。それは白樺の幹の白さである。次第次第に美しさを増して行く。雪國に生れた自分も未だ曾て見た事のない美観である。原始林全體の粉黛！ まるで白珊瑚の林のやうだ。

豫期しない美観に接して、こいつは面白いと思ひながら、先に立つ村山と、後を守る岡田とはさまれて行くとき、先頭の者が、ムクトイ（暖かい意）なあと云つた。これが安房峠の頂上です、と村山は立ちどまつて、カンジキで踏みつけてゐたが、これが夏の立札でせうと云つて、雪からその頭を出した立札を指さした。十一時八分。バロメータアは六千四百呎。それから峠は下らずに、北の方に三十度から四十度の斜面を横に傳つて行つた。

晴れたぞ、山が見える！と誰の口からともなく叫ばれると、みんなの心までが總立になつた。それは右手の方の谷が明るくなつて、前に眞白な壯麗な山の頂が、青空をバックに見出したのである。自分は初め穂高かと思つたが、それは霞澤のアタマであつた。吾々の驢びは何に譬へたらよからうか。ノアの洪水の時、鴿が夕暮になつて橄欖の若葉を口にくはへて歸つたので、流石の大洪水もひいたのを知つた、といふが、吾々もこれでこの濃霧の晴れあがるのを知つたのである。前途に驢びの満ちてゐる吾々には、たとへ足許が三十度以上の急傾斜の處であつても、それは平地を行くやうな氣分である。ふと立ち止つた村山は、おや、これは熊だのうといつて岡田の返事を待つた。「あ、熊だ。

惜しいこつちやのう、たつた今馳け下りた跡だ」餘程大きな熊だのう。卅貫以上もありさうだなあ。」と村山は指を廣げて熊の足跡を計つてゐる。夫から暫く熊の話が續いた。

案内人は盛んに惜しがつてゐるが、吾々は今日の中にどうあつても上高地までは出なければならぬのだ。行くうちに木の間から、眞白な奥穂高が、鏡にても映うつされたやうに明瞭と見える。まるでヒマラヤのやうだ。

### 細 池 平

傾斜を降り盡すと細池平である。斧鉞を知らぬ千古の深林が神々しい静寂の裡に鬱然としてゐる。年毎に疊む白樺の皮は棕櫚の毛のやうに房々として居り、力強い感じのする唐檜、白檜などの幹が、すすくと立ち列んで、その枝にはサルヲガセなどがぶら下つてゐる。吾々は何處かい、場所て晝飯にしやうといふて歩いてゐる中に、山鳥の羽根がいたましくも雪の上に散亂して、貂の足跡がずうつとついて深林の奥に消えてゐた。原始生活の生存競争は命の出し合ひである。この極く静かな奥には、何にもかも生きてゐるやうに感ぜられる。物凄い程、静かて平和であるべき原始林の間に、慘虐な命がけの争があるのは、吾々のやうに原始に還元しやうとする者には、少なからざるショックを與へずにはおかぬ。

吾々はある廣場に荷物を下ろすと、岡田は白檜の枝を切つて來て敷いてくれる。村山は盛んに薪木を集めてゐる。あたりは死んだやうな静けさで小枝一本も動かないが、村山が鉈目を入れては、鉈目を入れては一位の枯枝を折つた時、ポーン、ポーンと梢から梢に響き渡るその響は、やがて黒いあんな大きな物にても吸ひ込まれるやうに消えてしまふ。さながら樹といふ樹が悉く時の終りまで、そのまゝじつと動かずにゐるやうに見えた、吾々が火を焚きつけるのにとつた白樺の皮なども、まだ一度

も人間の眼にさへ觸れなかつたものであらうかと思はれる。

火が燃え上ると煙は靜かに昇つて唐檜や白樺の枝にからまる。自分達は非常な興味を感じながら握り飯をほくばつた。かれこれ一時間ばかり費してまた出發した。村山は「これからテキナイぞなあ」といつて先頭に立つた。

細池平を出發して焼岳に登り出してからの斜面は、流石に村山が「テキナイぞなあ」と云つて登り出した丈けあつて随分ひどい登りであつた。可なり上つてから横に北の方へ進んだが、是は素晴らしい傾斜だと思つて測つた角度は四十五度から五十度。若しこの五十度の斜面を下るのであつたら？それは危険で到底身動きさへ出来なかつたかも知れぬ。左手の雪の斜面に杖のトピ口を引つけては横に進んだ。「ほんとのアルプス横断ですね」と流石に案内の岡田も驚いたやうにして、後から聲をかけた。滑つたら大變だ、が幸に一人も滑り落ちる者もなく、一時間後には焼岳の木の枯れた所に出た。大正四年に梓川に熔岩を流し石を降らし、一夜にして周圍二里の大正池を作つた慘劇の跡である。大木がさゝらのやうに折れてゐたり、幹に大石がぶつつかつて皮がむけたり、割れたりしてゐた。噴煙當時の慘澹たる光景がまざまざと眼の前に描き出された。

左上の方に焼岳の響きが、霧か煙かわからないぼんやりした中から、物凄く手に取るやうに近く響いて来る。この焼岳の噴煙が、がうがうと聞えるやうになつてから、傾斜はゆるやかになつた。やあ、上高地が見える」と誰か叫ぶ。この叫びは全然霧の中から霧の中へと漂浪しなければならぬと觀念してゐた吾々にとつては天來の福音であつた。見える。見える。人間の眼からは全く閉ぢられてゐた雪の上高地が見える。淨められた上高地が見える。ノアが神の恵によつて、その大洪水を箱船に避けてゐて、その箱船のおほひを除いて見た時に、視よ、土の面は燥きてありぬ、と舊約聖書に書いてあるが、吾々の上高地を望み得た驩びは、將にノアが燥ける土の面を視た時のそれに比することが出来

る。

二時に焼岳を下り出した。飛驒の方から前穂高の横顔に押し出して来る如何にも重量の重さうな黒い雲が、穂高の大雪溪の左上で靜かに消える。それがまた明神嶽と六百山との間で再び重さうな雲になつて徳本の方へ流れて行く。飛驒の方からは、またいくらでも増援隊が来て黒い重い雲を補充するが、それがみんな梓川の上で消えては六百山の影でまた出来る。何の事はない大自然の殿堂の扉だ。この大扉の下には、穂高の大雪溪が、氷河のやうに横たはつて、大理石のやうな白い階段を作る。上高地の森林は、白い雪の上に、ちよぼちよぼと毛のやうに生へてゐる。清水屋の建物も五千尺の建物も見える。

尾根傳に最後の三十度ばかりの傾斜を下る時は、東側だけあつて、雪が柔かくなつてゐるので、雪に乗つては一氣に五六間づゝも滑り下りた。非常に面白いので忽ち焼岳のカマ（地が深く切れて兩側とも凹んでゐる地形。焼岳では溶岩の流れ出した處）の下堀しもぼりに下りてしまつた。二時半である。そこで一休してカンジキの繩の切れたのを直して貰つたりした。十五分の後出發。

そこから廿五分で大正池の畔に出た。夏とはちがひ、凡ての闊葉樹は葉を振り落してゐると、毒々しい色の新噴火の熔岩は皆一面に白い雪で覆はれてゐるとで、夏ほど慘澹とした死の國の様な物淋しい感じを與へない。案内人は先に立つて、人のゐない大きな谷の河原にカンジキの跡を、此上高地の初めての開拓者のやうに、點々とつけながら、ザクリノと歩いて行つた。四五羽のすゝがも（俗稱）が池に泳いでゐるのが遠くに見えた。人間を見て驚いたのか、それらの鴨はやがて立ち上つて、高い空間に並んでゆつくりと飛んだ。

雪は五六尺あつたが、案内人は思つたより少いと云つてゐた。四月六日の午後四時、無事に上高地の清水屋に着いた。清水屋のちやぢは四月中などは人の絶對に行ける所でないから斷然中止するやう

にと、再三學校宛に忠告してくれたのだけれども、吾々は幸に無事に、その絶対に人の行けない處だといふ處へ來る事が出來たのだ。

### 上高地の夕と朝

清水屋は留守居も何もゐなく、全くの空家になつてゐたが、凡ての戸口は堅く戸締りがしてあつたので、村山は「これなら五千尺の方へ行けばよかつた」と呟きながら、それでも仕舞には、どうやらこうやら戸をあけて、は入つた。陰鬱な何となく冷々する濕氣のある家の中は、腐れたやうに暗かつた。

侵入軍のやうに室々を探がして見たけれども、壘は皆はがしてあり、戸棚の中をのぞいても、只黒く濕つたほこりがあるだけだつた。そして自分達の求める夜具の類や鍋、釜は無かつた。案内人達がなほも探がしてゐる間に、昨年の夏も來て見おぼえのある臺所の火をたき附けて、まづその圍爐裡に座を占めた。白樺の皮がピリピリと燃え上つて火勢がつくにつれて、今まで大して疲れもしなかつたやうに思つてゐたのであつたが、流石に動きたくなくなつた。

が、雪の上高地のアーベント、グリーンが見たくつて、勇を鼓して外へ出た。燒岳の煙は夕日を受けて眞赤になつてゐる。飛驒側からは峯越しに黒雲が波のくづれのやうに盛んにやつて來るが、夫れがみんな同じ高さの所で消えてしまふ、ぢつと見てゐると、からだが大次第次第に前の方にかんて、山がだん／＼だん／＼低くなつて行くやうな氣がする。一時霞澤、六百の岩壁や明神岳の膚が、すばらしく美しい色に映え渡つたが、それがいつの間にかいぶし銀のやうな色にあせ、やがて不得要領の夕暮の色になつてしまつた。自分達は壯嚴な儀式の終りでも見つめるやうにして、この雪の上高地の夕暮に立つてゐたが、それから直ぐ家の中へ吸ひ込まれて、飯の出來るのを待つた。

食後盛んに火をたいて、顔や手足をほてらしてゐたが、その内にめいめいマントをかぶつたり、外套を着たりして、ごろねをやつた。村山と岡田とは俵やむしろをかぶつてゐたのは九時頃であつた。

夜中に時々寒くつて目がさめた。めいめい互に寒さに困つてゐる事が分つてゐても、ねむいので黙つてゐる。みんなが起き上つたのは朝の五時頃であつた。

田代池に行かうと云つて家を出た。一面の雪、そこを自分達はカンジキをはいてザクザクやつて來たのだが、今朝は又非常の堅さに氷つてゐる。美しい夕映に暮れた上高地は、朝になつて又すばらしい景色を展開した。十七八日の月が焼岳の上に輝いてゐたが、煙の白さが増すに従つて月の光は衰へて行つた。そして霞澤、穂高の空がだんだん明るくなつて行く。自分は萬葉の人麿の歌を思ひ出した。

ひむがしの ぬにかぎろひの立つ見えて かへり見すれば 月かたぶさぬ

萬葉の叙景歌の傑作といはれてゐるこの歌も、上高地の朝のこの景色にあてはめる時は、歌の方が少し劣ると思つたが、實際朝の空と山の膚との色の變化は雄大で微妙なものであつた。

四月七日は連日の雨天に引きかへ、満天に雲の一片もない。雪が非常に堅くなつてゐるので、カンジキも何もいらずに、何處へでもドシ／＼行ける。梓川の橋を渡つて森林の中をあち／＼歩き廻つたその時大きな白兔が急に物かげから飛び出して、茂みの中へ逃げ込んだりした。朝日が差した時の溫度が攝氏零下四度であつたから、ま夜中には零下十度位にまでも下りはしなかつたであらうか。

朝日がピカリと奥穂高の頂にさした。山の腫よ！ ピカピカと輝いてゐる様はアーク燈のやう！ まつすぐに立ち上る焼岳の煙は、朝日を受けて赤くなる。それと同時に月はもう見えぬ。

自分は雪國の冬の朝陽の出るあの雄大な景色を幾倍もにしたのを見てゐるやうな感じがした。四月七日の平野には梅が散り櫻の花咲くのびやかな時節とは、どうしても思ふ事が出来なかつた。我々の旅

行は時と逆行して來た童話のそれではないかと思ひ、自分達は迷妄の世界を覗いてゐるやうな氣がした。

スノウキングの王國は、どんなに童話作者が空想を逞しうしても、到底ありありと目の前に描き出すことは出來まいと思はれる位、魅力ある別天地であつた。自分は幾日もこの雪の深林にさまよつてゐたいと思つた。

### 徳本越え

午前七時半に清水屋を出る。もう光の世界だ。人間の眼には強過ぎる光、額が押されてゐるやうな強い光の世界だ。碧い空は自身の持つてゐる白い物をすっかり吐き盡してしまつて、豁全體、山全體にちかちかする光があふれてゐた。スカイラインを境とし萬象の色彩はまぶしい程の藍色と純白とに還元されてゐる。静寂、森嚴の極致である。沈黙と寂寥と光とが空間の支配者である中にひとり梓川だけはこの高原の生命であつた。水晶のやうな水の中に多くの紡錘の岩魚が梭のやうに行つたり、來たりしてゐた。流のそばに鶺鴒がゐたが、尾をチョン／＼動かしては、つと雪を蹴つて白い羽を素早く廣げては活潑に飛んだ。そして又河原の石に移つた。

木の葉を振り落した若い白樺の枝が眞青な空に微細な蜘蛛手をかいてゐる下を通る時は、振り返つて乗鞍の四ツ嶽、安房山、十石岳などが朝日を受けて眞白に輝いてゐるのを見た。すつきりした快晴の冬の光が、その山々いつばいに瞬いてゐるやうにも見えた。あの山々にも自分達は二三日前に登つて來たのかと思ふと、發作的に誇らはしい満足を感じるのであつた。

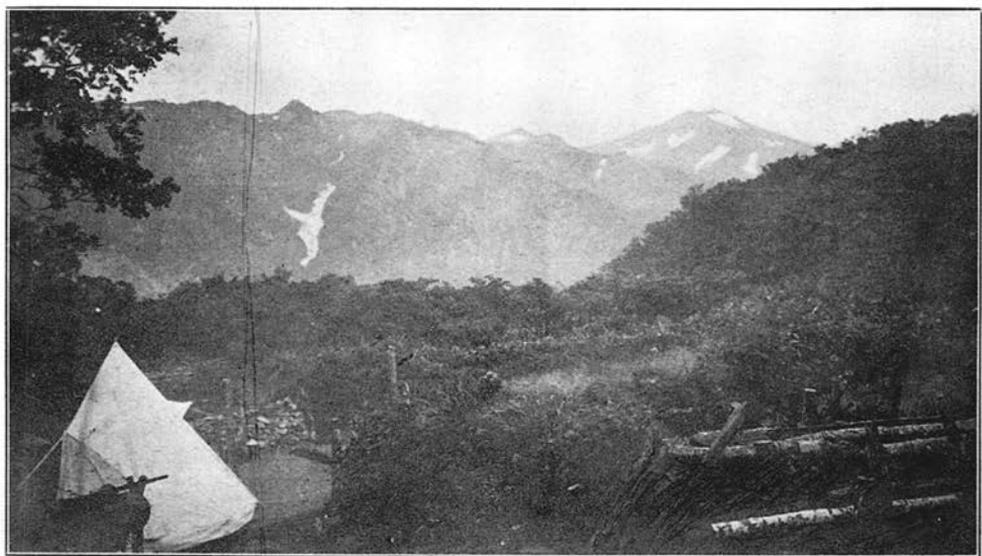
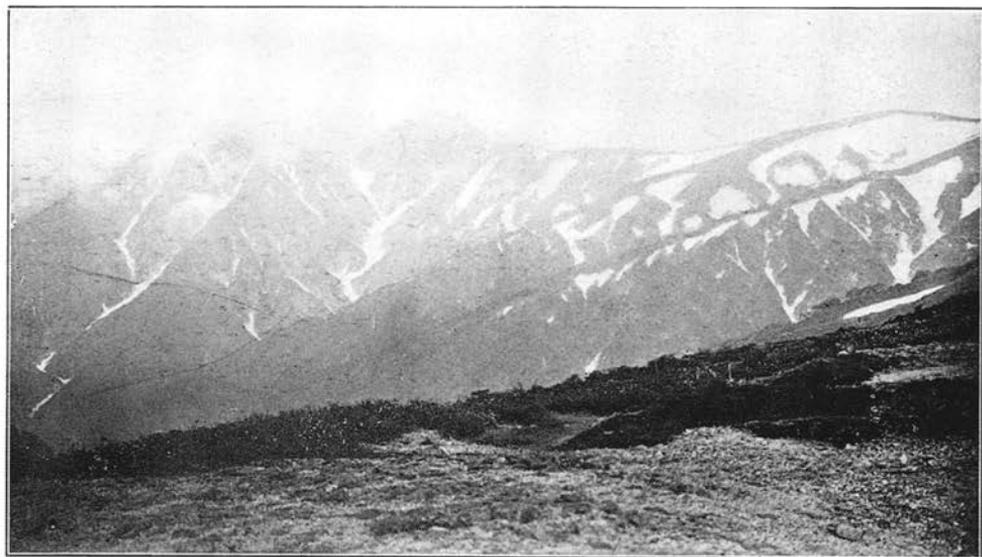
河童橋に立つて見た穂高の美しさ、まぶしさ！ 奥穂高と前穂高との間にある大雪溪を下から上に眺めて見て、氷河舌を想像して見たりした。夏に見る岩石の匍行とは何と大きな違がある事であらう。

吾々が食料其他の用意をもつと充分にして來てゐるならば、雪の穂高へ登つて見る事も易々たるものだけに、とつくづく思つた。そしてスウィスアルプスやヒマラヤに登つて見るのと同じやうな愉快が得られたらうに。

今日の難關の徳本峠は途中にどんな自然の惡戯がないとも限らないし、又積雪中の峠の情況はどんなものであるか皆自分らないのであるから、明神池の幽邃を見るのも止めにしてしまつた。今夜は岩魚止で泊らなければならぬか、それとも島々の人里まで出る事が出来るか、さういふ事さへ見當がつかなかつたのだ。夏ならば多くの登山客で賑ふ上高地も、今は吾々六人の外人間は一人もゐないのである。梓川の畔に立つて明神池の方を眺めた時、上高地獨特の柳はもう芽をふくらませてゐたが、その色が鮮やかな赤褐色で、雪と空との白碧二色に還元せられた光の世界には、花のやうな頗る珍しい色彩でなければならなかつた。

峠にさしかゝると三十度ばかりの傾斜で一里ばかりも續いて、昨夜の寒氣で雪が堅く氷り、その面がキラ／＼と光る。そこへ杖のトビグチを打ち込んで登つて行つた。途中大きなあわ(＝なだれ)の落ちた跡があつて、丁度たぎり落ちる瀧の水が一瞬間に硬化したやうな貌であつた。何回といふ事なく休み休みして、ある時は小さい立木を股にかい込んで身をさへへて休んだりしては登つた。上に行くに従つて傾斜は急になつて、頭の上に空から落ちて來る白い光の瀧のやうに光る雪の面に、打ち込むトビグチに身をさへへながら、とにかくさこ(山の凹んだ谷)傳に頂上に着いたのは十一時であつた。非常な難關であるであらうと想像せられた徳本峠の上りは案外樂であつた。とにかく登りつく事が出来たんだもの。而かも二時間も豫定よりも早かつたんだもの。不可能かとさへ思はれたのに、「これは案外樂だつた」といふ言葉を吾々同志は勿論のこと案内さへ發せざるを得なかつた。

この七千餘尺の頂上に立つた時、今まで緊張しきつてゐた努力が一時に歡喜の聲になつて、もう成



上切合附近よ望る大日岳  
下地(津會)山頂より飯本山・草履塚・種山等望む

辻本満丸氏撮影



功した、大成功だと互に叫び合つた。そしてそこから見た穂高の眺めは、峠を上りながら時々休んでは振り返つて見たその眺めと同じ又と得られぬ壯麗無比のものであつた。スウイスアルプスも是以上には出まいと思はれた。

この穂高岳といふ名に就いて、穂高の神が何とかといふ説もあるけれども、自分は單に高い山といふ古代日本民族のつけた名であると思ふ。日本民族とことわたのは儒教や佛教の影響を受けたものでなく、又富士山のやうにアイヌ民族の残したものでないといふ事を意味する。穂高の穂は秀の意味で、ぬき出て目につくもの、すべて尖つたものは皆ほである。槍の刀先を穂と云つたり、稻の穂、麥の穂と云つたりすると同じく、山の尖りを穂と云つたものと思ふ。古事記にある『高千穂のくしぶる多氣』と穂高岳とは、言語上何等かの關係があるであらう。又タケ(多氣、岳、嶽)はタカ(高)の變轉である事もすぐ想像される。平湯で「山のやうだ」といふ事を「タケのやうだ」といふ。山へ行くことをタケへ行くといふ、この穂高岳は槍ヶ岳、劔岳、刀山(立山、今はタテヤマといふ)などと同じく、山の形から單に高い山、鋭く尖つた山といふ意味だらうと思ふ。そして自然崇拜の第一期に於いては自然それ自體を崇拜したもので、自然を支配する神を思ひ付いて祀り出したのは自然崇拜の第二期に屬する仕事であらう。

峠の絶頂で晝食をすまして四高第六班通過のしるしにつけた赤い布は、唐檜の枝にあくまで赤くさがつてゐた。峠の上りは西側で堅かつたからカンジキははかなかつたが、こゝでは皆カンジキをはいた。頂の東側は雪が今にも落ちて大きななだれにならうとするかのやうに、一尺餘りの大きな口が五六間もあいてゐた。東側の下りはもう雪が軟かくなつてゐるので、どん／＼滑り下りた。十分ばかり行くとなだれの通つた跡へついた。幅二三間のなだれが何百間とない下まで深い堀を作つて通つてゐた。吾々は一氣に二三百間も滑つたりして行くものだから、バロメータアの針は目に見えて動いて行

く、二十五分の後には一千四百呎も下つてしまつた。

それからの下りはなだれのやまがあつて可なり困難したが、正午に發した吾々は、一時十分には岩魚止に着いてカンジキをぬいでしまつた、そこから下もやつぱり雪路ではあつたが、小屋に來てゐる人夫が道を開いて置いたからだ。島々谷南澤の雪にこはれたまゝの路を歩きながら、昨年八月、自分が生命危篤になつた最も記念すべき所を云はゞ戦士の古戦場を弔ふやうな思ひで通つた。そして二僕の小屋に行つた時若し昨年の人がゐたら御禮を云はうと思つたが、こゝには人は一人もゐなかつた。雪の滴りを集めて潺湲たる産聲を上げたこの谷川の水はだんだん勢をまして、遂に矢高澤に行くとな一部は水門に吸ひ込まれてしまふ。そして下流に行くと電気となつて人間に燈火を供給してゐた、かくて自分達は再び人類文化に近づいた。

島々に着いたのは午後四時二十分。乗鞍を極め、安房より上高地に入り、徳本を越え、無事アルプスを横斷す」といふ電報を學校其他に打つた。清水屋の主人は「是は、是は」と云つてビックリしてゐた。絶対に不可能の事だから止しなさい、と親切にも忠告してくれた、そのおやぢは無鐵砲にもやつつけたな、といふやうな顔をしてゐたが、「とにかく御無事で御目度うございました」と云つてくれた。おかみも「まあ、あなた方はほんとに命拾ひをしてゐらつしやいましたね」とお世辭を云つたが命拾ひは大袈裟だ。其の内に清水屋へ自動車が來たので、村山、岡田の兩案内人に餘り早く分れるのが非常に名残り惜しいと思つたけれども、松本へつのが遅れてもいけないといふので、五時にはもう出發した。

勝利に誇る王者のやうな得意を感じながら四人とも自動車の中にふんぞり返つてゐた。革のやうなもの心臓を引きしめてゐるやうな歡びの緊張を以つて、からだは自動車の速度が加はるにつれて、ゴムまりのやうにはずませてゐた。吾々の前五六町ばかり先に走つてゐる今一臺が見え出すと、運轉

手は「あれを抜きませう」と云つて走つて抜いた。そして走りに走つた。砂煙をあげて走つた。ほろ、寒い夕暮を全速力で飛ばしてゐるものだから、自分達の頬つぺたは瀬戸物のやうに冷たくなつてゐるが、喜びに充ちてゐる爲か、寒さなどは何でもなく只もう痛々快々であつた。昨年八月瀕死の自分を運んでくれたこの道とこの自動車、今日はまた何といふ大きなコントラストを爲す事よ！ 夕日に暮れ行かうとする松本盆地の周圍には、さまざまの山が、ぐるりとめぐつてゐた。乗鞍は後の方に、かすかな思をさせながら、親愛な手を振つてゐるやうなつかしさを示して夕日に映えてゐた。松本市で乗換へて淺間温泉に着いたのは六時半。その時はもう桃色の空もあせて、温泉宿の灯が賑やかに漲つてゐた。

歡喜に充ちた吾々は、雪の山越の疲勞も何も嬉しさと得意の餘り忘れてしまつた。山で残つたウイスキーを平げて夕食の膳が出る頃に信濃山岳會の牧氏が來訪されて、深更まで話ははずんだ。

翌日午後になつて大町に行き、對山館で夕食をすましてから、八時過ぎ長野に向つて徹夜旅行を企てた。流石に随分疲勞して青貝、高府と六里行つたら、ねむくつて歩けなくなり、ある宿屋の入口にごろねをして朝五時に又出發し、午近くなつてやつと川中島驛についた。それから汽車で一氣に金澤へ歸校した。

## 下廊下の記

冠 松 次 郎

平ノ小舎を起點として、中ノ澤、御山澤、御前澤を横きり、内藏の助澤の落口に着き、下廊下に入り、對岸に無名の澤及び新越澤の飛瀑を見て、大小二十餘回の壁へづりを爲し、架橋二回にして別山澤（新稱）の二丁程手前の別山河原（新稱）へ下り、

立山側より、後立山側へ、徒渉したが、天候不良の爲前進を止め、棒小屋澤の左岸に派出されたる尾根の二。六七米突の三角點のある處まで上り、棒小屋乗越から扇澤を大町へ下つた間の紀行である。別山澤の下が暫く悪いのに天候不良の爲尾根へ上つたが、日和を見て棒小屋澤手前の小澤から再び黒部川へ降つて逆に別山澤まで溯り、戻つて棒小屋澤の出合から東谷餓鬼谷を経て祖母谷へ下る豫定であつたが、天候遂に定まらず、鳴澤の支尾根で連日の雨に苦しめられ、増水及食糧の斟酌の爲大町へ下つた。

### 平の小舎まで

今年(大正九年)は長次郎を連れて行くのて是非平の小舎から下廊下を降つて鐘釣温泉まで出たいと思つてゐたが、さて出かけて見ると中々思ふ様には行けなかつた。殊に天候の不良は遂々肝心な處で私等を尾根上へ匍ひ登らせてしまつた。直ぐ其處の谷底に、幾つも組み合された蒼黒い尾根の狭間に劔澤や棒小屋澤の壯大な落口があるのに。廊下の激流が曲折せる赭壁の間に美しくい流域を造つて落走して行くのを俯瞰しながら、心躍禁ずる能はざる愛著の思ひを残して、大風雨の中を扇澤へ下つたのは、随分残り惜いことであつた。

今年も越中では虎烈刺が盛んだつたので、滑川驛を降ると消毒水で手を洗はせられ名簿へ住所氏名を書かされた。それから五百石でも同じ様なことをさせられたが、岩峠寺では頭から石炭酸水の飛沫を浴せられた。聞けばこゝでは百人程の患者が出て二十人は既に死んだと云ふ。何んだか不愉快な陰酸な氣持で夕方小見へ入ると、こんな山村にも同じ様に番小舎が出来てゐるのに驚かされた。來年は五百石の輕便が岩峠寺迄延長される筈なので、立山方面へ行く旅客は随分徒勞を省くことが出来る。小見に一泊して翌日立山温泉へ着く。藤橋の手前から左へ入る硫黄道は、昨年の不景氣で忽ち廢道となつて、今では僅かに炭焼、柚などの通ふ道になつてしまつた。然しあの優麗な稱名の瀑、爽快な大日平の高原や、白皚々たる大日山塊へ導くこの道は却つて今後登山家を益することは非常なもので

あらう。湯川眞川の出合の手前に百二十間程の隧道が出来て、私は杉皮を束ねて松火の代りにして其處を通つた。

千人近くの雑沓に落付いて寝ることも出来なかつた温泉を後に、湯川を溯つて佐良峠へ辿り着き、久しぶりて氷冷の雲霧に浴し、四境の高岳と面を接して、始めて消毒水の臭氣を振り落した様な氣持がした。温谷峠邊から夕立模様になつて、平の小舎へ着く時分には可なり降つて來た。岩魚釣が昨日あたり大町へ歸つたらしく、小舎には誰もゐないが、きれいに蕨蔭を敷つてあるのでその上へ横になつて休む。小降りになると人夫の一人の小林が竿を造つて釣に出かけた。夕飯間近に潑刺たる岩魚を大小十二三尾楊の枝に差して歸つて來た。越中澤で釣つたのだと云ふ。それを鹽焼にして甘い夕餉をすます。枝澤の岩魚は本澤のものよりも平たくつて身が締つてゐないのでまづいが、黒郡本流の岩魚は外の谷のものに比し遙かに肥つて油が乗つてゐるので美味いと云ふ。それに鼻の先が丸くなつてゐるので直ぐ分るそうだ。激流に栖んでゐる爲であらう。明日から本流の美味しい魚が鱈腹食へると云ふので人夫達も喜んでゐた。そして釣下手の長次郎迄竿を造り始めた。

八月三日は夜半から雨になつて翌朝まで降り續いた。小降だが兎ても澤を下る氣になれないので滞在ときめる。此處で一日や二日降り込められても後に天氣が續けばその方が都合なので、私等は却つて降る丈降る方がよいとさへ思つてゐた。午後から大分強い吹降りになつて來た。人里迄方十數里の溪谷の小屋に、雨聲と溪音が聞えるばかりで、時々小舎近く來ては囀る藪鶯の聲は、この無人の境を一層森閑たらしめる。小舎が暖かなので皆寝そべつては睡眠を食つた。そして時々起き上つては煙草を煙らして雑談に耽る。それから空模様を見に出ては又小舎の内にもぐり込むだりした。午後三時頃から溪聲が大分強くなつて水嵩が増した様だ。もう大町から來る者は今時分は此處へ來られるのだが、この天氣では皆大澤で滞在だらうと話してゐると、右の藪を分けて旅客が二人、荷負が一人入つ

て來た。温泉からかと聞いたら黒部を渡つて來たと云ふ。全身滴たる様だ。この降りに川越しをした困難は想像するに難くはない。黒部川は一尺以上も増水してもう濁り始めたので、越中澤附近の淺瀬を越したが随分えらかつたと云ふ。

風雨は益々激甚になつて、黒部川の叫喚が一層烈しくなつて來た。丁度午後五時頃金作が川縁へ下つて米を磨いてゐると、對岸でオーイと呼聲がする。一人籠渡しの受木へ手をかけて此方岸の救を求めてゐるのである。すると又荷を負つたのが五人許り現はれて、同じくオーイ〜と叫び始めた。金作は戻つて長次郎、少林と三人で渡しの所へ登つて針金を操つてやつてゐる。私も小舎から水際まで出て見たが、風雨は斜に水面を叩き、對岸楊の枝葉がどろろに亂れ、黒部川は既に數尺の増水をしてあの美くしい溪水は全く茶褐色の濁浪と化し、流木をさへ交へて轟々と渦巻き落て行く有様は凄まじい。それよりも驚いたのは平素水の少い針ノ木澤が數倍の水嵩になつて、同じく茶褐色の濃流が瀧の様になつて噴き出してゐる。

午後七時頃になつて六人の者が漸く皆此方岸へ辿り付いて、自分等に禮を云ふてをして人夫共ばかり六人こゝへ着いた事情を話す。前日某登山班と大澤の小舎へ泊つて、朝五人の御客様は先發して人夫等は荷造りなどして暫く後から峠道へかゝつたが、追々風雨が、激しくなり、峠上へ登つた時には随分強い吹降りて、兎ても目も開いてゐられない程だつたといふ。御客様方は天氣が好ければ針ノ木岳へ上ると云ふてゐたが、この天氣では無論黒部川の方へ降つたものと思つたけれども、暫の間峠附近を捜したが足跡すら見當らなかつた、然し雪の上の足跡は雨に消される故矢張峠道を越中側へ降つたこと、思ひ、皆急いで針ノ木澤を下り濁流を衝いて可なりの冒險をして、漸く此處まで飛ばして來たと云ふ。一行の一人は轉石の爲足の甲をの深に切つたので、私は藥を與へて手當をさせた。五人の旅客は多分大澤へ引返したか、峠の南側の風を遮る所を一夜を明したことと思ふ。然し此風雨中針ノ木登岳を取

行したり、又峠の頂き近くで誤つてマヤクボの方の雪溪へ紛れ込んだりしたらそれこそ非常な困難に遇だらう、遮蔽のない山巔に曝されたら遭難者を出さないとも限らない。その晩は人夫達も寝ずに心配をしてゐた様で如何にも氣の毒であつた。けれども數日の後大町へ立寄つた時、別段異狀の知らせないことを確めて、幸に此一行は健在で無事に立山劔方面へ行かれたこと、推測した。

### 平小舎 御山澤

八月五日。明方から雨が小降りになつて今日こそ天氣になるらしい。午前七時頃に六人の人夫は客を捜しに手輕な服装をして籠渡しを操つて針ノ木峠の方へ戻つて行つた。それから朝食を認め小舎の内へ又暫くの間休んでゐたが、雨が愈々上つて十一時頃には久し振りで快晴になつた。もう谷の上空は濃碧に冴々て、對岸の翠巒は朝日を浴びて鮮かな綠色に輝いてゐる。小舎の周圍の闊葉樹は朝の微風に身振ひして、バラ／＼と落ちて來る夜來の栗の音が斷え間なく聞える。何處から集まつて來たのか、赤蜻蛉が幾十匹も水溜りの上に群がつて笠の上莫座の上や釣竿の先にまで止つては羽根を休めてゐるものもある。川の水は見てゐる間に／＼落ちて行くし、干したものは皆直さに乾いてしまふ。昨日に打つて變つた陽氣さに小舎の内の笑聲も何となく賑やかである。

今日は御山澤の落口まで行くことにしようと思ふので悠々支度をして、人夫は荷の外に釣竿を擔ぎ、午後零時半に平の小舎を後にして、黒部川を降り始める。水嵩はまだ大きい水は奇麗に澄んで氣持がよい。小舎から川へ出て岸に添つて左の方へ廻りながら浅い徒渉をして、それから河の中の洲の上を行くと、追々川幅が廣くなつて來る。川面を吹く微風涼しく、四圍の情景が何となく快闊で、黒部川は丁度春先の様な長閑な景色である。左岸の段丘の上は奥深い楊や榛の木の森になつて、其前に鏡の様な水溜りが幾つも出來てゐるのが、青空や楊の姿を漂はしてゐる。時々鶉鴒が長い尾を動しては

石の上を飛びながらその縁を歩いて行く。右岸は針ノ木岳、スバリ岳一面の山足が絶壁になつて、その上遙に高く針ノ木岳、スバリ岳に續く絶巔が幾つも頭を並べて、山骨露はに日光を浴び、美くしいその假松の斜面をのぞかせてゐる。

川幅は益々廣くなつて来る。この邊の幅は三町餘もある。恐らく黒部流域で（平原へ出てからは別として）最も川幅の闊い呑氣な處だらう。尙河身の洲の上を行くと、左岸の藪の内から小流が流れ入り、それから三間程の澤が合流する。中の澤である。左岸の崖上に登つて楓や榛の下の根曲り笹の藪を潜つて行く、後立山側も河近くは急に緩かになつて、楊の茂つた洲が河の中到的處に續いてゐる。崖側が通れなくなると小へづりをして河へ降り、徒渉をして又崖上に登つて、熊笹の間を行く。午後二時對岸の元ザクボ澤を見る。水量は甚だ少い。暫くして又河原に行く様になる。ふと上流を顧みると夥しい雪を光らした赤牛岳が悠然としてこの谷を窺いてゐる。それが少し隠れると木挽山が見え出した。谷の走向が變つて行くに従つて、走馬燈の如く上流下流の景色が展開される。この邊一體に川楊の茂つた浮島の様な洲や、緩やかに川へ落ちて来る闊葉樹の尾根の出入が、如何にも穩かな黒部中流の趣をなしてゐる。下流を見ると何時の間にか赭岩崔嵬たる赤澤岳が行く手を遮つて、屏風の如くに立ちはだかつてゐる。後立山の連山としては高い方ではないが、黒部川から仰いだこの山の雄姿は随分立派で、立山側の黒部別山と共にこの溪壑に少なからず光彩を添えてゐる。これから下流暫くの間黒部川はこの二つの山岳によつて著しく屈折してゐるので、その險阻も豪宕も二山によつて形ち造られてゐると云ふてもよい位で、後立山縦走の旅客が赤澤岳によつてのみ好く黒部川の縦觀を恣にする事が出来ると云ふのも自然な話である。これから七八間の岩壁のへづりにかゝる。

私は一昨年春藏を連れて御山澤を降りて、落口で夜營をした。そのあひ間に岩魚を釣りながら平の方面に出かけた。中の澤手前まで行つたが空腹になつたので元と來た方へ戻つて、往きはこの壁へつり

をしたが、歸りには春藏が瀬を横ぎつて行かふと云つた。私もよからうと云つて後から付いて徒渉を始めた。まだ七月中旬で水量も今より遙かに多かつた。二三間入ると瀬が急に深くなつて春藏の足の下の石が動き始めて、一步／＼深い方へ引きづられて行く、彼は生憎杖を持つてゐなかつた、私は急に深くなつたのに驚いて杖を力に下流に向つて立つてゐた。春藏はだん／＼潜つて行く、腰から胸、胸から首まで、一度少し浮び上つたが今度は頭さへもぐつてしまつた。私は施すに計なく只愕然として沈み行く人を見送つてゐた。實際その時はせめて死骸丈でも引上げたいとまで思つてゐた。幸ひ流れが壁に付いて左へ曲つて行く處で、眞直に淺瀬の方へ／＼付いて、どうにか洲の方へ匍ひ上つたので、私は漸く愁眉を開いて、此度は自分が上流の方へ向き直つたが、丁度十數本の棒でひた押しに押される様で、足を切ることが出来ない。僅か二間近くにある淺瀬によろけ上るまでには、もう全身濕鼠の様になつてしまつた。それから二人とも眞裸になつて、いりつく様な河原の石の上へ衣物を干した。水が入つたので時計は止つてしまつた。早速地圖を取り出して干す、藁口の中にある紙幣が皆濕れてしまつたので、一枚々々石を載せて干し始める。約二時間程黒部川の眞中で日光浴をした、あまり時間がとれるので、下流の方から人夫が辨當を以てやつて來た、遠くから見て川の中に裸になつて、二人で一體何をしてゐるのかと思つたと云ふてゐた。今年考へるとこんな樂な處でどうして又あんな目に遭つたかと馬鹿々々しくなる。然し川は怖い物だとその時は身に浸みて考へた。

この道も昨年から岩魚釣が入つた爲大分よくなつた。この壁へづりをして山嘴を廻ると、すぐ對岸下流に堤の様な押出しを見せて、小スバリ澤が落ち込む。水は殆ど見えない。總じて後立山側から來る澤は源流地に雪が少ない爲か水量立山側のものと比較にならない。この下流二三町にスバリの山側が黒部川に危く懸崖となつてゐる、その灰白色の壁の下が御山澤の落口に當るので、割合に行程が近かつた。藪の内を潜つて小へツリをして河原へ下り、御山澤落口の廣大な河口洲へ出た。その取り付きの草藪

の中に新らしい魚釣の小舎が建てられてある。むさ苦しいのでそれから一町程下つて落口にある白砂の上へ荷を下ろして休む、丁度平の小舎から急がずに三時間を費やした。まだ午後三時である。これから御前澤の下まで降れるが、この美しい出合を棄て、行くのが惜いのでこゝへ泊ることゝして、氣持の好い白砂の丘の上へ天幕を張る。二人は焚木を集めに、一人は夕餉に供する魚を釣りに出かける。

御山澤の水は川楊の茂つた洲の奥の方から叫喚の聲を上げて縦横に飛び廻つて来る。それがスバリ山側の障壁の處で黒部川に突込んでゐる處が、池の様な淵になつて、深く澱んだその底を藻の様に岩魚が幾匹も漂遊してゐる。私は一昨年立山から此處へ降つて御山澤の落口の案外廣大なのに驚いたが、今年見ても廣々として氣持がよい。全部楊の密林になつてゐる中を走つて来る水は、恐らくその冷たさと美しくさに於て比較を絶してゐるだらう。私は試に嗽いで見た。そして一昨年この上流で徒渉をしたときの腰や足の冷たさを思ひ出した。

東面の大窪地の上へ峨々として聳えてゐる立山連峯が少しく斜に見える爲、惜いことにその大雪窪が大部分隠れて富士の折立岩の下の殘雪のみ稍壯大に見える。然し東面の大森林と悠揚なその大カールは何とも云へない程深邃の領域を形ち造つてゐるので、此處から立山を仰ぎ見るものはこの高原の中を辿つて登山がして見たくなるであらう。

立山本岳の上から見得る黒部川―東澤方面は別として―直下の黒部川は僅に此御山澤の出合にある深潭丈で、外は皆一面に交錯せる山稜で埋められてゐる。その積翠の深い底の削り取られた様な白い絶壁の間隙に湛えてゐる翡翠の様な水の澱みを、私は曾て神官から指さされて、始めてそれが御山澤の出合なることを知つた。そのときから御山澤を黒部川の漕へ出て、この水際へ佇んで見たくなつた。御山澤が好い澤であること、その出合の景色が美しいこと、大きい岩魚が多くゐて人が入らないので随分よくとれると云ふことも神宮が附足した。それから次の様な話しも聞かされた。つい近頃越中

澤の小舎で稼いでゐた富山の木挽が立山温泉の方へ歸るつもりで温谷峠を越へ、濃霧の爲過つて御山澤の乗越を上つて佐良峠を越えたものと誤信して、それから湯川を下るつもりで御山澤を下り始めたが、御山澤が中程で左折してゐる下が急に險惡になつてゐるので、そこを降り得ず濃霧と寒氣の爲精力盡きて岩の窟にしゃがんでその儘死んでゐたと云ふ。随分念の入つた誤まり方だけれども、始めての人が濃霧に閉されて地圖ばかり當にして行くこととはあり得られるかも知れない。日暮迄には大きな岩魚が大分釣れた。それを肴にして楽しい夕餉をすませます。黒部川の清流を眺めながら。

空はよく晴れてゐる。夕星はスバリの方にも立山の上へもやさしい瞬きを始めた。東面の森の上を木の葉の様に岩燕が舞ひ上つてゐたが、それが追々少くなり下弦の月がスバリの上へかゝると、この清爽な溪谷の夜も一層靜寂を増した。顧みると立山本峯の氷雪、殊に富士の折立の雪堤が月の光りに燦々たる銀光を放ち、鮮かな夜は雄山の宮まで物色することが出来る。川上から流れに添ふて薄絹の様な白霧が夢の様に漂つてくると、露營の煙りが何時の間にかその方へ吸ひ込まれて、共に川下の方へ流れ落ちて行く。この靜寂と柔軟の雰圍氣の中を、充實せる力を衝突させて行く黒部川の叫音、それを聞くと私等が流石に日本無双の峽谷の底にあることを思はせる。

平の小舎から黒部川を下り御山澤を溯つて行く立山東面の登山路は、その後岩魚釣が入つた爲黒部川の沿道が大分よくなつた。それ故信州方面から立山へ登る人、及び立山へ登山して信州方面へ出られる人は、當然この道をとるべきで、この沿道の壯觀は到底温谷峠や中の谷や佐良峠なぞの路筋とは比較にならない。平の小舎から御山澤迄の間の黒部川は最も風景闊大な處で、平の小舎から東澤へ溯るよりも遙に美しい。御山澤落口の美觀や、その下流御前澤に到る黒部川プロバアの豪壯幽邃な景色、御山澤自身の美くしい溪觀、タンボ澤の上流タンボのカール、これは越中ではライデンと云ふてゐる。立山雄山下の大雪嶺等僅かの距離で複雑な美觀を恣にすることが出来る。平の小舎を基點とすれば御山澤の落口迄三時間、御前澤の方を見に行くとするは往復四時間、この間は殆ど徒渉の要すらない位に歩きよい所で、然も溪の景色は非常によい。然し御前澤は餘程險惡の様に見受けられる。戻つて御山澤の落口から御山澤を約三丁上ると、タンボ澤が左岸から入る。それを

上つて其日の内に雄山の三角點の間近に出て夜營をして、翌早朝山嶺を極められる。御山澤を何處迄も溯つて行き、その源のカールで夜營をすれば同じく翌早朝は一の越から登山が出来る。然し御山澤は可なり長いので黒部川から溯つては一日に室堂までは無理で、室堂から下るのなら夕方方には大丈夫御山澤の落口即ち黒部川迄出ることが出来る。

### 御山澤 内藏助澤

八月六日。晴。今朝は雲行が大分早くなつて、日が出る様になると夥しい朝焼の雲が立山の上を掠めては下流の方へ頼れて行く。驟雨に遭ひさうな空模様だ。雨はもう随分降つた後なので、大したことはあるまいと思つて午前七時四十分出發する。御山澤の激流を横ぎつて立山側を降る。楊や榛などの茂つた闊葉樹の下を巨岩の間を縫つて下つて行くと、直ぐ足許は黒部川の激流が滔々として汀を洗つてゐる。黒部川も御山澤の落口を限りとして上流の平沙明媚の様子を俄然幽邃豪宕の色調を帯びて来る。兩岸殊に立山側は川に接した所は大分なだらからで、闊葉樹の繁茂した岸邊には河原もあれば砂洲もある。その上には大イタドリが密生して、薊や蓀などが一面に蔓こり、河原撫子やリンドウの花も美くしい。然し溪水は殆ど岸とすれ／＼に溢れて流れる。自然に配置された巨岩の間を渦行し、奔放して行くその溪水は、奔流激湍の連續で、もうこの下に越さるべき淺瀬などは全くない。深潭の上を網目を爲して流れる水。それが或時は巨岩の上を乗越して如露の先から放散する様な飛沫になるかと思へば、又數尋の底から湯の如く沸騰し、漲溢して来る。それが衝き落ちて行くと何時の間にか油の様な碧潭となつてとろ／＼と重く流れる。そして何處の淵を覗いても底の方に黒い斑點が動いてゐる。無數の岩魚の群、それが風に追はれる木の葉の如く吹流されるかと思へば激湍に向つて渦行して来る。これから先の黒部川は溪音の諧調樂を伴つた美しい水の回廊である。そして私等は初夏の様な柔かい日光を一杯に浴びて、川添を吹く冷風に送られ、新緑をくゞり淺瀬を涉つて降つて行くのである。

御山澤の落口から少し許り降ると河流が稍左折して又右折する。そしてびしゃ／＼足の先だけ浸す様な浅い徒渉を暫くすると、赤澤岳の黒部川へ突き出した大尾根の末端が幾つも釣鐘の様な壮大な赭壁を川に向つてのせかけてゐる。その手前の崩れの間から大スバリ澤が落ち込んで来る。水量は矢張少い。少し行くと立山側から小流が二つ流れ込んで、その附近に卵の花の様な白い花が満開して、その傍の白砂の丘がいゝ野營地を爲してゐる。これから内蔵助澤までは宜い夜營地はない。

御前澤近くなると谷の見通しが一際遠く明かになつて、左岸に乗り出してゐる丸い蒼黒の尾根、立山圖幅内蔵の助平の南にある一九八一米突のものが黒部川へ苳んでゐる、その後から遙に高く、遙に大きく、隆々たる赭黒の肩骨をおどらして衝き落ちて来る力の漲つた山稜の雄姿に、私等は少なからず脅かされた。とう／＼黒部別山が出て來たのだ。然もこの大山壁が黒部川へ突き入る所はあの大タテガビンであることを私は推測した。私の身の内に力が充ち／＼て心臓の鼓動を感じない譯には行かなかつた。早くあの下までへヅリ込んで一目でも下廊下の偉觀を覗いて見たいものだ。あの手前には黒部川本流が瀑になつてゐる筈だ。然し内蔵の助澤手前の大へヅリが通れるかしらんなどとそれからそれへと行く先の壯觀を想像して見て一人北叟笑んだ。河原が一しきり、大分廣くなり、それが又狭まると御前澤の落口に出た。午前九時過。御山澤から僅に二時間てこの間は歩きよく愉快であつた。

御山澤附近には先日岩魚釣が入つて五百匹程釣つて大町へ歸つたそうだ。御山澤の下では爆薬を水中に投込んで岩魚を打上げたと云ふ。けしからん惡戯をするものだ。その爲か御山澤附近では割合釣れなかつたが、御前澤近くなると盛んに釣れる。然も一尺三四寸以上の大きなのが蚊針を投げると同時に五六匹も矢繼早にかゝつて来る。傍て見てゐても愉快である。深潭の底から針を目がけて螺旋形に飛び上つて来る岩魚の輕捷なことは目にも止まらない。實際何處の淵を窺いても岩魚のゐない處はない。それが下廊下へ入ると更に大仕掛に群居してゐるのに驚かされる。然し岩魚も大分喰つたので

その嗅が鼻について來た。その爲か昨夜から下痢を催した。

御前澤は御山澤より稍小い。此邊から下は立山側が急峻になるので、この澤の落口は幅の狭い瀧の如き奔流になつてゐる。何となく陰鬱な澤で、二三丁上ると急に左折して著しく峻岨になつて來る。

そして奥へ入るに隨つて幅が益々狭く、兩岸が中頃では可なりの斷崖になつてゐる。樹木鬱葱としてその間に幾筋かの瀑布の懸つてゐることは請合である。樹木の饒多、山の深奥なる、立山人の所謂ゴゼンダンをなしてゐるので、そのサル又雪と共に立山東面の偉觀である。あたりのものは立山中で深奥の處の

様に思つてゐる。冬雪の中をこからネズコを盗伐して御山澤(雄山澤ではない)へグリ出したものがあるといふ。

岩魚釣が面白いので此出合でうか／＼と一時間半ばかり費してしまつた。午前十一時頃に内藏の助澤に向つて降る。この道は後立山側の澁近くは一帶に緩やかになつて、樹木が茂つて低い丘續きになつてゐる。暫くの間同じ様に美くしい溪水を眺めながら下つて行くと、河床の勾配が激甚になつて來ると足趾は却て仰ぐ様になる。三十分近く行く内何時しか巨岩亂堆の上を行く様になつた。丁度山頂やガレに積堆された巨大な破片岩の様なのが河原から數丈も堆高く重なつてゐる。私等はその上を越え又その間の僅かな穴を匍ひ出たりして通つて行つた。これは往昔立山側の山側が大規模に剝落されて出來たもので、左岸の山は見渡す限り斷崖を爲してゐる。これから内藏助澤の入口近く迄はこの亂暴な薙崖の上を川に添ふて行くので中々歩き悪い、然しこんな處は見たいと思つても他に類例のない珍しい處である。

人夫等は釣竿が邪魔になるので皆棄て、しまつた。途中迄來ると夕立が盛んにやつて來たので已むを得ず巨岩の間の砂の上に荷を下して休む。長次郎が杖を持つて先を見に行く。暫くして戻つて來たが大して要領を得ない。中食を使い二時間程休んでゐる内に小降りになつたので又下り始める。谷が左方へ著しく彎曲すると遙か下流の突當りの處に、右から瀧の様な澤が落ちてゐるのが見える。内藏

の助澤に違ひないと思つた。その間には瀑らしいものはない、只落差が著しくなつて來たので、地勢上如何にも瀑がありそうな感じがする。然し私等は遺憾ながら黒部川の本流には瀑がないと云ふことを確めて少なからず失望した。赤澤が入つて内藏の助澤間近くなると何處から殖えたか黒部川の水が驚く程の水量となつて、内藏の助澤の下で右折して滔々として下廊下に轟進する。

私等は内藏の助澤の入口の手前で前進することが出来なくなつた。川は深淵を爲し兩岸削るが如く、右岸の幘壁は直立百米突を越え、赭黒色の斷崖が丁度本箱を立てた様に四角になつて、黒部川に向つて聳立してゐる。左岸立山側の絶壁は稍傾斜を爲してゐるが足がゝりが悪いので上ることが出来な。皆荷を下ろして呼吸を入れる。私等は此處で初めてロープを出した。

こゝから下廊下は始まる。この兩岸にそゝり立つてゐる幘壁がその關門を爲してゐるので、これから溪水は追々狭められて、遂に下廊下の險を形ち造る。長次郎はロープを腕へ巻き付けて川縁を壁凹に添ふて暫らく行つたがやがて戻つて來た。行けない爲であらう、それから直ぐ背後の高い岩壁を可なり匍ひ上つて二丈程の絶壁の下で右へへづて漸くその上へ出てロープを垂らす。皆その壁の下迄登つてロープに助けられて絶壁を登り、その上縁を後へ廻つて僅か五六寸の崖縁をそろ／＼歩いて降りにかゝる。又ロープを用ひ少しばかりの壁を下ると、今度は深淵の上の斷崖を横にへづりながら下る。下を覗くと蒼々たる激流が岩を噛んで物凄。私はロープを腕に巻き付けて上で金作に操つて貫つて深淵をよけながら横へづりに漸く淺瀬へ下り、徒渉をして大きな岩の下を廻つて内藏助澤の落口に辿り付いた。このへづりには三度ロープを用ひ、皆が荷を下ろして河原へ出る迄には約一時間半を費した。これが内藏の助澤入口の大へづりて、險阻だが思つたよりも短かゝつた。午後四時を過ること十分。適當な夜營地などは勿論ある筈はない。どうせ黒部川の核心まで入つたのだから、粗末を甘んじて今廻つた岩影になる僅かばかりの草の傾斜地へ天幕を張る。

内藏の助澤は御前澤よりもう一層急流となつて流れ落ちてゐるが、水量は丁度伯仲する。御前澤の陰鬱なのに引かへ、上方間近く内藏の助平があるので、空が非常に近く、源流地が大きな窓となつて、如何にも壯快を極めてゐる。私はこゝで上つて見たくなつた。もし先進して川を越すことが出来なかつたら戻つて来てこゝから立山東面へ登つて見ることに一人で定めた。この澤は黒部別山側より右岸の方が遙かに立派で、數百米突を算する赭崖が丸く大きく延び上つて高く碧空を限つてゐるのが見上げると如何にも豪壯な感じがする。この様子では内藏の助澤の瀑附近は嘸立派なことだらうと思つた。今夜の夜營地は随分悪い處で暴風雨に遭遇しようものなら差當り避難所がない。急斜をした河原の石の間へ火を焚いて飯を煮る。小林が又新しく竿を作つて魚釣りに出かけた。

夕榮の空は高く澄み渡つて金絲の様な細い雲が幾筋も上空に懸つてゐる。明日は天氣らしい。函の底に入つてゐる様なこゝからは眺望は全くない。その代りに何處を見ても峻高壯麗な岩傳ひである。黒部川は内藏の助澤の入口で殆ど直角に折れ曲つて、後立山側の赭壁の屏風が九十九折になつて、ひし／＼と流れを取圍んでゐるのが、追々狭くなつてこの澤の一町程下で溪水はもう樋の中を溢れる様に流れて行く。河床が急激に陥没して行くのに、霧の様な飛沫が上騰してゐるので、先方の模様さへ分らない。内藏の助澤の出合から下流を眺めると瀧でもありそうに思はれてならない。私は流水の面白さに暫くの間時の經つのを忘れてゐた。あはたゞしく流れて行く水。それは私をして却つて自然の悠久を思はせる。

寢ようと思つたが米の事が心配になり出した。成るべく荷を少なくする爲出來る丈節約して持つて來たのに、平の小舎で降り込められたので豫定より分量が二日分程減じてしまつた。着莫塵を擴げて米を量つたら漸く八升丈で今夜の分を入れて一斗位しかない。私は内藏の助平を上つて室堂から米を持ち込まうと思つて長次郎に相談したら、長次郎はまあ少し節約すれば行けるでしようと思ふ、愈々

不足したら岩魚でも噛ることにしようと思ふて皆窮屈な眠りに就く。天氣がよいのが何より氣が樂で谷底の夜營は至極暖かである。

### 内藏の助澤 黒部別山澤

午前七時過に夜營地を後にして瀧の様な内藏の助澤を横切つて巨岩の上を行く。それから崖側の急斜を泥草の上を匍づつて行くと汗でびつしよりになる。これは危険に戰慄する冷汗ではないが、渾身の努力で行く爲一とへぶりすると流汗滴たる様で、身氣は却つて壯快になる。又巨岩の間や上を縦横に縫つて行くと、谷の走向は左へくと折れて行く。下廊下で最も川幅の狹隘な部分で、對岸の壁は手の届く様に近い。この邊は兩岸が高く狭まつてゐるので殊に幽暗の感じがする。後立山側には自然に割れてゐる大きな岩穴が幾つもある。その入口に罅から離れようとする岩燕が巢に集る蜂の様に群がつて、溪流の上を盛んに飛び廻つてゐるのも、高く尾根上の方へ揚つて行くのもある。恐ろしい急斜で落走して行く壯烈な流水。その姿態その色彩は到底私等の筆舌のよく形容し得る處ではない。

下廊下へ入つてから魚が一層多くなる。淵の中を遊び廻つてゐるのを見ると、實際釣り上げて見たくなる。然しもう釣り處ではなかつた、私等は一步く眞劍にふみ込んで行かねばならなかつた。流れの左折してゐる處でロープを二回用ひて壁を下り澗へ出ると、溪流の曲折が少くなり、對岸の絶壁の間から一間位の幅で、厚さの方が有る水が迸しつて、五六間の瀑となつてゐる。その上方が凹んで尙ほ二段の瀑が山稜の方へ隠れてゐる。私は鳴澤の瀑と名付けた。

午前九時、河の真中へのさばつてゐる巨大な岩の上で休み、紀念の爲石の上へ署名をする。これで大タテガビンの大部分を越した譯になる。後立山側は全く直立の壁續きになつて、その足を深潭が洗つて行くので取り付き様がないが、幸に立山側は黒部別山の絶壁が流れへ入る處に又小さな壁が

幾つも堤の様に派出されてゐると、巨岩が都合よく配置されてゐるので兎に角足がゝりがある。これから黒部別山も一しきり稍なだらかになつて、三つ程に割れてゐる峨々たるその山巔がよく見える。岩の上で一時間程休息して又下り始める。少し行くと壁になつた。長次郎が素早く先へ登つては繩を下してくれる、それをたぐり上つては又降る。二三回で河原の上の低い壁の上へ出ると、對岸の絶壁の割目から先刻のより稍大きい瀑が同じ様に溢れ出てゐる。その奥の方の尾根の懐が可なり廣くなつて美しい新緑を押し分けて遙かに二段の瀑が懸つてゐる。これは新越澤の落口で、新越の瀑である。黒部川はこの附近で又大分狭くなつて大體同じ走向だが、暫く電光形に曲つて行く。その中を溪水は深く貫穿して、川幅が壓縮されると水は際立つて濃厚な紫碧色に變つて来る。又河幅が稍廣くなつて石の間を左岸の浅い所へ下つて行く内、自分等の行く先は一帶に壁がのしかゝつてゐるので、足場を搜す爲石の間に荷を卸して休む。どうも足がゝりが悪い。兎ても此處丈は壁へつりが出來ないと云ふので、己むを得ず河の中を行くことにする。然し前は奔流と深淵で然も壁に付いてゐる處で一際深くなつてゐるので當惑した。長次郎は何か成算あるものゝ如く、二人を連れて上流の方へ向つて行つた。私は川の中の石の上へ立つて漫然と下流の方を眺めてゐた。東京のこの日は大分強い吹き降りだつたそうだが、越中の方は幸に今日が一番好晴の日であつた。その爲に私等は何等不安の考もなく呑氣極まる谷渡りを續けることが出來た。

暫くすると金作と小林と四間餘の流木を擔いで來た。その後から長次郎が細い三間程の丸太を持つて川の上へ抛り出す。これから急造架橋の作業にとりかゝるので、私は好奇心を以て眺めてゐた。今私等のゐる處はほんの少ばかり石の洲になつてゐる。その壁に向つた汀へ皆で交互に石を脊負はせては、後向きになつてどん／＼石を水中に投げ込んで、それを積み上げて橋臺を造る。それから丸太の先へロープを結んで壁の方へ仆して其凹に掛ける。丸太の根元は大石を三人で荷つて二三枚その上

へ載せて動かさない様にする。それから二人で丸太をしつかり押へ付け金作が壁の方へひよろ／＼と歩き始めた。向ふへ着くと僅かの壁の回みに兩足を掛けて片手で丸太の先を掴んで、片手で長次郎の方から差し出す細い丸太を握つたがその肢體は著しく震えてゐた。これが手摺の代りになるので、もし私か途中で亡つたらこれを掴んでくれと云ふた。然し後に金作の談によると何しろ丸太を支えてゐる壁の回りは僅かに五寸四方位のもので、その足が／＼も又少しばかりの岩の襞に過ぎない。若し私が這らうものならそれこそ金作も諸共淵へはまり込むに極つてゐるので、氣が氣でなかつたと云ふてゐた。この架橋を渡つて漸く岩の襞にへばり付いて、稍淺い處へ下つて荷を受取つてやる。それから皆河の中の大石の所まで辿り付いてその上へ荷を上せる。その内に長次郎はもう次の作業にかゝつてゐる。ロープに力を入れて引張ると、壁から外れて激流の上へ流れ出る。それが一廻りして奔流の中を蔦進すると、却つて流れの勢ひで飛沫と共に三四間も飛び上つた。巧みにロープで操つて、それを巨岩と巨岩の間へ架ける。そして先へ渡つて向ふで押へてゐる。それから私等も皆それを渡つて、暫く行くと漸く河原が穩やかになり、別山中央部の稍廣い窪地へ出た。川に向つてゐる處が高い砂丘になつて、その内側が山裾の緩斜地を爲して、殘雪が夥しく積堆されてゐる。その下の處で中食を使ふ。午前十一時半。先刻の架橋丈に一時間餘を費した。八月になつて一尺五寸以上も減水してゐたから、この位で濟んだが、水の多い時には中々の難所だと思つた。

立山側が益々險惡になつて來てもう河の中は歩けなくなつた。これから連續の壁へづりにかゝるので、然もその下は悉く深淵と奔川とに圍まれてゐる、私等の動作は緊張の極に達した。この邊には岩の襞の外には手が／＼になる草も木もない。樹木らしいものは數百米突の上に灌木が生へてゐる丈で、もう架橋に供する材料もない。退くことの嫌いな越中の人夫、その内でも長次郎は險峻の所へ來ると自から感覺が鋭敏になり、動作が輕捷になる。そして休むことも忘れて迅速に險阻に向つて突進

する。ロープを腕に巻き付けて深潭の眞上を蔽ひ冠さつた様な岩壁に身體をへバリ付けて、大手を擴げてへづゝて行く様はヤモリの様で、見てゐるものゝ方が冷やく／＼する。それでも何時の間にかへづり抜けて上つて來ては私等に繩を投げる。然しこゝでは流石に四五回もロープを身體に巻き付けて金作に操縦させた。此處は矢張黒部別山の山壁が黒部川に落ち込む所へ低きは二三丈、高きは七八丈の壁が突き出してゐるので、それを昇降して行くのに私等は連續十四五回のへづりをやつた。壁の中には石板石の様な滑かな光澤のある六角體の巨大なのが谷に向つて傾いてゐるのがあつて、足が／＼がないので私は上下でロープを引張らせてそれを便に匍ひ上り匍ひ下りた。私などは幾度も體をロープでタスキに結びそして危険な懸崖を下つた。

このへづりを終る頃深潭の上四五丈の所を、僅かに二三寸の岩の巖を足が／＼に横へづりをさせられた。身體がロープで巻かれてゐても用を爲さない。一度足を這らせれば數間横に振り飛ばされて岩壁に身體を叩き付けられる。私は戰々として稍淺い水溜りの上へ下つて太息をついた。この壁へづりは呼吸もつかない程迅速に進歩したが、それでも二時間半を費やした。河縁の岩の間を少し行くと又三四回同じ様な壁へづりをして、最後に黒部別山中央部の大障壁の所で、立山側は絶対に進むことが出來なくなつた。所謂谷窮はまつて道通ずるの類で、其處が俄然廣い河原（下廊下としては）になつて、然も御詠ひ向きの徒渉點を爲してゐる。私等は思はず大聲を擧げて喜んだ。そして後立山側へ渡れることが確實になつたので、もう下廊下を全部降ることに成功した位の感激の思ひが私の心を一杯にした。長次郎も喜んだ。金作も小林も喜びの色が面へ溢れてゐる。

こゝで皆眞裸になり徒渉を始める。長次郎が私の長い杖を携え、私は長次郎と腕を組んで流れへ入る。四五間行くと水の色が澱んで來て俄然深くなつた。私はひやりとした。胸近くまで水に浸ると飛沫が顔へかゝつて來る。表面が緩かて底の方で素的に早く流れて行くので、急がないと足を擧げる度

毎に身體ごと浮上りさうになる。下腹に力を入れ腰を落ち付けて漸く二ヶ所深い處を横ぎつて對岸に着いた。此處は川幅が十二三間ある。大石が全くなく川底が小石で均らされた様になつてゐるので足場がよい。それに伏流にでもなつてゐるかの様に水が案外少ない。私は渡りながら底の石までよく見える美しい水を覗いて、こんな穩かな流れが下廊下にあるのを不思議に思つた。然し七月水量の多いときは此處の徒渉も随分困難のことだと思ふ。長次郎は又戻つて今度は荷を首の上へ載せてやつて來る。後から二人とも裸體で荷物を持つて川越しを始める。砂利の洲の上が白砂の丘になつてゐるのでその上へ荷を上げて身體を拭ふ。まだ午後三時頃である。私はこゝ四五日湯へ入らないので早速美しい淺瀬へ身體を浸し溪流を顧みながら心行く迄水浴をした。然しその爲に風邪をひいて翌日一日は頭痛で悩まされた。

今夜はこゝで野臥することに定めて、下流を見に行く。平地は此處僅か三四十間で、その先は後立山側の岸邊には巨岩が一杯に乗り出してゐる。二丁程下ると黒部の別山澤が急傾斜をして落ち込んで來る。全部雪溪で落口迄雪で埋められてゐる。この澤を境として黒部別山の頭が大きく二つに割れてゐる様に見える。その先の方の頭を誰れか仙人山のツゴだと云ひだした。そうするとこの澤が劔澤で私等は劔澤迄こぎ付けた譯だが、棒小屋澤が出ないのが不思議だなどと、一時は途方もない滑稽極まる間違ひをした。然し澤が小さいのに距離が短か過ぎるので、勿論間違ひだとは即時に知れて大笑ひをした。澤の下で流れが右折して又左折する。この下は谷が狭まり水が深くなるので暫くの間又惡い。私等は流水を集めながら野營地へ戻つて天幕を張つた。

今迄歩いた下廊下の内でこゝが最も形勝の地を爲してゐる。對岸立山側に壁立してゐる黒部別山の山側は、直立千有餘尺の斷崖が數町の間赭黒色の大屏風を擡げて、その脚底を洗つて行く黒部川は、今迄の様な巨岩の間を狂奔する激流ではなく、この障壁の方へ傾いて、聲をのんで蒼々として流れて

行くのである、上高地の梓川の様だ。然しその美しい楊や白樺等が無い代りに、溪水は遙に紫碧色の深秘を凝してゐる。そして四境に壁立してゐる斷崖絶壁の壯麗豪宕は、私をしてまだ曾て覺えない程溪谷の豪華を味はしめた。ア、黒部川。私は御山澤附近から今迄或時は深遼溢るゝ様な溪水に魚を漁り、或時は壯麗極まりなき峻流と狹壁の間をさまよひ、又は明るい荒蕩たる激湍に、身を以て僅に懸壁をハツリ、一本の丸木橋に命をまかせ、今又この清流に壯美比なき懸崖を仰ぎ、暮れ行く夏の空を眺めてゐた。

何處から集まつて來たのか無數の岩燕は、この峭壁に蝕はれてゐる岩穴の周りに群つて己れの峙に就かうとしてゐる。空は夕榮をして來た。雲の多い爲一層の美しくしさである。上流空際を聳えてゐる赤澤岳。その鎌首に縋れてゐる亂雲が金茶色の光を放ち、丸く聳えてゐる第一峰も、槍の様な尖鋭を挺んでゐる第二峰も、夕日に輝いて炎の中の大殿堂の様に見える。

爽快な夕が來た。細長い狭谷の空に夕星が幾つも夢の様に顯はれて、それが漸く光を増すに随つて溪谷は蒼然としてほの暗く、溪聲は一層その雄叫びを増した。天幕の中へもぐつて此處でとれた岩魚を焙り、今日は黒部川を越した祝ひに、ウキスキーの二合瓶を傾けて、賑かに晚餐を共にする。

この野營地も岩の間の平砂地で居心地がよいが、一度大風雨に遭ひ、黒部川が一間餘も増水した場合には潜つてしまふ。後ろは一面に立壁になつてゐるから避難所が一寸見當らない。それ故好い夜營地だが安全と云ふことは出来ない。先づ今日中食した黒部別山の裾の窪地位が安全な夜營地で其外には先づない。

### 別山澤 岩小屋澤支尾根

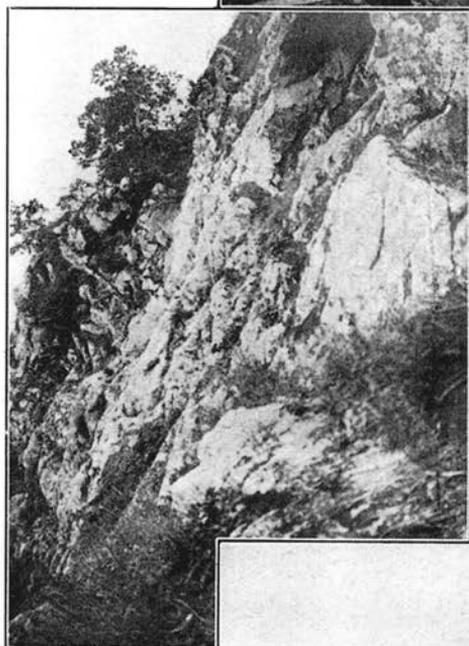
八月八日。空模様が十分變つて來た。夜中天幕の窓から覗くと溪谷の上は大部分雨雲で蔽はれて、

僅かに二三の星がその奥で幽かな光を放つ丈で、明方になると風さへ加つて時々雨がバラ／＼と落ちて来る。天氣がむづかしいので心配になつて來た。この下流が暫く澤の中を行く様になるので途中で大雨になると非常に困難な目に遭ふので、皆で相談をして結局一度尾根上へ登り、日和を見て棒小屋澤の一つ手前の小澤を下り、逆に別山澤まで溯り、それから又下流へ降つて行くことにしようと思ふことになつた。徒渉點の前から後立山側に、川添近くまで灌木の茂つた、尾根へとりつゝのに屈竟な處が一ヶ所あるのを昨日見たが、それが私等を尾根上へ導く一つの誘惑になつたのは否めないが、兎に角深い谷を渡るのには場所の險惡よりも、天候不良の方が遙かに氣になるものだ。天幕を疊んで午前六時過に夜營地を後にして、少し上流へ後立山側を壁に付いて徒渉する。三十間程戻り、前記の低下してゐる尾根の末の壁の間にある溝の中を登つて、ロープを用ひ、それから急峻削るが如き榛莽草藪の間をかき分けながら喘ぎ／＼登つて行く。灌木がなければ兎ても登れる所ではない。行けども／＼傾斜は依然として、且つ密叢の中を脱することが容易でない。文字の如く藪の中を潜つて約二時間ばかり匍ひ上つたので、全身汗みどろになり、咽喉が饅いて四肢著しく疲れて、倦怠困憊の此旅行で最も苦痛を感じた。大分上つて顧みると尾根の間から遙下方に昨日通つた黒部川の流域が見える。黒部別山の七合目邊に對して休んでゐるので、別山澤が地圖の如く三つに岐れて皆雪で埋められてゐるのが中々壯大に見える。

勾配が稍緩やかになると、闊葉樹の間に溝の様な窪地が續いてゐる處へ出る。空腹になつたので中食をする爲に休む。激烈な労働をした後なのに、水がないので咽喉がひり付いてどうしても飯が通らない。それは私ばかりではなく山慣れのしてゐる人夫等も皆少し食ひかけたのみで止めにしてしまつた。そして異口同音に水のある處まで行かうと云ひ出した。然しその水が頗る疑問なので、運惡く行くと今夜は水の無い夜營をしないとも限らない。私は疲勞もしたし天氣も悪いしするから、若し水のある

處があれば、そこで夜營をするから水を捜しながら行かうと云ふた。川から三時間餘も上ると傾斜は大分緩かになつて唐檜の森の間に行く様になる。藪の内にはもう切開が續いて間もなく尾根の黒部川に向つて二つに岐れた處に出る。もう三角點が近くなつたと思つた。處々唐檜の大木が根元近くから切り仆されてゐる。長次郎はこれは測量の見通しの爲に切り拂つたもので、もう直に三角點の處へ出ると云ふた。その内に木の茂つてゐる平地の藪の中に二〇六七米突の三角點を見出した。三角點があるからこの近所へ野營をしたに違ひないので、大方水があるだらうと長次郎が主張した。それから窪に付いて一周り廻ると果然小さな池寧ろ水溜りがあつた。人夫は三人とも岸へ行つてあたふたと水を飲む。私も水呑みですく、上げたが番茶を煮出した様なその色を見て驚いた。然し背に腹は替へられないので、思ひ切つて二三杯續けてそれをのんでしまつた。あまり好い心地がないので寶丹を出して口直しをする。午後一時少過水溜の傍の平地へ天幕を張る。愈々雨が降り出して來た。森の間を縦横に擴がつて居る霧風は氣持が悪い程濕氣を帯びて來た。兎に角泊りに付くまで天氣が保つたので非常に都合だつた。長次郎は後ろに生へてゐる十數丈もある唐檜の大木の上へ登つて行つた。まだ霧の間から四方の様子が見えると見えて、大聲を上げてよく見えると云つてゐる。その内に雨が強くなつて來たので、遂々天幕の内に入つて寢そべつてしまつた。雨は夜中降續いて翌九日の朝になつても歇まなかつた。午後から風が大分加はつて盛んに梢を鳴らし始めたが、その内に雲が追々千切れて谷の方へ落ちて行く様になつた。

夕方は快晴になつたので天幕を出て、夕暮近くの靜寂な森林の中を逍遙する。見てゐる内に空は著しく夕榮して來た。日本海に入らんとする落日の強光が後立山の連山に反映するので、北方面の大岳小岳、山側、高原、皆一樣に酔へるが如く、白馬連峯清水尾根、不歸、五龍、鹿島槍の上半身は燃え立つ様な朱紅色を呈して、その炎の先が森林の中を透して野營地まで浸み込んで來た。上空は心往く



上 種蒔より飯豊本山及草履塚（左

端）を望む

中 御秘所の下段

下 飯豊山頂より御西方面を望む

辻本満丸氏撮影





まで晴れ渡つてゐる、然し雨雲の名残が何處の山腹を見てもその凹や鞍部にまつはつて、する／＼と乗越しては流れる様に黒部谷に吸込まれる。谷の行末は銀灰色の雲が一杯に堆高く、すばらしい速力で日本海の方へ崩れて行く。

もう此處まで登ると我れと殆ど對頭の黒部別山は物の數にならぬ。夕陽を背にした立山方面は蒼茫として今正に暮れんとしてゐる。燃え立つ様な後立山の光耀に比して、立山は又何と云ふ氷冷寂寞たる姿であらう。八月だと云ふのにその東面の雪は盛んなもので、まるで氷山の様だと私は思つた。著しく暗黒味を帯びた筈の如き山稜の中に、蓮華の花の開く様に擴がつてゐる大雪溪の冷い色彩を眺めると、私は身振ひする程なつかしくなつた。先刻は霧雲の間から立山本峯を眺めてゐたが、餘り壯大峨々たるので劔ヶ岳と間違へた。然し劔は其右後に氷柱の如く折れ重さなつて聳えてゐるのであつた。長次郎澤の大雪溪に胸間を彩り、そしてその兀々たる肩骨は無數の牙をむき出した様な險峻を以て、三窓から小窓の方へ續いて行く。後立山の山稜から見ると、ずつと下つてゐるこの邊から立山を仰ぎ見る方が遙かに壯麗で、私は今迄見た立山の内で一番豪壯を覺えたのは矢張り今度であつた。

黒部別山の左奥に笹原の様に鮮綠色を埋めてゐる内藏の助原の高原も美しく、雄山下のタンポの窪地も同じ様に青々として、随分廣くなつてゐる。そしてその間に晶々たる大残雪を湛えてゐるサル又雪の大窪は實に豪華を極めてゐる。

夕焼は何時の間にか色褪せてしまつた。私は天幕の傍へ返つて來た。そして又後立山の連山を顧みた。柔らかい桃紅色の山の肌が漸く移つて美しく浅葱色になつた。それが漸々濃くなつてつややかな青磁色に變つて行くかと思ふと紺青のとばりが何處からともなく襲つて來た。その内に遂々暗黒のマツスが見渡す限り擴がつて、空のみは燦然たる星の世界となつた。然し夜目にも明るく森林の間を

透して、糶糊たる白光を覗かせてゐる偉大なる存在は、立山東面を飾る大氷雪であつた。

今夜は前日から滞在であつたので中々寝つかれない。午後九時頃になると天幕の外の風物が何となく騒々しくなつた。頭を出して見るとあの美しい空はかき消す如く暗黒になつて頭の上を盛んに霧風が渦巻いて行く。そして夜中になると又ザンザ降となつたので私等は顔を見合せて失望の吐息をついた。雨は翌朝になつても歇む模様はない。四日餘分に滞在したので米は最早残り少なくなつた。私等は川の末へ下つて行くことを断念して今日は大町へ降りなければならなくなつた。

十日午前九時。結束して風雨の中を國境の山稜に向ふ。一時間位で森林の中を抜け、ナ、カマドの藪の中を潜つて行く内、急に明るくなつて國境近くの草原の大斜面へ出た。それから山稜に辿り着いて、棒小屋乗越の手前の奥小澤を迂る様に下つて、扇澤から籠川へ出た。風雨は益々激烈になつて、大町へ着く時分には合羽を着てゐても腹巻まで滴たる様になつた。(了)

雜 錄

○飯豊山御秘所の下段

飯豊山の登路中で、名高い御秘所ゴヒシヨの下段と云ふ處は、從來登山家の紀文に記されたことが無いやうであるから、今後此靈山へ志さるゝ人々の參考迄に、一昨年七月下旬に於ける私の經驗を書いて見やうと思ふ。

會津口に依つて、一ノ木村から川入の孤村を過ぎ、御澤ミササキから著しい登りとなり、下十五里、中十五里、上十五里、笹平、下横峰、上横峰等の名所を過ぎて、先づ地藏山の頂上に到着する。残雪斑々たる飯豊本山から草履塚を経て、南方箸ノ王子ウツクに連なる山脈が一眸の裏に見える。地藏山から山稜を傳つて劍ヶ峰の嶮を過ぎ箸ノ王子（五萬分地圖の三國岳）に登り着くと、始めて實川の豁谷を隔て、残雪皚々たる御西ミニシ、大日岳の連脈が望まれ

る。其高山的な景色は確に登山客を驚喜せしむるものがある。此處から山稜に沿ふて甚しき上下もなく、駒返し、七森ナナノモリを経て種蒔タネマキに至り屢残雪を踏みつゝ切合キリグハセを過ぎ、稍著しく登ると草履塚（地圖の一九〇八米地點）の凸點に到達する、此處は其名の示す如く、登山道者の草鞋を取換る處で、朽ちかゝつた遺物の累々積まれてあるのは聊不快の感を起さしめる『山岳』第三年第三號二六頁に大平辰氏が、草履塚を岩越羽三國の境界、即ち所謂三國岳の邊とせられしは、今より見れば誤なるも、地圖不完全の當時にありては勿論致し方なし。草履塚から暫時急に下ると姥小屋に至る。女人禁制を犯して登山した婦人が、此處で倒れたのを祀つたとかて、小祠の内にある石像は乳房の大きいのが殊に目につく、一寸日光志津の婆さんを思ひ出させる様なものである。偕て此姥小屋と本山直下にある御前坂ミマエザカとの間にあるのが、御秘所の難場で、それには上段及び下段の二路がある。上段の方は普通登山客の通過する處で、多少峻峻とでも云ひ得るかも知れぬが、山稜の上を行くのであるから、

左したることは無い。之に反して下段の方は可也  
 長い急斜の岩壁を蟹行するので中々危いと云つて  
 も差支ないと思ふ。一ノ木本村の社務所にて發賣  
 せる繪圖の説明には、「草履塚、姥小屋ヲ過ギ御秘  
 所ノ嶮アリ、怪巖高ク峙テル所、横行纔ニ通過ス  
 ルヲ得、巖崖ノ上別ニ山橋ト唱フル徑アリ、嶮難  
 遙ニ劍ヶ峰ニ過グ」と記してある。此山橋と云ふ  
 のは、恐くは上段の方であらうが、これは私の記  
 憶では寧ろ劍ヶ峰の方が嶮峻と云つて宜しい。「嶮  
 難遙ニ劍ヶ峰ニ過グ」と云ふのは下段を指すもの  
 であらう。昔は此方が本道であつたのであるまい  
 かと思はれる。登山客の多數は此下段の路を通ら  
 ぬやうであるが、道者の中には之を通過するもの  
 があると聞いた。自分は飯豊の如き廣大な山岳に  
 なからず驚されたのである。

此岩壁は五萬分地圖に據ると、一九〇八米地點  
 (即ち草履塚)の北々西に當り一八〇〇乃至一八五  
 〇米程の高距に記されてある。然し蹊路の記號は  
 其上部(即ち所謂上段)を通つて居て下段の方には

通路が記されていない。岩壁の長さは、そのときの寫  
 眞に依つて概測すると、凡そ二十間近くあること  
 になる。通過路は中程からは幾分登り氣味になつ  
 てゐるが、岩の出張りを多少屈んで通る處もあつ  
 又途中に岩壁の突出部があるから、一方から眺め  
 て横行者の姿を見失ふ場所もある。岩壁は中々急  
 斜してゐて高さも随分ある。下の方を見ると眼が  
 眩むと云ひ得やう。兎に角その時、先導した案内  
 が私に豫告した如く、落ちれば助からぬことだけ  
 は充分保證出来る。途中で立竦むだ場合には、引  
 つ張つて連れて行くと云ふことは到底出來難い場  
 所と思つた。岩は頗る丈夫で手足のかゝりは申分  
 が無いから、頭の確な人ならば、毛頭墜落の危険  
 は無い。然し私は東京の電車の中などで、時々腦  
 貧血を起して倒れそうになる處のある人間である  
 から、内心大に不安を感じざるを得なかつたので  
 あるが、幸に無事通過することが出來た。要する  
 に此處は私の從來の登山經驗中では、珍らしい處  
 で、多少變つた場處を歩きたいと思はるゝ方々は、  
 通つて見らるゝも宜しからうが、敢て推薦するこ

ともしない。

御秘所を過ると程なく御前坂の小屋で、飯豊山は、脅された登山客を迎へて呉れることにならる。

(附記)東京から飯豊登山を行ふには、申す迄もなく、岩越線山都驛で下車し、一ノ木本村(一ノ戸村)から、會津口の登路に依るのが最も捷路である。自分は喜多方で下車して熱鹽温泉に遊び、それから一ノ木村に至つたのであるが、熱鹽には人夫が少ないから、荷物が多い人には其雇入に困難することが無いとは申されない(熱鹽温泉場は昨年焼失したが今は多分恢復したことと思ふ)。一ノ木村には立派な旅館と云ふ程のものはない。自分は雜貨店兼業の上杉清次郎方に宿つた。此處は居心地の良い家であつた。飯豊山上に神職が登り休憩所の出来るのは八月に入つてからのことで、それ迄は何の設備も無いから、山上に泊るには野營の用意が必要である(御前坂と頂上小屋とは雨露を凌ぐに足りるが、人は登つて居らぬ)。其頃の登山者は本村か又は川入村から、日歸りする。本村

からするには可也の時間と健脚とを必要とする。自分は天幕を用意して來たので山上で野營することに定め、第一日は天候の都合で地藏山頂に一泊、第二日は頂上に登つて引き返し切合に一泊、第三日下山して都合三日を費した。生憎村の祭禮で人夫が、それ以上の滞在を肯かなかつた爲に、主要の目的であつた大日岳登山を中止するの止む無きに至つたのは今以て残念である。然し三日間自分等一行で、此靈山を獨占したかの觀のあつたのは、空恐しい有難さを感じた。山上に休茶店や宿泊所の出来る頃になれば大日岳の往復も容易に行ひ得るであらうと思はれた。一ノ木村で雇つた案内も人夫も皆利口そうな若い衆で、粗朴の質を缺いて居たのは感心出来なかつた。(辻本)

### ○立山と劍岳に就て

端書

是等の名山に就ては諸先輩から度々有益な報文を示されがあるので、今更卑見を陳ぶる必用がない様に思ひます、が去大正八年七月末日私が大町を

發し、籠川より針ノ木岳、針ノ木谷、五色原、雄山、別山、劔岳等を踏破した時の所觀と以前發表されてある者とは、聊相違してゐる點が有のて左に之を述べ、尙其他一二の事項を附加へて、識者の教を乞ふことゝ致します。

## 一、境域

凡てものゝ境界を査定することは一寸容易いやうであるが精確を期することは至難である。殊に人跡未踏の山壑等を取り扱ふ場合は最も困難のことである、而も夫は吾人相互間に於て日常起る事件とは交渉至つて少なく且興味も乏しい爲に從來此方面は些閑却せられてゐた様である。併し地人の關係を明説したり個々山壑の情況を比較調査する等は全く無意義のことではないと思ふから、次に盲蛇的に私の臆測を記して見やう。

先づ兩山を概括して云へば、東方は孰も黒部川に限られてゐることは申す迄もない。南は奥廊下澤及び數河谷に距り、北は小黒部谷より其支谷なる折尾谷、ブナグラ谷、早月川に接し、西は眞川から常願寺川に境してゐる。其廣袤は凡五里の間に

互つてゐる。而して兩山の交界點は立山川及び劔澤と見做して差支ないやうである。(五萬分の一地圖立山及び黒部圖幅參照。)

## 二、群峰及び溪谷の位置名稱

古來立山を廻らす支峰は七十二峯と稱せられ、溪谷も亦極めて多い。次には唯其主要なるものゝみを掲ぐ。連峰中の最南に位する峰頭は二、五九一米で地形圖には名稱を缺いてゐる。本誌六年一號五〇頁には、越中澤岳(新稱)としてある。之は附近の澤の名を採られたさうだ。新稱の爲かどうも感じが悪い、澤名を附するならば餘分に名の知られてゐる温谷か數河谷を採るべきではあるまいか、夫よりも寧ろ木挽山とする方が一層よいと思ふ。此北方には鳶山、鷲岳等があつ。五色ヶ原の西端を擁し西北の立山温泉を瞰んでゐる。五色ヶ原は高距二、五〇〇米突内外、展望可良高山植物に富み、晴々した氣持のよい所である。七八月の交ミヤマキンボーゲ、白山一華、南京小櫻等の盛花期には、いつ迄も滞在してゐたいような氣がする。五色ヶ原の東北ザラ越を距つて鬼ヶ岳(二七〇〇

米突?)龍王岳(二、七四〇米突?)淨土山(二、八七二米突)の三峰が相駢んで崛起してゐる。本誌五年三號附録日本アルプス略圖及び同六年一號五〇頁には、共に此淨土山を龍王岳と稱してゐる、是は謬ではあるまいか。淨土山の東北には、一ノ越の鞍部を控えて立山の主峰雄山、大汝山、富士の折立の三峰が何れも三、〇〇〇米突を突破して競ひ立つてゐる。雄山は元來巖岩が群り立ち中々奇趣に富んでゐるも、年々賽する(縣社雄山神社)三四千の俗客の爲に可惜古風は全く破壊せられてゐた。立山圖幅には大汝峰を富士の折立の位置に誤記してあるが之は兩峰の中間に置くべきである。山頂には片麻岩の破片が散亂して居つて奇趣には乏しいが、立山群峰中の最秀點(高距は別に説く)で雄山神社五十年目毎の社殿改築の折の假殿に充てらるゝ由である。富士の折立の北は遽かに低下して眞砂岳となり、其から一つは東北に分れ黒部川の岸に於て黒部別山を起し、又一つは直ちに北方に延びて別山に連なつてゐる。別山からも亦北方鶴ヶ御前を経て劔岳に連なるものと、西方に轉

じて大日山塊と握手するものとある。劔岳の北は三の窓の頭(二、八五〇米)仙人山(二、六一七米)大窓の頭(二、五〇〇米)白元山(二、三八七米)赤元山(二、三四〇米)白萩山(二、三四〇米)赤谷山等となり、ブナ倉谷及び折尾谷を境として猫又岳に連なつてゐる。仙人山の北大窓の頭からは、又東方に分岐して池の平山を起し、再び分岐してU字形に仙人谷を包み、遂に黒部川に至りて盡きてゐる尾根がある。本誌十年二號の附圖には此山を仙人山としてある。仙人谷奥の仙人山、池の平間近かの池平山、之は兩方に縁故があるから、どちらにしても差支ないと思ふ。但し是等の場合には劔岳北方の一角名なる仙人山を削りて小窓の頭とすべきである。赤谷劔間の各峰名は本誌十年二號附圖によつた。

本誌十年二號の附録中にある茨木氏の描かれた『後立山々脈新越乗越より劔岳及び立山の一部を望む』中には、大部疑はしい點がある。同氏の寫描された所に行つて見もしないで、かようなことを云ふのは、早計かもしれぬ、が私が鶴ヶ御前に

て東南望した時の觀と立山圖幅とを校照して見ると、鶴ヶ御前と寫描地との間には、兩點よりも約百米若しくは四百米以上も高さ別山の稍長き山頂が西南より東北に連りて聳え立つてゐるから鶴ヶ御前は見えない筈だと思ふ。故に畫の中に鶴ヶ御前と記されたのは別山、別山と記されてゐるのは眞砂岳であらう。從て劔澤は別山陰、即ち向つて右方に、眞砂澤は此兩山の間を東北に流下するやう指示すべきではあるまいか。其當時はもう立山圖幅が發行せられてゐた筈である、が同氏はまだ夫を手にしてゐなかつたらしい、多分他の臆測圖か何かから導かれた謬りではなからうかと思ふ。さうして、迄記しては見たが、畫と云ふものは地形圖と異り一方に詳しい代りに他の半面は全く不明であるから斷言しかねる點もある。且くこゝに記して切に同氏の高教を願ひ度い次第である。

立山圖幅には、木挽山の北方を流るゝ澤をヌイク谷と記してある、之は溫谷ヌイクタニの誤記であらう、山岳六年一號三五頁には、此澤を越中澤としてある。之は信州方面の獵師等が近頃附た名らしい、いか

にも越中から發源するには違ひない、がどうもよく調和しないやうだ、さりとて溫谷の由來も訊きもらしたから之についても確かなことは申上げられない。唯最關係多き其土地の人が慣用する名稱を尊重して越中澤よりも溫谷と稱した方が良くはあるまいかと思ふ。序に一言しておきます。本誌六年一號五〇頁には此澤の別名をかりて山名としてあるやうだ、澤の名はたとへ別名を越中澤とすればとて、新稱の場合に迄も古くから知られてゐたらしい正名をとらないで比較的新しい別名を其附近の山名として呼ぶことには賛成しがたい。夫から次は立山圖幅に限らず、一般に雄山及び淨土山の間から南東に流るゝ澤を御山谷と記してある、之は字訓が同じき爲雄を御と誤つたのであらう。どうも感服出來ぬ宛字である。假名でかくならば格別文句を云ふ餘地はない、が漢字を宛るならば源泉が雄山方面であるから、雄山谷若しくは雄山澤とした方が所態と調和して面白ひやうに思ふ。

ブナグラ谷。立山圖幅には此谷を赤谷山の西方

に記し、本誌十年二號附録圖には赤谷山の東北にある如く記してある。私は此方面の知識に乏しいから何とも斷言は出来ぬ、たゞ附録圖は陸地測量部の地形圖を土臺にして訂正して記されたのとことであるから此方が正しいと思ふ。併し其伊折方面の登路の説明には、ブナグラと云ふ文字を幾個か用ゐてある、之が最も疑ひを起すもととなるのである。どうか該圖の訂正増補をなるべく速かに公表を願ひたい。

### 三、高 距

立山の高距は、以前は農商務省で測定した二、九三六米突 $\parallel$ 九、六八九尺が多く用ゐられてゐた。つゝ近來迄北陸線滑川停車場の名所案内にも掲げてあつた様に思ふ。從來最精測の聞き高き陸地測量部でも都合上絶頂の高さは發表しなかつた。たゞ絶頂に近い五ノ越の一等三角點は、二、九九二米突 $\parallel$ 九八七三・六尺あると云ふことを數年前に發表した。其當時は夫が絶頂の高さであると誤解せられたこともあり、或は夫よりも二、三米突乃至四・五米突若しくは二、三十米突位は高い等と

云ふことも耳にした。こんな風で此天下の名山も容易に其真相が判明しなかつた。私は甚だ夫を遺憾に思ひ、大正六年八月に一回或人に其調査を托し、同八年八月に二回自分で調査した、都合三回に亘り空盒晴雨計にて測つた結果によれば、雄山絶頂と五ノ越の三角點との差は、凡そ十五米突あると云ふことを確かめた。適立山村の調査(其方法は訊き洩らした、が五ノ越と雄山絶頂との間は距離も近くて見透しもよく通過も容易であるから、相當の器械と適當の注意を拂つてやつたならば比較的確かなものが得られようと思ふ。但し一米突を三尺三寸三分として改算(詳細は追て説く)する位であるから其他のことは推して知るべしである)と疑へば疑ふ餘地はあるが且く信賴してさくでは兩地の高低差は四十五尺二寸即ち十三米突七であること云ふことを聞いた。之は私の概測と大差がないから、今後より以上精確に測定せらるゝ迄は、五ノ越の高さに之を加へた三、〇〇五・七米突 $\parallel$ 九、九一八・八尺を以て雄山絶頂の高さとして置きます。併し色々の方面から觀測した結果によれ

ば、大汝峯は是よりもまだ五米突餘り高いようであるから、立山の最秀點は大汝峯であつて先づ三、〇一〇米突を下ることはあるまいと思ふ。雄山、大汝、富士ノ折立の三峯中では、富士ノ折立が最も低い、が之も三、〇〇〇米突を下るまい。故に立山圖幅に示してある如くに絶頂を二、九八〇米突の同高線で止めておくのは穩かでない、詳しく言へば三、〇〇〇米突の同高線の個所を三つ設くべきである。

劔岳の標高は二、九九八米突となつてゐる、此も測點は些か低い所にある、此西方に少々高い地點があるから紀念塔と相まちて三、〇〇〇米突として取扱ふも差支ないと思ふ。

雄山神社々務所で五ノ越の石窟前に榜示してゐる所によれば、雄山を一〇、〇〇八尺、五ノ越の三角點を九九六三尺、淨土山を九、五六三尺、別山を九、五九〇尺、劔岳を九、九八三尺、白馬岳を一〇、〇〇〇尺としてあつた。何れも陸地測量部で發表したものよりは約一百尺も高い。確かに之は誇大主義の廣告と思つてあまり注意も拂はんで居つ

た所、適或人から夫が最近の調査であると云ふことを聞き、急に十露盤を取つて見たが、どうしても謎は解けなかつた。其後再三書面で社務所と交渉を重ねた結果、一メートルは三尺三寸三分として計算したことが判明し、現代でもそんな風に勘定する村勢調査員もあるであらうかと恐縮するの他はなかつた。此改算法は割増を掩ふための申譯とも考えられるが、交渉の内容によれば強ちそうでもないらしかつた。

高距三、〇一〇米突を有する立山は殆赤石山脈の聖岳と同高で劔岳は其次位を冒してゐる。猶是等は同系統の飛驒山脈の秀峯中どの邊に位すべきか、高さの順序によりて記して見ると次の通りである。

山 名	標高(米)	山 名	標高(米)
槍ヶ岳	三一八〇	黒岳	二九九〇?
穂高岳	三一六〇?	白馬山	二九三三
御岳	三〇六三	藥師岳	二九二六
乗鞍岳	三〇二六	五郎岳	二九二四
立山	三〇一〇	鷲羽岳	二九二四
劔岳	三〇〇〇	大天井岳	二九二二

以上は略二、九〇〇米突以上のものを掲げた。穂高岳と黒岳とは絶頂に測點がないから正確なる高度は知ることが出来ない、が他日精測せらるゝとも其差は十米突を超ゆるようなことはめつたにあるまい、従つて番狂はせを生ずることは斷じてないと思ふ。

四、附 録

劔岳は信飛界の穂高岳に似てゐると云ふことは先輩から折々聞いた通りであるが、私はもう少し廣く立山及び劔岳を穂高及槍ヶ岳に比べ其相似たる所異なる點の主なる者を掲げて見ようと思ふ。劔岳から立山の雄山に至る山稜は、穂高岳から槍ヶ岳（主峯を除く）に至る山稜に、其起伏の有様や險否の程度及び配列等がよく似てゐる所がある。槍、穂高は石英斑岩、劔、立山（雄山以北の山稜附近）は花崗片麻岩で之も稍相似の所がある。擴座の大小では槍、穂高は立山、劔岳には及ばない、が高距は之に反してゐる。立山には彌陀ヶ原五色ヶ原等の高原があり、又火山でまだ餘煙をもつてゐるも槍、穂高にはない。夏期に於ける雪

溪の壯觀も槍、穂高は南に偏する丈あつて立山、劔岳には遠く及ばない。此點は針ノ木岳や白馬岳も猶及ばないようである。

立山の南峯鷲岳より劔岳に至る山稜間に於て東面すれば、後立山々脈の連峯が波濤のように駢立するを明瞭に望むことが出来る。私は是等の峯頭の起伏してゐる有様によつて大體次のように區別して見た。先づ北方の雄鎮である白馬山（朝日岳、清水岳、小蓮華等の群峯をも含む）、曾て本山につきては志村氏が本誌一年第二號七四頁で白馬山は即ち大蓮華山であると斷定せられた。其後あまり異説を稱するものあるを聞かなかつた、が近頃一説に白馬山は越後方面にては「ヤリ」と稱し大蓮華山と云ふのは其東方にある別峯なる由を聞いた。頗奇怪な説であること、其出所が確であることにより、話は少々横道にそれるが此に記した次第である。猶筆序にもう少し附加へて見たい。此説は甚簡單なるも、是等の二峯を獨立的に取扱ふや否やにつき大に其趣が違ふ。残念乍ら其立場は一寸訊き洩らした。小蓮華山や鉢ヶ岳等の間

には之に擬すべき程の傑物はないようだ、がこゝでは獨立すべきものがあると假定しておく。借五萬分の一地形圖白馬岳圖幅によれば、白馬岳の東方には一峯として認むべきものがなく、其東北に小蓮華山と云ふのがある。新説者は多分之を大蓮華山と云ひ、地形圖の白馬岳を槍ヶ岳としてゐるのではあるまいか、山によつては見る方面によつて其形態が非常に異なる場合が多い。従つて複雑した山塊であると地方々々によりて名稱を異にする場合が往々ある。白馬群山もあまり簡單な方ではないから、前項のような異同説が持ちあがつたのも蓋し止むを得ぬ事であらう。現に白馬岳は東面即ち信州側から見ればあまり尖つてもゐない。其南方の劔ヶ岳は正に其名の通りである。然るに之を立山方面から望むと事實は全く相反して見える。又東面からは富士形に見える杓子岳は白馬岳の絶頂からは餘程尖つて見えるも劔ヶ岳の方は却て鈍く見える。かやうなわけで南に望む白馬岳は尖つて見えるから越後方面では『ヤリ』と云つてゐるかもしれない。是等は右の異同説を左右すべき程

の有力の材料ではないが今後此方面の調査をさるゝ方の參考にもならうかと思ふて少々卑見を述べた譯である。

白馬山に次で劔ヶ岳(不蹄岳中背山等も含む)、唐松岳(附屬諸峰名は略す以下同斷)、割菱岳、鹿島槍ヶ岳、祖父岳、岩小屋澤岳、赤澤岳、針ノ木岳、蓮華岳、七倉岳、烏帽子岳、三ツ岳、五郎岳、黒岳、赤牛岳、鷲羽岳、三又岳(一名蓮華岳)等である。實際は地形地質を親しく踏査し猶東面からもよく觀察した上に決定すべきことは申す迄もないのである。

ゴライカウ。高山の頂に立ちて東天上に初めてさら／＼した旭日の光を揖した時の現象を私は今迄御來光であると思ふて居た。現に繪畫にも文章にも往々そう云ふ風なことがかいてある。一般の人々も亦そふ云ふ風に考へてゐるものが多いようだ。大井信勝氏著、立山案内一一一頁絶頂の日出、中に「……驚破! 藍鼠の雲の上端、左より躍り出たる煤雲の穂先を熔かして、數本の金線、矢の如く迸しつた。空には無數のちぎれ雲、俄か

に金翅を伸して亂れ飛ぶ、山と云ふ山、谿と云ふ谿を、包んだ霧は、一時に騒ぎかへりて、劍山の彼方へと逃落ちて行く。忽焉、車輪のごとくぐる／＼廻り乍ら雲を放るゝ爛々たる朝暈。さア／＼御來迎様、拜みなされ／＼」殊勝らしく立すくんで合掌する熊先生の痘痕の面に金光が漲つて見えた。之は勿論日出を御來迎と云つたのである。然るに大正八年八月二日午前八時立山に於て御來迎を實見した友人は「立山で云ふ眞の御來迎は日出を云ふのではない」と前提し、「……程近きあたり雪田を控へたる室堂の夜はなか／＼に冷涼で里路では邪魔扱ひにされた布子が却て懐かしかつた。蚤に襲はれるやら御來光が氣になつて三時頃雜魚寢の夢は破られた。朝食もそこ／＼に出發の準備も嚴めしく一行數十名開の中に影を没し先導の持つ孤燈を目あてにひたすら登つて行く。淨土山を過ぎ一ノ越より雄山の急坂を辿る時分に東の空がかすかにあかるくなり、一行の黒い影が見え初めた。滴濃霧に罩められて咫尺も辨からぬやうになつた。やがて頂上を極め雄山神社に參拜し

終つた頃東方の霧がはれて少時旭光を浴びる事ができた。霧も早速散りさうもないため、一行天氣を氣支つて急ぎ室堂に逃げ下つた。残るもの某中學生を加へて僅かに二三人、雄大なる展望に預からんとて、五ノ越の石窟の前に息ひて晴るゝのを俟つてゐた。やがて霧が殆ど消散しきつた頃、西下の雪田上に又復一團の霧が立ち昇るよと見えしが、忽ち眼下（山腹より水平距離約一丁、高距一ノ越位な所）に直徑凡そ九尺位の朦朧とした環虹立露れ、五彩次第に明瞭となり中には吾等三人の影が寫つてゐた。あまりの奇異なる有様に驚喜して、金剛杖を振り手拭を搔がし帽を上下して試みに、環虹も亦之に應へた。かゝると凡そ二十分間、怪しの霧影全く消え失せ、雪田の彼方に立つ室堂の孤影、地獄谷の噴煙を俯瞰するのみなりき「……」と听された。之は前に記した大井氏の御來迎とは其現象が甚異つて居る。前者は雄山頂上にて迎へた期暈其物を指し、後者は五ノ越に於て日光を背にし而も大に異なりたる形態が露れし現象を云ふたのである。又大井氏は立山の御來迎

と題し『立山案内』一四頁に於て『淨土山より日出を望むに際し、(記者云、日出の下に、の後西方、の四字を加ふる方可ならん、氣層の溫度及び濕度の不同より、光線屈折の作用を起し、頗る奇觀を呈する事あり、これを立山の御來迎といふ。古來登山者中、善人あらば小(記者云、小は雄の誤ならん)山大明神の告によつて、淨土山に至り、一光三尊の如來、二十五の菩薩を拜むと云傳へ、野崎雅明の立山記に、「少頃陰霧遮已失望、霧中又忽焉生、如車輪者、圓徑八尺許、輪邊五色而如虹中有物髣髴是山中謂三尊來迎者也」と記せるが則ち之なり、然れども、近來は絶えてこの御來迎に接したるものなしと云ふ。』と之は、前に記した同氏の紀行文とは異ふも、友人某の話とは自像と佛像との差あるのみで其他は殆ど同一である。之は物理學の立場から見れば友人某の見方が勿論正しいのである。が心理學上から考ふれば佛像が現はれたと云ふことも強ち否認すべき事ではないであらう。是等は何れも日光の働きによる事は前に述べた通りである、但し一方は日出其者を指し、他は日

光と其他の物質力とが共働した時に起る現象であつて全く異なつたものである。従つて名稱や宛字が違つたものが用ゐられてあらうかと思ひ、色々探聞して見たが置しい私には適當な文學が見當らなかつた。たゞ國語字典や言海に『らいかう』『來迎』なりとして『佛菩薩の靈の現はれて來り迎ふること』若しくは『佛菩薩の現はれ來りて極樂へ迎ひ行くこと』とある。此辭書の云ふ來迎は立山々頂て見た二つの現象とは全く違ひ、信仰の力によりて心靈上に或幻影を認めたものであらう。たゞ佛像(但し野崎氏が見た夫は錯覺であつて實際は自分の像である事は前に述べてある)が現はれたと云ふ相似た點があるから、佛語の來迎を借りて山頂に於ける虹のやうな現象に附して呼んだものであらう。しかし山頂の日出をも此名稱で呼ぶのは一寸考ふべきことである。そこで旭光を御來光とし、環虹を御來虹として區別して見た、がどちらも意味が淺薄で莊重を缺くならひがある、丁度、摩訶般若……を、大智多勝……と譯したと同じやうに、改め榮えがなく、却て莊嚴味を損じ

て感服しがたいことになるから、他に良詞の見當る迄自分の間元の儘共通に御來迎と呼んでをくことにした。(鶴殿)

○高山蘚類雜記

序言 私が一般蘚類研究に趣を覺え手を染めてから可なりの年數を經過しました、が高山蘚に就ては見聞の寡いのと材料の薄弱な爲に相當の結果を得るのに困難して居ます、今後は是非とも各地の篤志各位の助力を仰いて『高山研究』の一助に供したいと存じます、大方の助力と叱正を希望致します。

たかねⅡくろごけ(黒蘚類……くろごけ科)

高山蘚の代表者で且つ最も知られて居る種類です、既に武田博士や岡村(周)博士に依つて委曲が盡されて居るから略しますが、兎も角も本州、四國及び九州の五六千尺以上の山岳には普通らしいです、樺太、北海道、臺灣、朝鮮等には未だ産する事を聞かぬが、多分近き將來に確報を得る事と楽しみに待つて居ます。

くろべⅡじんじごけ(新種)眞蘚類……まごけ科)  
黒部の奥の輝水鉛發掘場附近の岩石に着生して居たので、最近 Dr. V. F. Brothems に依りて所命された新種です、外形は褐色毛狀の密なる芝生狀をなし多少光澤がある、極めて繊細で僅か二「セ、メ」に達する位です、詳細は左の原文で讀んじ下せよ。

*Michelichoforia* (*Emmichelichoforia*) *Susokne* Broth.  
n. sp.

*Dioica*; *graciliscens*, *caespitosa*, *caespitibus densis*, *fusca-tomentosis*, *Inteseenti-viridibus*, *nitidiusculis*. *Caulis erectus*, *usque ad 2cm altus*, *dense foliosus*, *simplex vel ramosus*, *ramis fastigiatis*. *Folia siccā imbricata*, *humida erecto-patentia carinataconcava*, *inferiora minuta*, *superiora raptim multo majora*, *lanceolata. acuta*, *usque ad 2 mm longa et usque ad 0.3mm lata*, *marginebus erectis*, *superna serratis*; *nervo firmo*, *continuo vel subcontinuo*; *cellulis anguste linearibus*, *basilibus breviter rectangularibus*. *Caetera ignota.*

(Övers. av Finsk. Vetensk.-Societ. Förhändl.  
Bd. LXII. 1919-1920. Avd. A. N. 9. p. 15.)

うちは「ちようじごけ」(眞藪類……ちようじごけ科)

元來は平地産であるが信濃御嶽王瀧口八合目地上で採集されたのは誠に珍しくある、播磨小野中學の松島克生氏に依つて、大正六年七月三十一日の採集である。本種は地上若くは朽木上に生じ多くは松柏科植物の根元に多いさうである、(不幸にして私は採集した事が無い)葉は極めて細小で一見して見當らず(勿論毛状に見えるが)子囊のみが明瞭である、子囊の大きさは小豆大で多くは傾斜して丁度マドロスバイブ若くは煙管の様に見える。廣卵形で先端が喙状をなし濃褐色である。本種は外國でも稀品で斯類研究者の欲しがる種類である岡村博士の説に依れば日本では中部以南よりも、むしろ以北に産する事であらうとの事である、尙ほ詳細は植物學雜誌第二百七十一號(二十三卷)及び第二百八十八號(二十五卷)に就て知られたい。

採集法及び保存法 取り立て、書く程もなく單

に採つて陰干しにすれば結構です、唯々採る時に他の種類の混入せない事と可成多量を探る事に注意が必要で、採つたなれば新聞紙等の細かく切つた紙片に包み、他のものと混ぜない様にすればよいのです。保存法としても面倒な事が入らなく、巻煙草の空箱とか菓子箱等に併列して置き樟腦かナフタリンを入れるとか産地、場所、採集年月日等を記入せる紙片を挟むて置く等は顯花植物同様です、で採集法は簡便ですが研究となると體の小さいだけ所置も面倒です、これ等に就ては追次に書く事に致します、尙ほ採集や其他の件に就て必要があれば御通知下さい私の知る限りは申上げまじやう。(笹岡久彦)

### ○山岳林の趣味的方面

山岳旅行者の趣味を豊富ならしむる爲に森林書に現はれた處々から専門を離れた一般趣味上から見ても興趣の湧くと思はれる節々を摘出して見るのも萬更山岳會員としての無意味の事でもあるまい。

先づ森林帶の事である。森林は勿論一般植物はその最も適する氣候の所に初めて完全なる生長繁殖をなすものなれば、北半球としては南より北へ距るに従ひ、若しくは海岸より山の高さに登るに従ひ寒暖の差に應じ、自然其地に生ずる樹木の種類を異にし、且其形成する森林の狀況に各々特徴がある。而して其樹種及び林相變移の狀態は普通帶狀に現はるゝから、之を森林帶とか森林植物帶と名けて居る。此森林帶の生ずる原因は主として氣候にあれど土性並に樹種の特性に關すること少くない。日本の森林帶としては學界に於ても實際に於ても熱帶、暖帶(亞熱帶)、溫帶、寒帶の四帶に區分せられ、此寒帶林の北部又は上部は偃松帶とでも言ふべき所なれど、林學上の價值少く且つ群狀を爲して此處彼處に生じ帶狀を爲すもの極めて稀なれば森林帶の内に加へて居ない。然し山岳の趣味より言ふ時は此寒帶林の上部に位する偃松帶こそ見逃がすべからざる處で、此偃松帶は即ち高山植物帶で、森林帶としては林木生育限外地と見做されてあるが、登山趣味の甚だ豊富な處であ

る。其高山植物帶の上部は地衣帶となつて居る。

右各帶の實際上の區分は水平的には沖繩本島の中央以南の日本領土は全部即八重山列島、臺灣、澎湖島及其附屬列島並に小笠原群島は熱帶林一名榕樹帶である。琉球本島中央以北、四國九州の全部本州及朝鮮の南端は暖帶林(亞熱帶)一名櫛帶である。暖帶以北の本州全部北海道過半の西南部及朝鮮の大部は溫帶林一名櫛帶である。北海道の北東部及樺太千島の全部は寒帶林一名白檜根松帶と言ふ。

斯様に水平的には、日本全國を股に掛けて飛んでゝも歩かないと其各帶に接することは出来ないが、幸ひ高山なるものあり、之を垂直に短縮し水平的に遠い處を飛んで歩かなくとも垂直的に僅かの距離を上下すれば、寒帶林は愚か其も一つ先きの方の偃松帶(高山植物帶)地衣帶までも達し得る至極調法なものがある。(偃松帶は森林帶の中に加えてない。)

然しながら臺灣の新高山の如きは森林植物帶の各帶を有するが日本内地になれば熱帶林を缺き、中央日本即ち日本アルプス地方は平地より溫帶林

て熱帯林は勿論暖帯林迄も其影を没して居る。中央日本では平地より其影を没してゐる暖帯林は臺灣では平均六千尺、九州では平均二千八百尺、四國では二千五百尺、關西では二千尺の處まで其存在を認められる、今山岳好愛旅行者の中心になつて居る日本アルプス地方を以てすれば、山麓も温帯林であり其代表的林木は樺で、六千尺位迄本帯である。其れより上部九千尺迄は寒帯林で九千尺以上になれば森林帯の範圍を超越し高山植物帯となり、強ひて林木の名前を以て帯名とせば假松帯とでも言ふべき處であらうか。日本アルプス地方では九千尺以上の山岳が幾らもあるから人間直接經濟に關係する森林帯などを超越した高山植物帯を冠してゐる山が澤山ある。山に登りても寒帯林以上の所に登らぬと眞に「山岳」と云ふ感じがしない。

日本アルプス地方の山岳に登るとすれば山麓から六千尺までは温帯林で特徴樹としては樺、定在樹種としては、杉、扁柏、花柏、羅漢柏、ねずこ、高野槇、いらもみ、ばらもみ、かつら、とち、しほぢ、其他一時若しくは一局部の林相として多類

の落葉闊葉樹で、暖帯林に於けるが如き常綠闊葉樹は餘りない。

六千尺から九千尺の寒帯林になれば白檜、とまつ、えぞまつ、あをもりととまつ等如何にも高山らしい香氣と印象とを與ふる濃紫色の球果と、バリ／＼と強はい針葉の如何にも寒氣に打勝て來た様な男性的の氣分を與ふる針葉樹があり、かんにしやくなげ等奥山深山らしい闊葉樹がクッキリと元氣よく生へてゐる。九千尺以上になると樹木草本の種類が減つて來て、樹木としては假松位のもので、其他は高山植物の草本と木質のもので、草と間違へられる様な小さなものである。

此高山植物即ち假松帯は本州、北海道、千島、樺太等にあるだけで、四國、九州、臺灣では、これに達する高山はない、寒帯林と假松帯との境界は中央日本に於て九千尺にして臺灣中央に於ける想像高は一萬五千尺なるべきも臺灣最高の新高山でも一萬三千餘尺しかないから寒帯林の一部に止まり假松帯には届いて居らぬ。九州には此の寒帯林にすら達して居るのはない、四國の劍山石槌山

等に僅かに寒帯林を認むるも其上部に達してゐない。若し四國に一萬尺以上の高山があつたら此寒帯林の終はり即ち森林帯の最上部界に達するであらうにそれがない。中央日本の日本アルプス地方であれば九千尺以上の山あり林木生育限外地即ち寒帯林の終りに達し、北海道では三千五百尺以上が此限外地になつて居る。

此處に混同し易きものは地理學上の熱帯と森林帯の熱帯である。臺灣の南半部は地理學上の熱帯で、其北半部、琉球本島の南半、八重山列島小笠原群島、臺灣諸屬島等は地理學上の亞熱帯であるが、此兩者共森林帯の方では熱帯と言ふてゐる。

以上は日本アルプス地方に於ける垂直的森林帯の概要である。

高山温度森林限界觀察點 同緯度の地に於ける高山温度森林限界は其方位及傾斜と大なる關係を有する。即ち其限界は南側にありては寒冷なる北側よりも常に高く、且つ又東側及西側よりも高い、南側は北側よりも約三百米突出高いと言はれて居る。傾斜四十五度以上の地にては約五百米の差あ

り、北緯四十八度以上の處、日本で云へば、千島列島の中央の邊、日本領樺太の中央位の所では傾斜六十度を示せば最早其北側は多く日光を受くること出来ないさうである。即ち緯度と傾斜と方位との關係で太陽の溫熱を受くる關係に差異を生ずるから森林温度限界に差を生じ、其限界に高低を生ずる。アルプス山あたりの研究に據れば群山重疊せる地方は孤立せる山岳よりも森林温度限界は高處まで進むものと云ふ。これは孤立せるものより重疊せる者は溫熱を保持し易いからである。彼の富士山の如く平野に轟然孤立せる山は群山重疊の形にあるものより森林限界が比較的下部に下つて居る。

濕地特に停滯せる水濕は植物生長季間に空氣を寒冷ならしめ森林限界に影響して其限界を下げるものである。水濕地は其周圍の小高さ乾燥地に森林を存するにも拘らず既に高山植物を生じ森林限界に達することがあるから寒帯林とか楡帯林上部、唐檜樺帶等に生ずる霜穴は、往々高山の灌木林(寒帶闊葉樹林)に見るが如き寒冷なる氣候を呈

するものである。即ち氣候寒冷なる高山の沼澤地に森林の生ぜざるは、水分過剰の結果にのみ歸することは出来ない、寒冷に過ぐるが爲に樹木が生へないことがある。

高山地方の温度の變化 海面より高さに登るに従ひ夏季温度の下降する割合は冬季温度の下降するに比し更に著しく無風靜穩の夜には豁谷に最も低き温度を示し（露營者の最も注意すべき點）平原及高原は其位置の高き程反て温暖である。夏季は強烈なる日光の爲に地上の空氣甚しく熱せられ上昇するに従ひ冷涼となるから空氣の流動する場合には山の温度は高原及平地の温度よりも低い。豁谷及平原は日中最も高き温度を有するが故に植物生長開始期は山岳地に於けるよりも早く且つ其終期も長いが、時として早春及び秋季の靜穩なる夜間には反て最低温度を示し零度以下に下降することがある。

濕地にして其地が盆地又は陥没地なるときは、氣中及地中温度を著しく寒冷ならしめ、之より寒き次帯の氣候を現はし柵帯即ち溫帯に寒帯の白檜

を混じ、寒帯の中に極地植物並に高山植物の生ずることあるのは此理に基くものである。

方位と森林帶 高山温度森林限界でも少しく述べた如く山の南側南西側南々西側及西側は之に反する方位の地よりも多く乾燥する。山腹傾斜の急峻なる程方位による温度の差が劇烈である。或る森林帶の南部地方に於ては其次に來るべき溫暖なる森林帶を局部的に現出することがある、例へば柵帯の南面に於ては山の南腹既に櫛帶となり、白檜帶の南面に於ては山の南腹既に櫛帶を有することがある。故に山の南側に於ては各樹種其他の側の平均高よりも上部に至り、之に反して北面に於ては山腹の急峻なる程寒冷の度強きために更に寒冷なる帶の氣候を現はし、柵帯の北側は既に白檜帶をなし又白檜帶の北側は既に偃松帶即ち高山植物を生じ、森林限界を現はせることが往々ある。登山の際此等天然法則の結果新樹種に出會ふ事山の北側に於て最も早く南側に於て最も遅い。山岳森林帶が其山の南北方面の異なるに隨ひ變動する度は六百尺乃至千六百尺で、即ち山の北

腹で既に三千三百尺の高さの處で消滅せる樹種も其南腹に於ては三千九百尺乃至四千九百尺の高さ迄現はるゝこともある。同高の北側は匍匐狀の偃松其の他の叢林をなせるのに南側には猶榲桲の喬木の終りを見るが如きこともある。

樹木の匍匐 高山の森林限界を突破せる所謂高山植物帯になると樹木があつても偃松の如き匍匐狀をなせるは積雪又は雪類の爲でない。雪に弱き樹種が孤立して居る場合は其害を受くるも天然に繁茂せる森林に在りては雪のために匍匐狀になるが如き事なく氣候の關係である。秋田新潟兩縣下に頗る多量の雪を降らし其高さ毎年五六尺から丈餘に及ぶことあるは余の生國だけに屢々實見した事である。此等の地方は本邦中最も多く森林を有し且つ良材を産出してゐるが雪は却つて伐木運材を助くることはあつても樹木の生長を縮小ならしむる事はない。匍匐せる樹木の生ずることは積雪と何等關係のない事を思はねばならぬ。

森林中の裸峰 登山の際其地方の緯度から言ふても未だ森林限界温度の地點に達して居らぬのに

裸峰の存在することあり、又附近一帯が森林を缺き森林温度限界に達して居るかと思はるゝ處でも其實未だ左程の海面高に登つて居らぬ事がある。これらは野火濫伐のため止むなく笹類に占領せられた處もあるが、尙雨量の缺乏に原因する事もあり平原を控えて巔然頭角を現はすか、孤立せる山岳であると同強風のために即ち風當りが強いために温度としては未だ森林限界に達して居らぬのに、全く森林を缺き童峰になつて居る所がある。それらは野火のためでもなければ、森林限界温度のためでもない全く強風の爲である。

序に森林限界温度とは植物の重なる生長時の全部又は其一部である四箇月間即ち北半球では五六七八の四箇月間に於ける平均温度を言ひ、之を植物生長温度又は四箇月温度と稱し林木の要求する温度の標準尺度で、マイル氏の研究によれば森林の存在は四箇月温度攝氏十度を以て其下限として居る。此處で云ふ森林の存在とは少くも樹高八米以上に生育する森林を指したるものである。此四箇月温度攝氏十度を森林限界温度 (Waldgrenz-

therme od. Horrotherme)と稱する。換言すれば四箇月温度が攝氏十度以下に降る時は森林は全部灌木に變じ、十度以上なる處に初めて本來の森林を形成する、嚴格に言へば高山に於て此温度森林限界線以上の灌木帯は之を位置により極地植物帯又は高山植物帯と稱する。單に山草とか高山植物とか言ふて居つても造林學上から言へば以上の如き意義を有することになる。登山の際高山温度森林限界線の觀察點に就ては既に述べた通りである。四箇月温度攝氏十度と云ふのは、一寸普通人の吾々に見當が付さにくい。一度から百度の度盛のある攝氏の方が學術上便利であるかも知れないが醫師が病人の體温を計る時の外攝氏は餘り使はない。吾々氣候の温度を言ふ時には大概華氏を用ゆる。攝氏十度と云ふのは普通氣候の暑い寒い時に用ゆる華氏の寒暖計では五十度である。一ヶ年通じての平均温度であれば攝氏十度即ち華氏五十度の所は日本の東北地方などは大抵そうであるが五六七八の四箇月間の平均十度としては我國の海岸及平地に求むることは出来ない。但し高い山岳に

は間々ある。高山は兎も角低地としては我國領土には斯様な處はない。即ち我國内地の森林限界線以上の高山植物帯や地衣帯の處に登れば温度は日本領土の最北端よりも寒いわけである。森林帯の最も寒い北海道本島に於ては一ヶ年平均攝氏五度五分であるが春は三度五分夏は十七度前記四箇月の平均温度は僅かに十度以上である。即ち未だ限界内である。

寒帯林の林相 寒帯林は森林經濟上の價値は少く、造林上餘り重要視されて居ないが、山岳趣味の上からは非常に尊い様に思はれる。蓋し温帯林は林相甚だ幽邃で如何にも深山らしい趣きがあり、關西、中國、四國、九州地方の暖帯林に於けるが如き常緑闊葉樹の種類こそ少なけれ、針葉樹種及落葉闊葉樹等樹種豊富にして、秋田、木曾、吉野等日本の三大美林も此温帯の針葉樹で、經濟上甚だ重量の位置を占むるものである。寒帯林は左程重要な位置を占むるものでない。温帯林は幽邃には相違ないが餘りに人間味を帯びて居る。未だ全く塵界を超越して居ない様に見える、つまり人

間ばなれをしてゐない。然るに寒帯林になると温帯林程に大森林を形成しないがハッキリして如何にも塵の世を離れて別世界の空氣でも吸ふて居る様で、硬はいパリ／＼した針葉と濃い紫色の球葉に白か水色の樹脂の吹き出てゐる處などは高貴の蘆を起させる。日本に於ける此帯は白檜しらび、蝦夷松、青森榎松等の天生せる所で、臺灣の新高山に於ては一萬尺に始まり頂上の一萬三千餘尺に至るも其終りを見ない。九州には此帯を缺く、四國にも殆ど之を缺くが劍山、石槌山等六千五百尺以上の絶頂に此帯を有し、本州の中部としては富士、御嶽、日光其他日本アルプス地方到る處の高山に之を見る。此等の諸山に於ては凡五六千尺に始まり八千尺乃至九千尺に終はること前述の通りで、土地概ね峻嶮、強風烈寒、地味は瘠悪である。唯、烈風の遮斷せられた處に白檜、青森榎松類の森林鬱蒼として繁茂し千山萬岳の一大マンテルの如き觀がある。人跡の全く通じない清淨無垢の眞の原生處女林 (Druid) 即ち純粹天然林は多く此帯に發見せられる。此帯の中央以下には米榎、唐檜、タ

ケモミ、一位いちゐ(あら／＼ぎ)落葉松等を混生し、此落葉松は土地の裸出し易き新火山岩の地方に多く舊火山岩地方に少く、且つ屢々寒帯の高部に互る事がある。此落葉松唐檜の類は其繁生區域本邦中部にありては東は磐城岩代を限り西は飛信の諸州を界し、陸羽地方と越中立山以西南諸州とは絶えて該樹を見ないと云ふことである。

寒帯の闊葉樹としてはダケカバ、ヤシヤブシ、ミヤマナナカマド、シャクナゲ、ミヤマザクラ、ヤナギの一種つゝじ類で、屢々も一つ上の偃松帯に侵入してゐる事がある。

寒帯で林學界に奇狀として認められて居るのは、其地方地方に依りて其主木を異にすることである。即ち臺灣の寒帯林には新高榎松を主林木とし、内地の木曾、富士、日光其他凡そ北緯四十度に至る間の高山に於ける此帯の主林木は白檜で、北緯四十度以北即ち青森の八甲田山に至れば殆ど白檜を缺き青森榎松を以て主林木としてゐる。尙更に津輕海峽を越えて北海道に入れば全く内地若は臺灣の寒帯に存することなき榎松、蝦夷松の類

と爲つて居る。等しく寒帯林の主林木となり得べきものでありながら、中央日本の高山には白檜を主林木とし、南の新高山と北の八甲田山とが一新高榎松一は青森榎松で、新高榎松と青森榎松とに多少の特徴があるにしても同じ榎松仲間て青森榎松の變種と見做されて居る。本州北端附近の八甲田山と日本南端附近の新高山とが榎松類を寒帯林木とする點に於て共通點がある。昔から多少の親類筋であつたかも知れぬ。何か詩的的關係があるらしい。臺灣が日本領土になつたのも、寒帯林主林木の上から見て多少の因縁が結ばれて居つた様に思はれる。津輕海峽を越えて北海道に行けば寒帯主林木を異にし、榎松と云ふ名前が似て居つても新高榎松と青森榎松との關係の如き變種の間柄でない。全く別種のものである。日本國土は樺太山系と崑崙山系との握手に成れる地殻の隆起したもので、元來は地殻に連繼があつたものに相違なからうが、彼の津輕海峽だけは餘程以前から海峽であつたと見えて動物の分布の上に於ても一區劃線をなし日本本州に居る猿が北海道に居らず、

北海道の熊が本州に居らぬ、兎角彼の海峽は餘程以前からのものに相違ない。青森の八甲田山の寒帯林と臺灣新高山の寒帯林とは、其距離が遠くに拘らず其主林木は殆ど同一に近い變種の關係であり、八甲田山と北海道とは一衣帶水直ぐ向ひてあるにも拘らず松杉科 (Pinaceae) の樅屬 (Abies) の中であるとは言へ、アラモリトマツ (A. Muricari, Mast.) トマツ (A. Sieboldiana, Mast.) と全く別種のものになつてゐる。新高山の一萬尺以上も八甲田山の三千尺以上も北海道の東半部も等しく寒帯でありながら遠い／＼新高山と八甲田山とは寒帯主林木に於て極く近頃の分家、新屋と言ひたい株で、直ぐ向ひ同志の北海道と八甲田山とは屬を同うしてゐるとは言へ、全く種を異にし、近頃の新屋とは言へない、餘程縁の遠い者である。丁度支那と日本と一衣帶水の間柄にも拘らず、遠交近攻の外交政策で支那と米國と握手し易く、日支は兎角ソリが合はぬ様に八甲田山と北海道とよりは新高山と八甲田山の方が遠いながら握手して居る。これは寒帯林の奇狀と認められて居るが津

輕海峽と云ふ老媪のなす業でないかと思はれる。

以上は無論余の研究獨創になれるものでない。本多林學博士の造林學書に散見する森林に關する事項中、余が生活の根基となつて居る現在の本業を離れ全くの普通人として考へても山岳を好む上から趣味を感ずると思ふ所々を自分の實見や、本多博士の著書を借りて、獨り言を言つて見ただけで、決して他意のある譯ではない。余と共通の性質を有する人であつたら多少の趣味を感ずるであらう。(山本徳三郎)

### ○恩若峰と源次郎岳

東京から日歸りに行かれる山には中々面白いのがある。其中で茲に紹介する源次郎岳(五萬分の一丹波圖幅)なども中々捨て難い處があるので一寸紙面の餘白を借りる事とした。

昨年大菩薩岳に行つた時にも可成深味のある山だと思ひ、又地圖を見て名前が一風變つて居るので、五月十五日の夜十一時發の汽車に乗つて同行三人と飯田町驛を出發した。車中で何處へ行つて

もいゝと云ふ二人と出遭つてこれも同行することとなり、都合五人となつた。勝沼驛に着いたのは翌十六日の午前四時五分。此頃の四時は既に夜が明けて居るので非常に氣持が好い。驛夫の教へた儘に右手に鐵道のガードを通り進む。所が道が餘り急激に登るので地圖を按じて見ると源次郎岳は遙か左方と思はれるので一寸引返し、右に澤へ一氣に下つた。暫く進んで農家に道を尋ねても、源次郎岳を知らない。止むを得ず其れと思はれる方へ歩いて行く中に、一老農夫に遭つて懇切に道を教はつて、鬢櫛川に沿ふ尾根のなぎを目當に鬢櫛川に出て、之を溯る。鬢櫛川など、名前は好いが、流は貧弱極まるもので幅一間位の澤に過ぎない。

道は次第に登り、リュックサックが重いので熱くて閉口した。然し絶えず後に甲斐、白峰の連山が雪白の肌を見せて壯嚴極まりない。五萬分の一丹波圖幅にある鬢櫛川の鬢の字に當る邊から右に山へ入る柚道と思はれるのがあるが、其所を左へ折れて進む。澤の流は一枚岩のやうな所を走つて居て、一寸見ると水が流れて居ない様に見える所

もある。中々面白い。行手に孤立した山が見えるので、源次郎岳かと思つてどしどし歩いた。地圖に岩石の符號のある邊で二三人の馬士に遭つたので、源次郎岳のことを聞くと一人知つて居る者が居て、もう少し引き返して右の澤を登れば直きに出られる。頂上には弘法大師の硯岩と云ふ大きな一枚岩があり、疊八疊位はある」と教へて呉れた。其の通りにして進むと、道は次第に左へ曲つて行く。少し變だと思ひ乍らも其儘前進を續けた。十一時頃山の脊梁に達する、一寸妙義山の馬の背の様な凄い所がある。右は雲の爲に眺望は皆無だったが、左方は大菩薩方面から鈴庫山方面が見通され、煙るやうな春の空氣に包まれた新緑の色は見事なものであつた。

這ふ様にして三角點へ出た、すると行手に又一つ相當なピークがあるので、變に思つて地圖を見るとどうも今居る所は地圖の七里村恩若峰に當るらしい。十二時なので晝食を済して直に出發した。一寸下りて又登り千米突千二百米突と次第に登つて愈々本物の源次郎岳に到達した。高距一四七六

米突で、恩若峰より五〇〇米突も高いが興味のない山である。此所よりも間違つて登つた恩若峰の方が遙かに面白く、變化に富んだ山だ。後遊の方々は矢張り恩若峰から源次郎岳と登られた方がいゝ。又地圖に據ると恩若峰と源次郎岳との間は約一里位になつて居るけれども、歩いて見たところでは半里以内と思はれた。馬士の所謂弘法大師の硯岩は恩若峰にも源次郎岳にも見當らない、二間四方位のもは二三あるが、八疊敷などは思ひも寄らぬ。

三角點から奥野田、大藤二村の境界の切明に沿ひ、右手に深い谷を見ながら深林の中を行くと、三四十分で砥山方面から來る道に出た、それから嵯峨鹽へ向つて下つた。此邊は道が幾條もあるから一寸迷ふが、結局どれも好い。奇麗な日川の流に沿ふて下ると間もなく鑛泉宿が見える、名は忘れたがこの古びた家に二時間休んだ。何が氣に入つたか一人は此宿へ残ることになつて、四人は午後四時に出發して六時初鹿野驛に着いた。途中には天目山栖雲寺が在る、少し下ると例の不連な

る武田四郎勝頼の墓もある。弔つて昔を偲ぶのも無駄事ではあるまい（白然）

### ○鼯鼠談山

別項「立山と劔岳に就て」の文中に於て、鶉殿氏は本誌第十年第二號に附録として添へた登山地圖「劔岳」に言ひ及ぼし、其別葉に載せたるスケッチに山澤の名稱を記入したものの、中、誤れるものあることを指摘し、ブナクラ谷の位置に疑を抱き、其他此山塊に就て種々の意見を述べられた。私もその地圖に材料を供給したばかりでなく、輯製にもだづさはつた一人であるから、茲に代表的に氏に答ふるもあながち差出がましき所業でもあるまいと思ふので、序に其他の點に關しても亦私の卑見を附記することにした。

登山地圖の別葉に載せた後立山々脈新越乗越（これは新乗越又は新越といふ方が正しい）より劔岳及立山の一部を望むと題せしスケッチに記入した山澤名は、全く編者の誤記であつて、謝するに辭なき粗瀆である。氏のいはれる通り鶴ヶ御前

は新越からは別山に遮られて望見することが出来ない。従つて鶴ヶ御前とあるは別山、別山とあるは眞砂岳と改む可く、眞砂澤とある文字は劔澤とある位置に移し、劔澤は平藏澤と別山との間にある窪に當るやうに記入しなければならぬのである。鶉殿氏は前にも屢々圖版又は挿畫の誤れる説明を訂正され、且つ常に多くの資料を供給されつゝあることは、大に感謝する所である。又此スケッチは寫眞を基として茨木氏の描寫を煩はしたものに、編者が山澤名を記入したものであつて、同氏はこれに就て何等の關知する所がないので、誤解のないやう其事を申添へて置ます。此山澤名の誤れることは發行當時既に辻本博士から注意を受けたので、私は「黒部川奥の山旅」の中で其事に言ひ及ぼす積であつたのが、時機を失して其儘今日に至つたのは誠に申譯のない次第である。

ブナ倉谷 白萩のブナ倉谷（上流を赤谷と稱す）と小黒部のブナ倉谷と、尾根を堺に相對して存在してゐるので、斯様な例は珍しくない。北葛澤、赤澤、鳴澤など皆其例である。

仙人山 池の平の東に在る標高二二〇二米突の山は、仙人山であつて池平山ではない。池の平とはいふが決して池平山とは黒部筋では呼ばない。元來無名の山である場合には、鶴殿氏のいはれる通りどちらにしても差支ないかも知れないが、既に仙人山の名がある以上は、池平山なる新稱を用ゐるのが誤りで、この誤つた山名を強ひて別名として保存する必要もないであらう。立山圖幅の仙人山は何に據つたかを知らない、夫で登山地圖には之を削つて小窓の頭と命名して置いたのである。

以上は登山地圖に關聯したものであるが、以下は鶴殿氏の所説に對する私の見解である。

越中澤岳 此山の命名に就ては、既に本誌第六年第一號四十九頁から五十頁に亘つて説明してあるので、それを讀めば判然する通り、當時此山に就てどれ丈のことが知れてゐたかを考へたならば、これを越中澤岳と命じたのに何の不思議もない。越中澤の正名が温谷であることは勿論であるが、其當時は中の谷の一名を温谷といふやうに考へられた。所詮此山は梅山といふのが大山村の稱呼であ

るから、登山者の仲間にも又信越兩國の人夫にも差支なく通用するやうになつた越中澤岳の名を、感じが悪い爲に撤廢するならば、温谷も數河も奥木挽も退けて梅山と稱す可きである。慶應谷や三田平や、不動堀澤岳を七倉岳と新稱するなどは、誠に感じが悪いが、越中澤岳といふ名が夫程感じが悪いであらうか。然し夫は私一人だけかも知れない。後來適當な名が定められれば撤回するに躊躇しないと命名者も明言してゐるのであるから、此上私は深く立ち入ることを避けたい。因に温谷は假製版の立山圖幅にはヌクイ谷と書してゐるのに（尤も皮肉に見ればヌタイ谷と讀めぬこともない）本製版ではヌイク谷と誤記したのは如何した譯か不思議である。

龍王岳と淨土山 淨土山にはもと阿彌陀堂があつた。室堂から東南に向つて進むと、雪田を横切つて直に上りとなり、一時間許りで一の山の頂上の北端に紀念碑の建つてゐる所に出る。頂上は割合に平で且つ細長く、少し彎曲しても東南に延びてゐる。高さは地圖に明記してないが、二八二〇米

突の線を有してゐる、此山が即ち淨土山なのである、雄山とは一の越の鞍部で連つてゐる。淨土山の長い頂上が東南の方で少し低くなつて、直に二八七二米突の高さに崛起した岩山が龍王岳である。これは全然疑を挟む餘地はないのである、何といつても昔からかう決つてゐるのであるから仕方がない。然るに立山圖幅は淨土山に記名せずして、龍王岳に淨土山なる名を記したのは無論誤りである。鶉殿氏は矢張龍王岳を淨土山と誤り、龍王岳と鬼ヶ岳との間に在る二七四〇米突（？）の山を龍王岳としたのは、誤りを重ねたものといはざるを得ない。

**大汝** に就ては鶉殿氏の御説の通りである。

**劔岳** は古來劔と書いて劔の字は用ゐてゐない、鶉殿氏は悉く劔の字を用ゐられたが、右の理由で本文には訂正して置きました。

**御山澤** これはオヤマサハであつてヤマサハではないオヤマに漢字をあてれば御山である。「六根清淨、お山は快晴」のお山である。偶々源が雄山の附近にある爲、雄山澤の間違ではないかと疑ふ

のは、疑ふ者の誤りである。尙ほ御前澤もいつか鶉殿氏のいはれたやうにオマヘザハではなく、ゴゼンザハである、山を御前様と敬稱することは古くからの習慣であつて、鶉ヶ御前なども元は劔ヶ御前で、劔岳の尊稱であつたのが、今では其南にある山の稱呼となつたのである。

**立山の標高** 私も三回目立山へ登つた時、雄山は三角點より約十五米突高く、大汝は雄山よりも五米突程高いと概測したから、立山の標高に就ては鶉殿氏の説に賛成である。又黒岳の三角點は絶頂より低いこと勿論であるが、其差は雄山に於けるよりも少し少ないかと思つた。但し十米突以上は確にある。

**ヤリ** 白馬岳の連峯がヤリに縁のある例として、私も一つ異説を紹介することにする、夫は越中の古圖に白馬本山の西に在る朝日岳を鎗ヶ岳として記してあることである。此山は北方の朝日岳や赤男山から遠望すると、眞黒な岩峰が鋭く聳立して、極めて尖つたヤリ状をなしてゐる。雪倉岳や鉢ヶ岳から眺めても可なり尖つて見える。白馬

岳は越後方面から見てそれ程尖つてゐない。鶴殿氏の文に依つて考へると、越後方面でいふヤリは白馬岳ではなくこの朝日岳をさしたもので、其東方にある大蓮華山といふのが即ち白馬岳に當つてゐて、どこのつまり大蓮華山即ち白馬岳なることに變りはないのではあるまいか。これはしかし私の憶説にすぎないかも知れぬが、朝日岳に鎗ヶ岳の異名あることは確であつて、小川筋や黒部筋で此稱呼を用ゐたものらしい。

御來迎 富士でも御岳でもさうであるが、御來迎とは日出日没の際に圓い虹が霧か雲に映つて其中に影像の出現するものをさしていふたものである、昔はこれを阿彌陀様が出現したものと信じて隨喜渴仰した。御來迎の名は夫から起つたのであらう。然し此現象は常に見られるものでないから、次第に固有の意味を失つて、後には單に日出其物を御來迎と呼ぶやうになつたものと思はれる。日出を御來光と稱するはまだよいとして、御來虹に至つては全く無意味である、摩訶般若を大智多勝と譯したとは比較にならない、夫こそ越中

澤岳以上に感じが悪い、御來迎はどこまでも御來迎であつて、他に良い言葉を見出し得る筈はないと思ふ。(木暮)

### ○岩菅山の登路

信州の岩菅山が淺間以北の上信國境附近の山岳では四阿山に亞ぐ高峰で、眺望の頗る雄大なことは、山岳第十三号第三號所載辻本博士の記文に詳細に述べられてある。從來その登路は雜魚川の梯子澤に限られてゐたが、(十四年三號一〇三頁)自分は今年四月下旬發補温泉に遊び、岩菅山に他の方面から登り得るを確めた。然しこの道は、四月初旬から下旬までの間に限るものであるから、果して登路と言ひ得るか疑はしいが、幾分參考にならうかと思はれることを記して見る。

年に依て多少の差はあらうが、この時分は發補附近の山岳は、三尺乃至五尺の殘雪を存し、例の根曲り竹が全く辟息してゐるので頗る歩きよい。雪は固く、スキもカンジキも不必要、この地方で爪掛けと稱する、藁で作つたカバーの様なもの

を穿いて、その下に草鞋をつければ何處でも樂に兎の様に飛んで歩ける。下記の登路はかくの如き時に限らるゝものである。

發補温泉天狗の湯の前を流るゝ溪流を渡つて、すぐ東の屋根に登り東館山の南側を絡みつゝ寺小屋の峯を目掛けて登つてゆく。一面の雪であるから樹間に見ゆる寺小屋ノ峯を目當てに登つてゆけば、約一時間半にして峯頭に達する。夏もこの途中までは竹を切りに登る道がある由なれど、それから先きは一寸想像も出来ない藪潜りを覺悟せねばなるまい。自分は此處から南へ向つたのであるが、岩菅へは北に山稜を傳ふのである。二時間乃至三時間を要すると宿の主人は言つてゐたが、どんなものであらうか。この山稜傳ひは、晴天ならば、上信、上越、上野の國境連山を右に眺め乍ら、東側の斜面に驚くべき残雪を有する岩菅山に登つてゆくの甚だ興味多いこと、思はれる。歸途は往路を戻るなり、或は全部雪溪となつてゐる梯子澤を下つて、所謂高天ヶ原の雪景色を賞して温泉に戻るなり、(自分の行つた四五日前、會員の田中、

目黒兩氏がこの行程をとられた由) 何れを選ぶも隨意である。

發補ではその西北にある一七五六米突の山を西館山と稱し、東方の二二二五米突の山(十三年三號二頁に東館山とあるもの)を寺小屋ノ峯と稱し、この峯の西北に當り二〇〇米突の圈を有するものを東館山と稱してゐる。自分は澁峠を越す時、硯川の上まで沓野の男と一緒にたつたので、念の爲め尋ねて見たがこの稱呼は間違つてゐない様であつた。(藤島敏男)

○日本アルプス雜詠

古 家 實 三

島々入り途中

信濃路や涙ぐましくうれしきは白樺の森から

松の森

雪の峰いくつ見えけんかくれけん山に入る日

の胸さわぎかな

徳本峠頂上より穂高を仰ぎて

禮讚れいさんのすべさへ知らず只管に峰を仰ぎて涙ぐ

みけり

油然と歡喜の涙わき出てぬ山よ御身の足にそゝがむ

梓川

寶玉の幾つ溶けしむ流れけむ光り輝く梓川かも

霞澤嶽

雪かたとぞ見れば岩なり岩かたとぞ見れば雪なり

霞澤岳

燒嶽

あめつちのしじまのなかにただひとりあらぶるものをやけだけといふ

梓川畔の處女林

露草を踏みつゝ森の下路を辿る我等に幸は集ひぬ

ひぬ

祭々と木の間を漏るゝ夏の日の光なつかし處

女林の中

槍ヶ嶽頂上にて

夏の國は何地ゆきけむ見るかぎり見渡すかぎりたゞ雪の山

○アルプス歌卷

横山光太郎

上高地

搖れやまぬ青葉のひまゆ穂高岳山巖あらく雪光る見ゆ

木をもたぬあかさ禿やま燒岳は今朝を晴れたり噴く煙みゆ

白樺の樹間明るき雨あがり牧場の牛は皆黒き牛

自からかけりは早き山かひを深く入り來ればかなかな啼けり

眼に見ゆるもの皆寂しわが前の夕逼る尾根に霧とく流る

二俣小屋

幾山を隔てゝ遠く落つる日の赤かりければかなしかりけり

天の川白くかゝれり岩あらしこの高山に見るものはあらず

白馬岳

霧去ぬといふ間もあらずきり迫り呼びあひて  
登る大雪溪

くもり日の岩山肌に細り咲く花のさびしきは  
くさんいちげ

降りつゝの天のものなかの雨にぬれこの山小屋  
のさびしくもあるか

## ○山岳圖書批評

あの山この山

土居通彦著

大正九年六月發行、四六判四百四十二頁、正價  
貳圓五拾錢。乗鞍、御嶽、木曾駒、妙高、黒姫、  
焼山、戸隠、淺間、八ヶ岳等の紀行文七編と新體  
詩一編とが收められてある。本書は著者が序文  
に斷つてある如く、自分本位の紀行文であるが、  
描寫や感想などは達者に面白く書かれてある。恐  
らく文學的とか、藝術的とかには價值あるもので  
あらう。評者は此方面の智識が皆無であるから其  
方の批評は止めることにして、山岳的の記事とし  
て本書を讀んで見ると、之も著者の序文にある通

り、案内記としては甚だ不適當なものであること  
は致し方がない。然し我々は此種の書物に案内記  
兼用を強請するものでないから、それは宜いとし  
ても、山麓其他の描寫が寧ろ詳細に過ぎるに反し  
て、山上に登つてからは頗る物足ない思がさせら  
れる。特に評者が多大の期待を以て讀んだ黒姫及  
び焼山の紀行の如きは、何處をどう登つたのか、  
地圖上に通路を探つて見ても、殆んど見當がつか  
ず、大に失望させられた。本書の標題や目次を見  
て、山岳的に面白さうな處から、相當高い代價を  
拂つて買込んだ、自分の様な非文學式の山好きも  
必ずあらうと思はれるから、山には必要もない下  
らぬ問答や、俳句などを除いても、今少し山岳的  
の記事を豊富ならしめて、もらひたいものと思つ  
た。然しこれは出來難い無理であるかも知れぬ。  
以上は山岳の本位から、本書の缺點を挙げたも  
ので、一方には又非常に面白い處もあるから、一  
讀の價値はあらう。只だ多數挿入された寫眞版は  
大抵不鮮明で實際の參考になりそうなものゝ少な  
いのを遺憾とする。(由水生)

## 雜報

## ○林道六萬間

日本アルプス連峰の登山者は年々増加して昨夏の如きは世間の不景氣にも拘らず未曾有の激増を示した、其處で松本小林區署では是等の登山者に大便宜を興へる爲めに十年度には所謂人跡未達の地に林道を開鑿する事となつて一月以來各方面に精通して居る登山案内者の如き人々に依つて調査した必要と近道と平易な登山路、飲用水の有無、露營地の適否等に就いて研究しその結果十年度に開鑿する林道即ち登山路は延長六萬間と決定した、其の主なるものは南安疊西穂高村から常念岳へ登るものと同郡有明村中房温泉から燕岳方面に登らずして直に常念岳へ登るものと更に常念岳から槍ヶ岳へ行く一の股まで行くもの等である。燕岳から二の股の小屋まではアルプスの大通りと稱して一昨年立派な縦走路が出来て居る、十年度新たに改修する前記のものゝ内で常念岳から一の股までは従來道らしい道があつたが餘り登山者も通らぬ極めて峻険なものであるから之を林道として改修したなら常念乗越の小屋から槍澤の小屋へ行くのに極めて便利である又西穂高から常念へ登山するには従來烏川の一の澤口があるが尙今度改修する林道は烏川の方へかゝらずに直ちに一の澤へ出るものを新設する事

になるから至極便利になる、此の外に既設林道の中で谿谷の激流や其他の風水害の爲めに修繕を要するもの又は更に延長工事を要するものは十六萬二千七百間ある、尤もこの内には小林區署の森林鐵道の軌道を延長するものも含まれて居る、上高地温泉から白骨温泉へ到る林道は先年燒岳の大噴火の爲めに埋没されて現在通行し居る處は極めて危険な處であるから之を燒岳山脈の中腹に移して、梓川に墜落すやうな危険を避ける事にした、その林道は約一里位の工事區域である、徳本峠の岩魚留から鳥々までの森林鐵道線を登山者の爲めにトロツコーを運轉する事に希望者が多いので小林區署でも種々研究したが鳥々から上高地へ行くには別に差支へないが上高地から鳥々へ下る時は木材を積載して行くのであるから登山者を載せて運轉する事は大林區署の方でも今の處許可されぬ、是等の林道開鑿事業は解雪期に入れば直ちに工事に着手する事となつて多數の入夫が山入りをするから遅くとも七月の上旬頃までには竣工する事になる、其れて今夏の登山者は是等の林道の爲めに非常に便利となる。(十年二月十七日東京日々新聞)

## ○日本アルプス公園地

日本アルプス國立公園地視察の田村林學博士一行は上高地温泉帯在中附近隈無く調査し公園候補地は小型平に選定し博士は地名及樹木名鳥獸名草名等を詳細に調査し山水の風景と共に撮影した。公園地の建物はホテル、教會、運動場、公會堂等て道路は鳥々谷より徳本峠を隧道として運轉を自由ならしむべく、第一計畫は上高地保護林を中心として八百町歩、第二計畫は三萬五千町歩の

豫定である。(十年六月十七日東京朝日新聞)

○淺間山爆發

淺間山は昨年十二月廿六日の爆發以後稍靜穩の状態にありしが、本年一月十八日に至りて復大爆發をなし爾來引續き小爆發を繰り返すこと左記の如し。

一月廿二日午後七時五十五分頃 小諸町にて微音響を聞く。

一月廿四日午前六時四十五分 噴煙東に棚引く。

二月七日午後四時五十六分 小音響を伴ふ。

二月十二日午後四時 小鳴動あり。

二月十三日午後四時十分 長野市より黒煙を望む。

二月十五日午後五時頃 上州嬭懸村邊は直徑五分大の小石を交へたる降灰地上一分の厚さに積る。

二月十六日午前二時半頃 小諸町にて小鳴動を聞く。

三月八日午後五時半

三月廿九日午後六時廿五分 引續き二回爆發す。

五月十六日午前八時二十五分 小諸町附近にては鳴動を聞く、御代田邊より上州甘樂郡へかけて降灰す。

五月廿三日午後より廿五日にかけて絶えず噴煙せしものゝ如く降灰多量なるも曇り且雨にて状況不明(岩村田)

六月四日午後五時十五分 鳴動は一分十五秒間繼續し爆發は昨年の大爆發よりも強く淺間山觀測所にては戸障子破壊し沓掛御代田にては戸障子外れ硝子戸は全部壊破し、上州吾妻郡嬭懸村大字笹にては震動の反響にて土蔵一棟崩壊し其他戸障子

の粉碎したるもの多く且つ降灰あり前橋地方にても戸障子大震動をなし降灰量一坪當り九十七八匁に達せり。

○夏期日本アルプスの氣温

都會では攝氏三十度内外の苦熱も日本アルプス高山地方では冷氣肌に迫るの爽快味は何とも譬へやうもないが、一旦天候の劇變などに遭遇しては忽ちに悲慘な凍死など云ふ危険を招來することもありがちの事である、そこで私達が大正八年の夏大町から針ノ木、立山、劔、小黑部、黒部の溪谷から、ばと谷、清水平を経て白馬嶽に出た山中十日の間に測定した氣温を茲に記してみたいと思ふ、一寸適當な表題も思出せなかつたので夏期日本アルプスの氣温などゝ大袈裟なところはお赦しを願いたい。

難險踏破の間に色々の關係から測定も思ふやうに規則正しく行ふことが出来なかつたのは残念である、尙ほ對照として京都測候所測定の一時間に於ける氣温と比較してみるの頗る興味ある事と思つて茲に並べ記することにした、尤も此行は非常に雨が多かつた、毎日好天氣續きの光線が直射する時間では温度は之より幾分高いに違ひないと思ふ。

劔澤の夜の寒さは、さすがに身にしみる感があつた、ババ谷温泉あたりは温泉の御蔭で温度はズツト高く四日の午前六時には京都よりも二度近くの高さを示してゐる、最も寒かつたのは旭岳南方屋根の夜營(五日)であつた、雨に濡れた土の上に濕つた這松を敷いて天幕を張つたので下からの濕氣で遂には折角焚火で干かして着て来た衣服から肌着までもシメムゝになつた、晝間の天

大 正 十 年 七 月 發 行

日 本 ア ル プ ス						京 都
月 日	天 候	場 所	標 高	時 間	氣 溫	同一時間 氣 溫
八 月 二十八日	軟 時々 風 雨	大 町 白 澤 大 澤 小 屋	725	午 前 七 時 後 一 時 後 一 七 時	21.0	25.0
			約 1150 ? 約 1300 ?		20.0 14.0	32.4 27.4
二十九日	軟 半 後 雨 風 晴 リ	同 上 同 針 ノ 木 頂 平 ノ 小 屋	同 同	前 一 時 前 一 八 時 前 九 時 後 九 時	12.5 15.5 13.5 14.0	23.2 27.1 30.7 27.4
			2541 1383			
三十日	軟 晴 夕 ヲ リ 風 雨	同 上 同 一 峠 ザ ラ	同 同	前 一 時 前 一 八 時 後 七 時	13.0 14.0 12.5	22.8 26.9 28.8
			2353			
三十一日	軟 夕 雨 風 晴 リ	同 上 同 ザ 室 鬼 間 ラ 堂 附 近	—	前 七 時 前 一 一 時 後 一 八 時	— 15.0 13.5 12.0	— 24.3 31.6 27.8
			約 2750 ? 245b			
九 月 一 日	軟 時々 風 雨	同 上 同 一 澤 劔 澤	同 同	前 一 時 前 一 八 時 後 八 時	13.0 15.0 13.0	22.3 27.8 26.0
			—			
二 日	軟 快 風 晴	同 上 同 小 鏡 黑 山 上 部 跡	—	前 一 時 前 一 六 時 後 一 八 時	12.0 12.0 15.0	20.8 20.4 27.8
			2202			
三 日	軟 快 風 晴	同 上 同 巴 温 ヲ 泉 上 谷 跡	同 同	前 三 時 前 三 六 時 後 一 八 時	12.5 14.0 21.5	21.0 22.2 25.2
			845			
四 日	軟 夕 雨 風 晴 リ	同 上 同 巴 温 ヲ 泉 上 谷 跡	同 同	前 一 六 時 後 一 八 時	— 22.0 17.0	— 20.2 24.5
			約 1900 ?			
五 日	強 雨 風	同 上 同 旭 岳 南 尾 方 根	同 同	前 二 時 前 二 六 時 後 九 時	17.0 17.5 17.5	21.1 24.2 24.2
			約 2680 ?			
六 日	軟 快 風 晴	同 上	同 同	前 一 七 時	11.5	20.8

氣溫ハ攝氏、標高ハ米突、參謀本部五萬分一圖參考

候とは打つて變つて晴れ渡つた高い透徹した天空に鋭い月光を仰いで立つた時には實際皮膚が痛むやうな寒さを覺えた、之は氣温よりも寧ろ衣類の濕りが主に影響したと思ふ、翌朝六時の氣温は十一度五分を示してゐるから夜半には十度を餘程下つてゐたに違ひない、小用には止むを得ず天幕から外へ出たものゝ寒氣と晝からの疲勞で検測もしてゐない。

兎に角登山には寒氣そのものよりは、肌まで雨に濡らさない用意が第一に肝要な事だ、私等も此五日の晝間の暴風雪には實際危険な目に會つた、之は實際に臨んで思當つた經驗が幾分の參考になる事と思ふから何れ稿を更めて書いてみたいと思つてゐる。

○登高行

第三年

(京都大學西 繁寄)

慶應義塾山岳部の年報にして、本年六月の發行に係る。論說に岡田氏の山岳と文學、白井博士の山岳と樹木、及び松本氏の泰山の研究等がある。岡田氏が山岳の崇高美を初めて理解した人らしい瑞西のコンラッド・ゲスネルや、山岳のロマンチック的な覽力を感得した最初の人であるジャン・ジャック・ルソーに就て説かれなかつたのは、吾々山岳宗徒の甚だ遺憾とする所である。記行は昨年同部員の各地を跋渉したる折の記文であつて、大鳥氏の石狩岳より石狩川に沿ふては深い興味を覺えた。宮川氏の平ヶ岳尾瀬方面の旅行記、三田氏の越後銀山平より會津の山旅等も面白い、其他冬季早春の旅行記に冬の藏王越え、東吾妻から高倉山へ、春の西吾妻等がある。コロタイプ寫眞版三葉、寫眞版三葉を添ふ。定價壹圓五拾錢郵稅四錢。

○廣島山岳同好會

廣島在住の會員柳直次郎氏等の組織せるもの、規則の要は左の如し。

第一條 本會ヲ廣島山岳同好會ト稱ス

第二條 本會ハ山岳ニ趣味ヲ有スル同志ヲ糾合シソノ趣味ノ向上ト普及ヲ目的トス

第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スルため左ノ機關ヲ設ク

一、研究部 一、寫眞部 一、講演部 一、文藝部 一、庶務部 一、會計部

第十條 本會ハ事務所ヲ廣島市國泰寺町一一六番地ニ置ク

第十二條 本會ハ會員ヲ左ノ三種ニ分チ年齡滿十六歲以上ノ男子タラザル可カラズ

一、正會員 一、特別會員 一、贊助會員

第廿三條 本會ハ年二回機關雜誌「山彦」ヲ刊行シ之ヲ會員ニ分ツ

○奈川口本年の人夫賃及物價

本會奈川口登山案内者組合の定めたる本年の人夫賃及物價左の如し。

一、案内人夫料 一日金貳圓五拾錢 一、強力人夫 一日金貳圓

一、宿泊料 辨當付金壹圓 一、白米一升 金四拾五錢

一、味噌百匁 金拾錢 一、鶏卵一個 金拾錢 一、蕨蓴一枚

金拾五錢 一、草鞋一足 金拾錢

## 海外彙報

## ○モン・ブランの頂上崩る

歐米諸新聞の報ずる所に據れば、アルプスの最高峰モン・ブランは、昨年(一九二〇年)十一月二十三日俄然頂上の一部崩壞してこれと共に大なだれを起し、無数の氷塊と大小の岩片とは、凄じき勢を以て殆ど一萬呎の距離を落下し、伊太利側のクールマユールの谷に大害を蒙らしめたり。

なだれの起りは、強力なる望遠鏡を以て見たる所によれば、頂上に聳立せる小山の如き大石灰岩の裂けて墜落せる爲にして、なだれのブレンヴァ氷河に達するや、その衝突せる部分を粉碎し堆石は瀧の如く谷底を拂ひ落され、氷及岩石の碎けたる細片は塵と共に舞ひ上りて、大氣を朦朧たらしめたり。其音響の強烈なる能く五十哩を隔てたる家屋を震動したりといふ。若し森林の之が進行を阻止するなかりせば、クールマユールの谷は全滅したりしならんも、幸に其厄を免かれたり、されどヴァルヴエニの誇にして且裝飾たりしサン・ニコロの古き松樅より成る大森林は全く破壊されしんぬとぞ。

此なだれは天候の異常に基くものゝ如く、十月以來アルプスの高所には記するに足る程の降雪なく、雨降らざること五十七日の久しきに及べり。斯くして岩と氷とは通常十一月に於ける場合の如く新雪に依て固結されず、クレヴァスは異常の早魃の間に擴大

し、加ふるに十月、十一月の間高所に在りては、頗る多くの温き日照時ありて、略ぼ夏にも等しき氣候なりし。常には厚さ平均七十五呎の氷冠を戴き、更に其上を掩ふに多量の軟雪を以てせるモン・ブランの頂きも、當時は固き氷塊たる有様を呈せしなる可く、恐らく此異常なる早魃と温さとがモン・ブラン災厄の原因ならんといふ。これよりさき佛國側にも大なだれありて、シヤモニー溪谷に大害を蒙らしめき。このなだれは頂上より起りしものにあらざりしも、若し頂上にして今後又もやなだれの爲に分裂するが如きことあらんか、山の高さは減ぜらるゝ——或は一干呎さへも減ぜらるゝならんとは、ジェネバ特電として十一月廿七日のニューヨーク・タイムス紙上に説く所也。

## ○エヴェレスト山探險隊

二萬三千呎を越ゆるものみにても猶ほ二百八十四座を有する大ヒマラヤ山脈の高峰中、第三に位する二萬八千七百七十六呎のカンチンジンガ山は、一八九九年より一九〇〇年に亘りてフレツシフキールド氏の探險あり、同氏は二萬四千呎の地點まで登りたるも、絶頂に達すること能はざりき。次で第二の高峰ゴッドウキン・オーステン山は一九〇九年サヴオイのルイジイ・アメデオ公の遠征隊によりて四圍の状況を詳にし、更に今次の世界大戰の將に始らんとする前、アブルヂイ侯に依りて再び探險され、其際侯は二萬五千百十呎と測られたるブライド・ピークの頂上直下五百呎の高さまで登りて、世界山岳登攀の最高記録を造られたり。然れども實際の頂上を窺めたる最高の記録は、一九〇七年にロングスタ

ツフ氏がガールル・ヒマラヤの一峯二萬三千四百六呎のトリサルに登りたるものにして、山頂の記録としては他に未だ之を破りたるものなし。

斯の如くヒマラヤ山脈を探検する者必ずしも少しとせざりしが、未だ曾て一人の世界第一の高峰エヴェレスト山を目指したるものなかりき。否、實は其人ありしも、印度政府はネバル又は西藏と紛擾を惹起せんことを恐れて、常にエヴェレスト登攀の企を禁止する方針なり。かば、彼のアブルチイ侯が其多くの登攀山岳目録中にエヴェレストをも加へんと志を有したりしをも、放棄せざるを得ざらしめ、爲に侯はブライド・ピークを征服して満足したるに止まれり。

然るに昨年英國山岳會は地學協會と協力して、エヴェレストの探検を企て、印度政府の特別の諒解を得て、著々其準備を進め、本年五月を以て遠征の途に上れり、勿論本年は四近の地勢、山その物及氣象等に就て充分に考究し、地理上の知識を豊富にし、明年を待つて實際の登攀を開始す可く、道はダージリンより西藏に赴き、山の北側より之に近づく計畫にして、二年間の費用約十萬圓以上を要す可しとの事也。他日更に詳細なる報道を得て之を掲載す可し。

## ○會員通信

△珍らしく今年は秋晴續き、加ふるに何のかのとお祭り騒ぎ多く山行きには何よりに候、都の雑沓に恐れを爲し、廿日夜出發、小

諸に下車、天池一ノ城戸平を経て三方ヶ峯に登り、國境を傳つて湯ノ丸山に至り、角間峠より鹿澤温泉に下り一泊致し候、南、秩父連山、富岳より北アルプスの全部、北方、四阿、横手方面に至る無數の山岳を眺めつゝ茅戸の山を至極呑氣に歩き申候、第二日は古永井より四阿山に登山、山頂より前日見えたる山々に更に日光群山平ヶ岳方面をも望み得申候。歸途は鳥居峠に下り、稍盛りを過ぎたりと思はるゝ紅葉を賞しつゝ上田に出て歸京致候、いつも乍ら上州の山々の期待に背かざるを喜び居候。(大正九年十一月三日 藤島敏男)

△拜啓暫らく内地の山岳に親むの機を有せずして只諸兄御活躍の御消息のみを戴き居り候ひし處十二月中旬歸京致すことを得候へば例年の通り二十二日冬至の朝リユツクサクを負うて出發致し候。北海道にて緩行汽車には可なりの修養を積み候心算に候ひしも中央嶽の相も變らず緩慢なるには閉口致し候が外に途も無之候まゝ新宿發午前九時十八分の列車にて西行致し候。朝來西南の風吹きたる爲めか代々木停車場より丹澤山塊も霞みて見えず聊か落膽致し候も國分寺、立川と近づくに従ひて漸く明瞭となり八丁坂の積雪など例によりて鮮に候多摩川の鐵橋より秩父群山を拜し候處仙元峠方面の雪なきに引かへ、大菩薩連嶺のみ殊に白く輝きて見え申し候。猿橋より雁ヶ腹摺方面を望み候處頂の茅戸も雪大方消えて吹切に緞く山稜のみ白く見え候。午後零時四十五分初狩に下車し先づ瀧子山の峻峯を仰ぎたる後南に宮川の谷に沿ひ正面に三ツ峠山を仰ぎ乍ら二時鶴ヶ鳥屋山の東足に達し候。此處は芽ヶ坂の西に當り北には瀧子山頂と雁ヶ腹摺山方面を望み南には三ツ峠山、鹿

留山、御正鉢山等を觀望するには格恰なる地點に有之候。觀望撮影等に時を費すこと半時許にして上大幡に下り木社ケ丸を初めとして三ツ峠山の北裏よりその一峰水雲山を経て八丁峠へ續く山稜及び三ツ峠山より鋸齒を経て論所に連る山稜等を間近に仰ぎ又初狩方面にて大幡山と呼ぶは三ツ峠山の事なるを確めたる上論所に向ひ候處尾根道を上らずして入道澤に入りたる爲め聊か時間を浪費致したるもやがて本道に上りつき大幡より一時間餘にして論所の峠に辿りつき候。此處より夏狩に下る道は中々よくふめ居り候も暮地への道は荆棘いやが上に生ひ茂り意外の困難を嘗め五時下暮地に降りつき直に小沼に到りて例の橋小屋に宿を借り候。二十三日早起して七時下暮地に赴き前田巖氏を誘ひて三ツ峠山に向ひ候。登山路は通例の賽路によることとし達磨石より直に右折して大曲、馬止を経て石割權現に到達致し候處昨秋小沼の古老とかが自作の小祠を奉納したるありて神威嚴に見え申し候愛染明王の石より少し上りて前回見ざりし富士石を見物し十時十分百地蔵に著此處より親不知の嶮を經膝に達する雪を踏みて十一時十五分三峠大權現祠に到着祠背を右に行きて鎧の岩屋を見物し御船石には登らずして西の峯を匝りて不動澤に達したるは十一時四十分候。澤は幸にして滴下し飛沫は大氷柱となりて岩壁に附着せる様奇觀又偉觀に候。日向に腰を下して中食をなし瀑水を掬して渴を醫したる後此處を發し(零時十五分過)雪間を上りて彼の緩なる尾根に上りつけば北は奥秩父の山々より八ヶ岳、駒ヶ岳、鳳凰山を初め赤石山系の尤物雪を被りて目も眩せんとする程に候。山稜上は雪甚だ深く膝を没する程にて歩行容易ならず加之山頂も雪に蔽

れて佇立し難きを思ひ獵夫の足跡を辿りて西北に山腹を廻りて八丁峠に續く一峯(東京よりよく見ゆる右端の突起)に上り候處簾深きのみにて何等見る可きものなきに落膽して山脊を東南に傳ひて三ツ峠三峯中東端の峯(或古圖にこれを水雲山と稱す)に到り更に東に山稜を下りて終に百地蔵に出て(二時十分)一二撮影の後急行して二時五十分達磨石に著き少憩の上最後の撮影をなしたる上直に下暮地に赴き三時四十分小沼發の鐵道馬車にて大月に向ひ候。大月より下り列車に乗じて初鹿野に到り驛前に休憩して形ばかりの夜食を濟ませ七時半十四日の明月を倚りに山路を田野に向ひ八時二十分鐵泉旅館石黒館に投宿例の透明なる鐵泉にて終日の汗を洗ひ落し候。翌二十四日前日に劣らぬ快晴に乗じ八時五十分出發曲り澤を上りて十時十分郡界の尾根に達し此處にて眺望を擅に致し撮影し乍ら山稜を大谷ケ丸に傳ひ十一時五十分その頂に達し候。此邊も南面は大抵雪消え去り居り候へ共山頂より北面へかけては雪中々に深く流石の小生も渴に苦しむことは絶對に無之候。中食の後零時半出發して北に續く支峯に向ひ十分許にして其頂に達し候。頂は南の峯に比して樹木多く眺望可ならざれども黒岳山や胸摺方面を望むには却て勝れる様覺え候。此峯より東南に廻りて再び郡界の山稜を東北に傳ひ天下石迄參り候處雪深くして如何にも歩行意の如くならず乾板も盡き雪中にて取替へるも容易ならざれば眞木村に下るに決し候も澤に下りて深雪に苦しむも面白からざれば尾根道を行かんものと少し戻りて一六二〇米の峯より東に尾根を下ること四十十分許りにて二時半オホゴ澤とコ澤との合流點の稍上手に下り著き舊木馬道を本澤に出で三時半桑西に達し先年宿泊を

乞ひ得たる農家を訪問致し候處是非今回も宿泊せよと請ぜらるゝまゝに靴を脱ぎて上り込み候。廿五日は朝來快晴なりしも風激しく寒氣も從つて強き様覺え候へ共先年誤つて登り其頂より左に木澤に下り候中草里に登りそれより吹切峯に尾根傳を試みんものと朝八時四十五分桑西を發し野脇の澤(吹切川)を渡ること三回にして左折し十時中草里の頂に達しハマイバ、大倉高丸、湯ノ澤峠、白屋ノ丸、茶臼、赤屋ノ丸、大峠、雁ヶ腹摺方面を撮影の後馬ノ背の狭地を経て吹切に上り十一時十五分峯上に達し候。吹切より賑岡に下るは簡單には候へ共雁ヶ腹摺の勇姿を見ては登躋の念禁ずること能はず豫想外に深き積雪を冒して北に山稜を辿り巨大なるミヅナラの間より右に奈良子澤の源流を距て、姦子の岩峯を望み左に木澤を距て、白屋、茶臼の連脈を仰ぎ乍ら一時間餘にして辛くも腹摺の兩足に達し候雪深きと上下の夥きこと意外にて候も春五月頃の遊山地としては一流のものと存じ申し候。山稜上風強き處にては積雪を吹飛ばすは愚か崩壞せる斜面の上にては砂礫を飛ばし歩行中々安易ならず候。腹摺頂上に近づくに及んで黒木立に入るや巨岩重疊し積雪堆かく僅かに鹿の躡跡を頼りに進むのみにして午後一時山頂に達し候。雪の消えたる茅戸に座りて中食を使ふ傍ら前回に得られざりし眺望を擅にする間に雪を渡り來る寒風は氷點以下と見えて穿てる靴の日影側には結氷を見又鼻孔にも結氷を感ずる程にて宛然寒中に北海道を旅するが如く思はれ候。中食撮影もそこ／＼にして一時半絶頂を辭し山稜を東北に傳ひて丸岳(一七七七米)に出でたるは二時五十分候尤も途中雪少き所にて乾板挿かへ等の爲め三十分を費し候へば實際は歩行一時間を出て

申さざる次第に候。丸岳の東南面は地圖にも示してあるが如く茅戸なれば眺望甚だ廣く候へば腹摺登山の折は一遊すべき所かと存じ申し候。丸岳の東端は茅戸の急斜面にて所々に倒木など横はるのみ雪を蹴つて降ること十分許りにて小鞍部に達し候こゝより長大なる尾根を東に傳ひ小凸起を越ゆること幾回なるを知らず右は奈良子川に注ぐ二階谷の源流を下瞰し左は多摩、相模兩川分水脊より佐野峠を経て大室山に續く長大なる山脈を望み乍ら右曲左折しつゝ大峯の三角點(一四二二米)をこえ其の東の一峯小祠を安ずる所に達したるは午後五時にして満月東天に上り下界は已に暮色に包まれ終り候。大峯附近は葛野川左岸の麻生山に似寄りたる景色にて主に落葉樹なれ共間々針葉樹も交はり(モミ、ツガの類)コイハカミ、ヒカゲツツジなども見當り候。大峯より大平に下らんと考へ候へ共夜陰と積雪との爲めに降路明ならず候ひし爲め依然山脊を東南に傳ひ明月に照らされて金屬製の如く輝く雁ヶ腹摺一帶の連山を仰ぎ乍ら一〇九九米の峯の西側を搦み(六時)やがて急斜面を東に下り麓山を経て六時四十分瀬戸の字井戸地に出て辛じて往還に出で候。これより葛野川沿ひに例の平凡不快なる惡路を猿橋に向ひ瀬戸に小憩して空腹を醫したる上急行して八時四十五分猿橋畔の商人宿小松屋に到着致し候。二十六日は前日に勝りて風もなく温き晴天に東京迄直行するも愚なる様思はれ候へば上り一番の列車にて上野原に參り九時過ぎ仕度を調へ身輕となつて生藤山方面へ山遊びを試み三國山頂より大菩薩連嶺を仰ぎ瀧子山の左に遠く惡澤、赤石を望み此行程最後の歡を盡し夕刻上野原に戻りて歸京致し候。(武田久吉)

△日曜一日を利用して殘雪の岳に登らうと云ふ少し慾張つた計畫でしたが、天候至極上等でしたので五月十五日には駒の頂きに五月二十九日には鳳凰山脈を縦走することが出来ましたのは幸でした。

五月十四日午後五時七分の甲府發の下り列車で六時半日野春下車釜無川の小橋が落ちておましたので徒渉して蘆ヶ原に出て白須の鶴屋に宿泊しました、翌十五日午前五時蘆ヶ原の大夫夫久保孝平を連れて出發七時四十分笹の平九時十分刀利天を経て黒戸を右に廻る邊から雪がありました屏風岩を超えて七丈の小屋に至れば積雪最も深く同行の大夫夫はガンジキが不完全だといつて前進を躊躇しましたから大夫夫は小屋の前に待たせて置いて十一時獨り出掛けました小屋から偃松迄が一帯雪が深く大に困苦しましたが偃松迄来て見れば雪も少くなり大に樂になりました、鳥居を過ぎてから劍の立て、ある岩角迄は又雪深く且つ斷崖の上を傳ふのですから少なからず苦心しました一時十五分漸く頂上に到着しました、天候快晴且つ風もありませんでしたから寒くもなく誠に氣持ちよく殘雪白凱々たる仙丈、白峰鳳凰等の諸連峰の眺望を擅にすることが出来ました。一寸下の石碑などある所から寫眞を撮り頂上を辭したのは一時三十分、七丈の小屋に着いたのが三時十五分待ち受けた大夫夫と共に出發し五時半笹の平を過ぎ七時二十分鶴屋に歸着 掛けた儼夕食を濟ませて日野春に向ひ十時三十九分の終列車で歸りました。

二十一日の土曜日は天氣が危かつたので其の次の土曜二十八日に同じく五時の汽車に乗り五時三十分葦崎下車青木の湯に向

ひました、鷹の田の沼の畔で提灯を點け鳥居峠を越えて湯宿に著いたのは丁度九時でした。大夫夫を雇ふと頼んで見ましたが未だ誰れも居ませんでしたから舊式のカビネ形の寫眞器や食料其の他の雜品入のリユックサックを背負つた儼翌日午前四時三十分河を出ましたドンドコ澤を遡つて右手の山に入り精進澤(柳澤の精進澤とは別のものなり)白糸の瀑などの瀑聲を左に聞きながら段々進みました。二三百米突の邊から雪がありました賽の河原の二三十間下までは三四日前に同じく青木湯から登山して賽の河原で引き返したといふ甲府の野々垣氏外一名の足跡が雪の上に點々と明瞭に残つておましたので心強く感じました、九時十五分漸く賽の河原に登りつめました。例の小さな御地藏さんなどは雪に埋れて全く見えません風は物すごい音を立て、吹き上げて来て雪を飛ばすので寫眞を撮る間も手がかじかむ様でした。前途の困難を考へ時間節約の爲め地藏佛は割愛して九時五十分地藏ヶ嶽に向ひました東側の夏期に道のある邊を斜に下つて十時五分鞍部に出ました、此處からも道は東側を通るのですが尾根の方がいくらか雪も堅いだらうと思つて切り開けを喘ぎ喘ぎ這ひ登り十時五十分漸く地藏ヶ嶽の三角點に達しました、此の日も近來になき快晴で一點の雲もありません近くは駒、仙丈、白峰遠くは日本アルプス及富士を心行く限り眺められましたのは誠に幸福でした。寫眞など撮影し十一時半出發雪が無ければ西側の山腹を通りますが萬一をおもんばかつて可成尾根又は北側の偃松の上を渡りました、途中で又寫眞など撮り十二時四十五分藥師の水石の處から元青木の湯跡へ向つて下り始めました、例の偃松のトンネルなど雪に壓せられ

て滑る所ではありません。雪の爲め道筋を失ひ灌木内に迷ひ込んで苦みましたが左へ左へと取つて行く内に道に出たので樂になりました。兜岩の邊から雪に離れ三時に青木湯跡に出ますと河原を小牛大の大きな岩鹿がノソノソ水を渡つて下つて行きました。河原を四五丁も下つた時又先きの岩鹿がゐて私の來るのを耳を立て、見てゐましたが石を抛けたら今度は非常な勢で逃げ出しました。四時二十分青木の湯へ歸着暫時休息主人に今日の山の話しなどして四時五十分出發しました。汽車の發車時刻を八時二十分と思ひ違ひしてゐましたので充分時間がありますので態々祖母石を廻つて八時五分停車場に來て見ますと汽車は八時一分に出たばかりでした。三時間も待たされて十一時の終列車で歸りました。御參考にもなりますまいが今回登山中に撮影しました拙劣な寫眞四五枚別封御送りしましたから御笑覽を願います。

(大正十年五月橋本欽四郎)

△工石登山會(大正十年五月十五日)

工石山は當高知市を北に去る約五里、高一七七米突に過ぎずと雖も劍山脈に屬し所謂土佐中央山脈の秀峯をなし秩父古生層より成る、大半國有林にして蒼鬱たる深林を以て蔽はる、土佐は原來山岳國なれど交通不便なるを以て當市より一日行程を以て登り得る恰好の山少く唯本山のみは高きに於て又其森林の美、奇巖の雄大、眺望の佳、珍植物に富める點に於て優れるものあるを以て登山會を催すこと二回、本日又決行せり、距離は當市より土佐山村高川迄三里、高川より頂上迄二里、時間往復十二時間餘を要せり、參加者會社員、實業家、官吏、學生等六十餘名、本日快晴なりしを

以て石槌、劍山其他四國山脈を構成せる大山高岳大半遠望することを得たり、所産植物の主なるもの左の如し。

シコクスミレ、チャボツメレンゲ、フタバラン、コフタバラン、ヒトツボクロ、ヒトハラン、ヒメカウモリサウ、クサノソウバナキク、サバノヲ、トキハシダ、ヨコグラクバナ。(吉永虎馬)

△拜啓。昔小牧から望める樽前は殘雪猶點在し、中腹のガンビ帯の新緑美しく候。フウフシヌブリは殘雪全く見えず候も其の右手の小漁山の殘雪は素敵な輝きを示し居り、エエニヨ岳等顔色なき有様に候。樽前の左手に續くホロホロヌブリ來馬山の一線は次第に殘雪上昇し山の輪廓日々不明瞭に相成り行き居り候。

五月十五日單身ベツ川を上り樽前西岳の西ツネを下る(陸地測量部地形圖樽前圖幅)小徑により西岳に上る豫定の處最初其徑を見出さず四尺乃至五尺巾の可成良好なラウア臺地の路を遂にタプロブの下迄導かれて引返し途中豫定の支徑を見出して約一斗程を前進したるも徑深く斷念して下山致し候、ベツベツ川は上流スパラシキ柱狀節理あるラウアの懸崖の露出あるその上に垣々たる高臺の森林にて多くのハンギングヴァアリーを垂下し居り候、高臺の西端崖上の眺望は白老岳、ホロホロヌブリ、オロフレ岳來馬岳等の觀望臺としては非常に壯觀に候。

五月廿日は北大スキー部の人々と樽前に登リニシタツ川上流より東岳に登り火口原を西岳に廻り覺生登路を下山致し候がガス深く山を見ずして下山致し候。(昔小牧竹内亮)

# 會報

## ○第十三回小集會記事

大正十年四月十七日麴町區紀尾井町皆香園に於て、午後一時半より高野幹事司會者として開催、左の講演ありたり。

一、山と日本人と 別所梅之助氏

詳細は載せて本號の巻頭にあり。

二、本會の成立に就て 高野 鷹藏氏

同氏が高頭、武田、小島其他の同志諸君と山岳會を創立せし當時の苦心談を約一時間に亘りて説かれたるは、新らしき會員に取りては意外の事多かりしならんと思はる。

三、山と氣象 中村左衛門太郎氏

同氏が多年研究せられたる山の氣象に就て、専門の知識を分りよく講演せられ、聴衆を益すること大なりき。

斯くて餘談に時の移るを覺えず、散會したるは午後六時を過ぐるに四十分。

當日來會者は村越匡次、松井幹雄、黒田孝雄、別所梅之助、冠松次郎、五十嵐芳雄、藤島敏男、中村左衛門太郎、高橋鑑三郎、高田達也、小瀬孫作、横山光太郎、六鶴保、松本善二、久野政雄、惠澤福三、梅澤親光、高野鷹藏、高頭仁兵衛、木暮理太郎の二十氏にして、他に二三の會員外來會者ありき。

## ○第十四回大會記事

大正十年五月八日京橋區西紺屋町十九番地東京地學協會に於て開會。例年赤坂溜池町三會堂を會場とせしも、本年は都合ありて右に變更したれば會場稍や狹隘を告げ、出品物全部を陳列する能はず、來會者の接待意の如くならざりしは遺憾とする所也。午前十時陳列場を開き、午後に至りて來會者踵を接し、一時は頗る混雜を呈したり。六時に至るや陳列場を閉ち、三階の大廣間にて講演會を開き、梅澤幹事開會の辭を述べ、次で會員志村

寛氏は新高山の登攀に就て興味多き講演を試み、最後に幹事木暮理太郎氏は利根川水源地の山々に關し、幻燈を用ゐて其旅行談と共に詳細なる説明を加へ、十時半閉會したり。會員及會員外の入場者合せて二百餘名に達したり。當日出品物大略左の如し。

○白井光太郎氏出品

- 加子母山伐木繪卷 箱入 二
- 日光山繪卷 上下 二
- 日光山勝景産物圖 一
- 富士山繪卷 一
- 吉野群山志 四
- 富士登山錦繪 二
- 日光景色 五枚
- 吉野群峯及附圖 二
- 富士山道しるべ 一

○高木菊三郎氏出品

- 萬國地圖 一折
- 長崎大地圖(享和頃) 一折
- 萬國一覽圖 文化六年古屋野寛春著
- 奥羽三景之内米澤之圖 貞秀畫 三枚
- 新譯和蘭國全圖 鷹見泉石 一折
- 日光山瀧見之圖 貞秀畫 一
- 錦繪三枚
- 龍華寺境内の圖 一枚
- 清朝一統之圖(天保六年版) 二折
- 富嶽三十六景之内 北齋畫 錦繪五枚
- 東海道五十三次之内 廣重畫 十五枚
- 川崎、坂之下、箱根、大磯、沼津、江尻、岡部、舞坂、

掛川、二川、四日市、日坂、土山、龜山外一枚

朝異一覽 日本支那朝鮮之圖 天保六年 一折

諸國名橋奇觀行道山雲のかけはしの圖 北洲畫 一枚

千鳥一覽 北海道入戲圖 一枚

藝州より長州萩并行程繪圖 寫本 一折

防州岩國より新湊迄 鳴關新譯地球全圖 浪華 橋本直政製 寬政八年

大日本分境圖成 安政二年 二冊

伊勢二見浦名所圖記 丹祿彩色 一折

諸國神社佛閣お札集之一部 暈距尺表一冊並に暈距尺 三十種

○磯貝藤太郎氏出品

- 信州平穩溫泉太古岩之圖 一
- 武州玉川上流材木流し之圖 一
- 上州白根山より笠ヶ嶽及妙高山を望む圖 一

○遠藤泰一氏出品

ツバメオモト(生品) ミヤマナツナ(生品)

○松平秋雄氏出品

庚申草 天然紀念物

尙ほ地學協會にては、特に多數の貴重なる圖書を貸與陳列されたるは、深く感謝する所也。

○第十四回小集會記事

大正十年六月五日麴町區清水谷皆香園に於て開會、午後一時半より左の講演ありたり。

一、瑞西の旅

辻村伊助氏

二、臺灣の山と生蕃

志村寛氏

三、大方山と富士の裾野

松本善二氏

右終つて例の如く雑談に花を咲かし、七時散會したり。尙ほ次會は來る九月十八日(第三日曜日)同所に於て開催すべし。當日の來會者は、高畑棟材、飯塚篤之助、村越匡次、川口敏郎、大塚泰亮、堀龜雄、松本善二、黒田孝雄、高田達也、久野政雄、志村寛、磯貝藤太郎、田澤昌介、今村巳之助、古川雉郎、沼井鐵太郎、神谷恭、佐藤文二、松井幹雄、青木軍二郎、六鶴保、吉田直吉、高野鷹藏、梅澤親光、高頭仁兵衛、木暮理太郎の二十六氏及會員外四名なりき。

○會務報告

大正十年四月十七日麴町區清水谷皆香園に於て幹事會を開き、第十四回大會に關する件を協議す。

(出席幹事)木暮、高野、高頭、梅澤。

大正十年六月五日右同所に於て幹事會を開き、會員章引換、事務取扱方、本會基本金等に關する件に就て協議す。終て入會者の詮衡あり。

(出席幹事)木暮、高野、高頭、田部、梅澤。

○交換及寄贈圖書

ツ  
ー  
リ  
ス  
ト  
第  
九  
年  
第  
二  
、  
三  
號

歷  
史  
地  
理  
第  
卅  
七  
卷  
第  
三  
、  
四  
、  
五  
、  
六  
號

地  
質  
學  
雜  
誌  
第  
三  
百  
廿  
九  
、  
卅  
、  
卅  
一  
、  
卅  
二  
號

會  
報

○會員住所移轉○退會及死亡者○無効會員  
○京番號○交換及寄贈圖書

一  
二  
一

- 地學雜誌 第三百八十七、八、九、三百九十號  
 アルカウ趣味 第八年第四、五、六號  
 神戸櫻楓會々報 第六、七回  
 史蹟名勝天然紀念物 第四卷第三、四、五號  
 山とスキー 第一年第一、二號  
 登高山(翠巖山)第三年  
 自然史, Vol. XX, No. 5. Vol. XXI, No. 1  
 New York, 1920-1921.  
 Trail and Timberline, Nos. 30-32 Denver, 1921.  
 Colorado Chautauqua Bulletin, Vol. X, Nos. 4-6.  
 Boulder, 1921.  
 L'Echo Des Alpes, 57me Année, Nos. 2-4. Genève, 1921.  
 Geographical Journal, Vol. LVII, Nos. 2-5. London, 1921.  
 Annual of the Mountain Club of South Africa, No. 23.  
 Cape Town, 1920.  
 Sierra Club Bulletin, Vol. XI, No. 2. San Francisco, 1921.  
 Climbers' Club Journal, Vol. II, No. 4. London, 1920.  
 Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. XVI, No. 91.  
 Edinburgh, 1921.  
 Bird-Lore, Vol. XXIII, No. 2. New York, 1921.  
 Mountaineer, Vol. XIII, Nos. 4-7. Seattle, 1921.  
 Mountaineer, Prospectus number, Supplement  
 to the April Bulletin // //  
 Canadian Alpine Journal, Vol. XI. Banff, 1902.

- Bulletin of the Geographical Society of  
 Philadelphia, Vol. XIX, No. 1. Philadelphia, 1921.  
 Mid-Pacific Magazine, Vol. XXI, Nos. 4&5. Honolulu, 1921.  
 Field and Forest Club, March-April, May-June, 1921.  
 Boston, 1921.  
 Club Alpico Italiano, Revista Mesile,  
 Vol. XI, num. 1-2-3. Torino, 1921.  
 Catalogue of Secondhand Books and Surplus  
 Stock on Natural History New Series XI.  
 New York, 1921.  
 Il Gemino, Trnmonito  
 —DI—  
 Isola Del Gran Sasso (Padova, 1920) By P. Verma.  
**○本會規則拔萃(大正九年九月改正)**  
 第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス  
 第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又  
 時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ  
 第五條 本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キ一切ノ會務ヲ處理  
 シム  
 第六條 本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セシム  
 第十條 本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ  
 幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルルモノトス  
 第十一條 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所

姓名年齢及び職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）

第十二條 入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス  
第十三條 入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直チニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルベシ

第十四條 正會員ハ會費年金參圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付ス可キモノトス、三月一日以後ノ納付者ハ特別取扱手数料トシテ金五拾錢ヲ附加シテ拂込マル可ク、尙ホ三月末日迄ニ納付セザル者ハ之ヲ除名ス可シ（以下略）

現任幹事（七名）

木暮理太郎 中村清太郎 高野 鷹藏 高頭仁兵衛  
武田 久吉 田部 重治 梅澤 親光

評議員（十四名）

城 數 馬（在朝鮮） 小島 久太（在桑港） 近藤 茂吉  
三枝 守博 辻本 滿丸 辻村 伊助 山川 默  
及び現任幹事七名

○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと。  
一、用紙は大體半紙大又は半紙半枚大、天地左右をあげ、每紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、每紙同一行数

のこと。

一、、、。、（）等は各一字劃宛とし、行を更むる時は一字下げのこと。

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして宛字をなす時は其旨を括弧内に明記す可きこと。

一、原稿は必ず左記宛て送付のこと。

東京市本郷區駒込蓬萊町三十一木暮方、山岳編輯所

編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、殊に挿圖寫眞等のある原稿は其調製方印刷方につき一應御相談あらば幸なり（スケッチは複製の際誤記脱漏等の憂あるを以て豫め本誌面に適當せる大きに調製あらんことを望む）

一、原稿は一切返戻せず。

大正十年七月二十五日印刷  
大正十年七月二十八日發行

【定價金壹圓貳拾錢】



發行兼編輯者

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

印刷者

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島連太郎

印刷所

東京市神田區美土代町二丁目一番地

三秀舍

發行所

東京市麴町區富士見町四丁目六番地

日本山岳會

振替口座東京四八二九番

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂



The Journal of the Japanese Alpine Club

# SANGAKU

Vol. XVI

1921

No. 1